

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報

18

平成14年度

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

2004年3月

序

鹿児島大学キャンパスには、後期旧石器時代から近代までの、貴重な遺跡が包蔵されていることが、鹿児島大学埋蔵文化財調査室の発掘調査によって、次第に明らかにされています。その成果は、これまでに埋蔵文化財調査室年報（Vol.1-17）として逐次報告されてきました。

今回、平成14年度の調査結果の報告として、鹿児島大学調査室年報 Vol.18 を刊行いたします。平成14年度には郡元キャンパスにおいて発掘調査3件、立会い調査23件、桜ヶ丘キャンパスにおいては、立会い調査1件が行われました。本年報には、それらの調査研究の成果の概要が掲載されています。

特に郡元キャンパスにおいては、注目すべき成果がでています。理学部改修地では、弥生時代前期末から中期初頭にかけての、一定の規模をもった集落の存在が、環濠らしき大溝の存在から想定されており、それに西接した地点、理工系総合研究棟建築に伴う調査では、弥生時代前期ごろから、水田を営んでいたことが判明しました。鹿児島ではほとんどない、生産域と居住域の有機的関係が分かる貴重な遺跡なのです。この地では、この関係性はいったん途絶え、古墳時代後半期には再び行われます。今後の資料の整理・研究によって、その詳細が明らかになることを期待しています。

また、VBL 棟建設地においては、河川跡が検出され、最下部には弥生時代後期の木杭列が検出されており、これは水田に水を引くための灌漑施設、合掌型堰である可能性がでてきました。当時から河川を利用した生産体系を持っていたことになります。この形状の堰も県内では初めての検出例であり、弥生時代後期に属するとなると、全国的に珍しい例となります。

また、付録1としては、平成4年度から翌年度に行われた郡元団地L-6区（中央図書館増築地）の発掘調査も掲載しております。ここでは、郡元キャンパス内における古墳時代後半期の、当時の定住域とはやや離れた箇所の住居跡が検出されました。当時の居住における選地・占地条件を考えるうえでの貴重な遺跡です。

付録2は、中央図書館増築地第1次調査における、土壤プラント・オパール定量分析により、古墳時代後半期ごろのある段階には、畑栽培による稻作が行われ、その後、湿润な環境となり、水田稻作が営まれていたものと分析されております。

現在、キャンパス内では、研究、教育の発展に伴って、多くの建物の建築や周辺整備などが行われ、それに先立つて必要な埋蔵文化財の発掘調査が行われています。しかし、年々増加する発掘調査や埋蔵物に対する調査および研究体制、保管体制が十分でないのが現状です。特に、従来から言われているように、遺跡から出土する膨大な量の遺物の保管場所の確保は困難を極めています。また、迅速な調査および研究を遂行するためのスタッフの数も十分とは言えないのが現状です。独立行政法人化後も、これらの貴重な大学の財産、ひいては国民の財産としての埋蔵文化財の調査、および研究を行うための体制の実現について、重ねて全学的なご理解、ご支援をお願いする次第です。

最後に、埋蔵文化財調査室のスタッフによる精力的かつ地道な調査・研究の積み重ねにより、このような立派な年報にまとめられたことに対し、感謝の意を表したいと存じます。

平成16年2月

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会
委員長 佐々木 修

例言

1. 本年報は、鹿児島大学構内において、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が2002(平成14)年度に行なった調査活動の成果をまとめたものである。
なお、1992・1993(平成4・5)年度に行った郡元団地L-6区(図書館増築地A・B地点)における発掘調査報告を付録1として掲載した。付録2には、郡元団地L-6区(図書館増築地A地点)の土壤プラント・オパール定量分析の結果報告を掲載した。
2. 本書に掲載している発掘調査及び立会調査は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が担当した。調査時における図面・写真的担当は以下の通りである。
2: 中村直子・新里貴之・松本益幸(王力明)・有村航平・安座間充・鯖川章子・
興梠真利子・新原和子・吉永幸子
付録: 中村・古澤生・大西智和・峰山いづみ・鯖川章子・池口洋人・今村知子・上地浩・
小原愛・甲斐光代・坂本裕子・前幸男・趙國興・中村由美子・西中川泉・西谷彰・
星野恵美・横手浩二郎
3. 本書の作成にあたっては、埋蔵文化財調査室が行なった。担当者は以下の通りである。
実測(2: 中村直子, 付録: 有村航平・青山奈緒)
写真(中村・青山)
製図(1: 新里貴之, 2: 中村, 付録: 新里・中村・青山)
作表(1: 新里, 2: 中村, 付録: 有村・新里・中村)
執筆(1: 新里, 2: 中村, 受贈図書: 有村, 付録: 新里)
概要説文(新里)
編集(新里)
4. 郡元団地L-6区(中央図書館増築地A・B地点)の出土遺物について、陶磁器は、渡辺芳郎氏(鹿児島大学法文学部), 石器については、横手浩二郎氏(鹿児島県立埋蔵文化財センター)の、石材については大塚裕之氏(鹿児島大学総合研究博物館)にご教授をいただいた。X線写真については、永瀬功治氏(鹿児島県立埋蔵文化財センター)の、住居跡内の赤色顔料の分析については、大久保浩二氏(現・川内市立隈之城小学校教諭)にご協力をいただいた。また、付録2のプラントオパール定量分析については、藤原宏志氏(宮崎大学)の玉稿を賜った。サマリーは、新田栄治(鹿児島大学埋蔵文化財調査室長)が校正した。
5. 発掘調査による遺物の保管は、埋蔵文化財調査室の管理のもと、各学部、部局が収蔵している。また、図面・写真などの資料は埋蔵文化財調査室に保管している。

凡例

- 1 昭和 60 年 6 月 1 日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれから埋蔵文化財調査室に便であるように、鹿児島大学構内座標を郡元団地と桜ヶ丘団地（旧宇宿団地）とに設定した。その設置基準は、以下の通りである。
 - (1) 郡元団地では、国土座標第 2 座標系(X=-158.200, Y=-42. 400)を基点として一辺 50m の方形地区割りを行なった(Fig.3 参照)。
 - (2) 桜ヶ丘団地では、国土座標第 2 座標系(X=-161. 600, Y=-44.400)を基点として一辺 50m の方形地区割りを行なった (Fig.4 参照)。
- 2 本年報において報告を行なった地点については、一部の立会調査地点を除き、Fig.2~4 にその位置を記してある。
- 3 本年報におけるレベル高は、すべて海拔を表し、方位は真北方向を示す。
- 4 本書で使用した造構の表示記号は、以下の通りである。
SK : 土坑状造構 SD : 溝状造構 P : ピット
- 5 2・付編で使用した土層の色調は『新版標準土色帖』(農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
- 6 造物に関しては観察表を作成した。その標記、表現については以下の通りである。
調整 : 調整名称の前の()は、調整方向を表す。(ー):横位方向、(|):縦位、(△):左上がりの斜位、(▽):右上がりの斜位、(?):方向不明、とした。→は、調整の新旧関係を表す。
色調 : 『新版標準土色帖』(農林水産技術会議事務局監修)を使用し、この色調に当てはまらないものについては、「～に類似」と表記した。
胎土 : 粒子の大きさで、砾(2mm～)・粗砂粒(1～2mm)・砂粒(0.2～1mm)・細砂粒(0.2mm以下)に分けた。また、砂粒の種類については、特定できないものは、その色調で表記した。胎土中の砂粒の多さについては、便宜的に 1～9 の 9 段階に分けた。9 : 20% 以上, 8 : 15~20%, 7 : 15% 前後, 6 : 10~15%, 5 : 10% 前後, 4 : 5~10% 未満, 3 : 5% 前後, 2 : 1~5% 未満 1 : 1% 以下、とした。
サイズ : 復元によるサイズは、()をつけた。
- 7 本文中の造物番号は、挿図、図版、造物観察表と一致している。

目次

1 平成 14 年度（2002 年 4 月・2003 年 3 月）の調査概要	1
1.1 鹿児島大学構内遺跡の立地と環境	1
1.2 調査概要	1
2 平成 14 年度（2002 年 4 月・2003 年 3 月）の立会い調査	6
受贈図書	15
調査室要項	23
 付編 1 郡元団地 L-6 区（中央図書館増築地 A・B 地点）における発掘調査	25
1 調査にいたる経過	25
2 調査体制	25
3 調査の経過	25
4 層位	25
5 遺構・遺物	29
5-1. A・B 地点 1 層（表土・出土地不明）の出土遺物	29
5-2. A・B 地点 2 層出土遺物	31
5-3. A・B 地点 3 層上面検出遺構	33
5-4. A・B 地点 3 層出土遺物	35
5-5. A・B 地点 4 層上面検出遺構	36
5-6. A・B 地点 4 層出土遺物	41
5-7. A・B 地点 5 層上面検出遺構	54
5-8. A・B 地点 5 層出土遺物	67
6 まとめ	68
 付編 2 郡元団地 L-6 区（中央図書館増築地 A 地点北壁） におけるプラント・オパール分析結果報告....	75

1 平成14年度(2002年4月-2003年3月)の調査概要

平成14(2002)年度は、発掘調査が郡元団地で3件行われた。立会調査は、郡元団地で23件、桜ヶ丘団地で1件、行われた。

1.1 鹿児島大学構内遺跡の立地と環境

鹿児島大学構内遺跡が所在する鹿児島市は、薩摩半島の北東部に位置する。東側には鹿児島湾(錦江湾)が広がり、他の三方は姶良カルデラに由来するシラス台地に囲まれている。本書に掲載する調査地点は、鹿児島大学構内の郡元団地と桜ヶ丘団地で、それぞれを、「鹿児島大学構内遺跡郡元団地」、「同、桜ヶ丘団地」と呼んでいる。

郡元団地は沖積平野の南端部付近に位置し、標高約7mを測る。従来から周知の遺跡として知られており、校舎などの建設に伴う事前の発掘調査も多く行われている。昭和59年までは字名などが遺跡の名称として用いられており、県立医大遺跡、付属中学校敷地内遺跡、釣田遺跡、水町遺跡も郡元団地内の遺跡である¹⁾。郡元団地では古墳時代の住居跡群が多く発見され、現在、3つの集住地域が把握できている。一つは郡元キャンパスのほぼ中央部、もう一つは南西部で、いずれも微高地上に形成されている。中央に位置する住居群のすぐ北側には河川流路が確認されている。河川の中からは弥生時代から古墳時代にかけての木製品や木杭が出土している。平成9年度の工学部における調査では、弥生時代の水田跡が検出されている。古墳時代の水田跡は現在のところ、構内ではまだ発見されていないが、古墳時代の包含層には大量のイネのプランツ・オ・パールが含まれており²⁾、稻作が継続的に行われていたことがわかる。

桜ヶ丘団地は郡元団地から南に約2.5kmの亀ヶ原台地上に位置し、標高約70mを測る。昭和60年に埋蔵文化財調査室が設置されてからは、鹿児島大学構内遺跡宇宙団地と呼称していたが、キャンパス名の変更に伴い、桜ヶ丘団地と呼ぶ。近隣の台地上には、旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺跡が点在しており、桜ヶ丘団地でも同様の時期の遺物が出土している。また、縄文時代早期、弥生時代前期・終末期の住居跡も確認されている³⁾。

1.2 調査概要(Tab.1)

2001-2 郡元団地J-7-8区(理学部改修地)

理学部改修地は、理学部1号館の中庭に位置する。平成14年3月2日より、調査を開始し、9月13日に終了した。しかし、大学施設部の工事範囲変更により、改めて

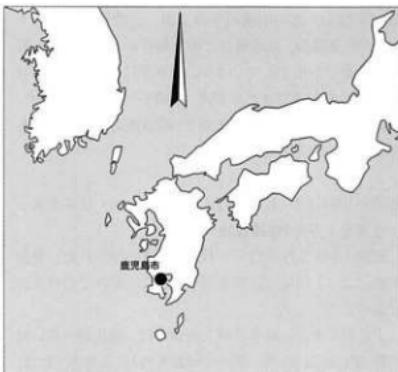


Fig.1 鹿児島市の位置

9月17日から調査を行い、10月18日に調査を終了した。

同地点は、古墳時代後半期の住居跡を中心に、溝、土坑など約80基の遺構群が検出され、古墳時代の集落が一定期間占地していることを示している。

また、この古墳時代の集落跡の、層位の下位のレベルより、環濠状の溝が検出され、その溝内より弥生時代前期・中期初頭の土器がまとまって出土した。土器は、壺・壺・高杯・鉢などで、未だ資料的にデータの少ない同期の編年研究に大いに寄与するものである。さらに、古墳時代方形住居群の下位より、円形住居跡が検出されたが、その床面炭化物の放射性炭素年代測定により、弥生時代終末期頃のものであるとの結果がでている。

古墳時代の住居跡には、数パターンの炉のつくりかたや屋内炉内埋設土器の器種選定、住居の廃棄パターンなど、今後の詳細な研究が必要であり、そのデータを蓄積することのできる重要な遺跡である。

2002-1 郡元団地J-K-9-10区(理工系総合研究棟建設地)

理工系総合研究棟は、便宜的に総合研究棟IIと呼んでいた箇所である。平成14年度4月20-10月31日、同年12月11日-平成15年2月20日まで継続して行なわれた。中断理由は、大学施設部による建物の繩張り設計変更によるものであった。

発掘調査では、弥生時代～古墳時代にかけての生産遺跡と判断された。弥生時代前期と考えられる畦状遺構、同中期前半の水田跡(溝状遺構6条・小ビット群)、古墳時代後半期の溝状遺構1条とビット群、古代の「波板

状遺構」などが検出されている。弥生時代前期～中期の土層からは、イネのプランツ・オパールが多量に確認され、水田を行っていたものと推定される。遺物は、出土量が少なく、弥生中期前半の土器、古墳時代後半の土器、古代土器類、須恵器などの小破片のほかに磨製・打製石器などが出土している。この東側に隣接して、同時期の集落跡が確認されており（2001-2理学部改修地）、生活域との機械的空間配置など、同地域の生活の一端を窺えるものであるといえる。

2002-2(H-12・13区)VBL[ベンチャービジネス・ラボラトリ]棟建設地)

平成15年3月3日～8月29日まで行われた。発掘調査により、同地点は弥生時代・近代にかけての河川跡であると判明した。

中近世と考えられる2層上面からは、横出幅の狭い河川跡（約3m程度）や、烟跡が確認された。4層以下には、切り合い関係から見て、数回の濁流を伴う河川跡が確認されたが、これらは5m以上の幅である。最下位の泥炭層に突き刺さる形で、数条の木杭列が確認された。そのうちの1本を放射性炭素年代測定した結果、「cal.130AD」と

された。木杭列の配置とその傾きからは、合掌型屋である可能性があり、河川を利用した灌漑施設を設けていたと思われる。また、古墳時代前半のある段階に東原式の甕を破砕し、埋めた遺構も確認された。河川沿いでの祭祀行為である可能性が高い。绳文時代前半～中期初頭の深浦式や晩期の黒川式、石造などは、かなり水磨を受けており、上流から流れてきたものであろう。刻目突帯土器-古代の土器は、完形品に近い形で出土することが多く、特に弥生時代後期～終末期の土器は完形率が高い。石器や三角形状の石庖丁も確認されている。また、弥生時代前半～中期頃にかけての土層からはイネのプランツ・オパールやムギが検出されている。当時、この河川を利用した、生産体系が確立されていたと考えられる。

註

- 1)松永幸男1986「第II章 鹿児島大学構内遺跡の位置と環境」「鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報」1 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 2)付録2参照
- 3)新里貴之2002「付録 桜ヶ丘団地1-8区（難治性ウイルス疾患研究センター増築地）の発掘調査」「鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報」16 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

Tab.1 平成12年度調査一覧

種類	調査コード	地区	調査	期間
発掘調査	2001-2	J-7・8区	鶴元団地 理学部改修に伴う発掘調査	2002年3月2日～9月13日、9月17日～10月18日
	2002-1	J-K-9・10区	鶴元団地 工程系統研究棟（総合研究棟）建設に伴う発掘調査	2002年4月20日～10月31日、11月1日～2003年2月20日
	2002-2	H-12・13区	鶴元団地 VBL[ベンチャービジネス・ラボラトリ]棟建設に伴う発掘調査	2003年3月3日～8月29日
立会調査	2002-A	I-6区	鶴元団地 路面確認調査工事に伴う立会調査（消火栓）	2002年10月24日
	2002-B	I-8～10区	鶴元団地 理学部校舎改修その他の工事に伴う立会調査（配水管）	2002年5月22日
	2002-C	J-K-8・9区	鶴元団地 理学部校舎改修その他の工事に伴う立会調査（電柱）	2002年7月22日
	2002-D	J-K-8～10区	鶴元団地 理学部校舎改修その他の機械設備工事に伴う立会調査（ガス管）	2002年7月18日～8月8日
	2002-E	J-K-7区	鶴元団地 理学部校舎新設その他の機械設備工事に伴う立会調査（配水管）	2002年8月29日～9月18日
	2002-F	I-8・9区	鶴元団地 理学部校舎改修その他の工事に伴う立会調査（電気配管）	2002年9月18日～10月23日
	2002-G	J-L-1・10区	鶴元団地 工程系統研究棟新設電気設備工事に伴う立会調査（電気配管）	2002年11月1日～9日
	2002-H	J-K-10区	鶴元団地 工程系統研究棟新設排水設備工事に伴う立会調査（給排水管）	2002年12月9日～12月11日
	2002-I	J-7区	鶴元団地 理学部校舎改修その他の工事に伴う立会調査（ロープ路敷）	2002年12月10日（既掘部）
	2002-J	D-4区	鶴元団地 高倉看板設置工事に伴う立会調査（看板設置）	2002年12月10日
	2002-K	J-8区	鶴元団地 理学部校舎改修その他の機械設備工事に伴う立会調査（排水管）	2002年12月11日
	2002-L	K-7区	鶴元団地 理学部校舎改修その他の工事に伴う立会調査（樹木移植）	2002年12月26日（既掘部）
	2002-M	J-8区	鶴元団地 理学部校舎改修その他の工事に伴う立会調査（敷地）	2003年1月21日（既掘部）
	2002-N	I-7区	鶴元団地 理学部講義棟改修工事に伴う立会調査（階段基礎）	2003年1月22日
	2002-R	J-7区	鶴元団地 理学部校舎改修工事に伴う立会調査（階段敷土）	2003年2月4日（既掘部）
	2002-O	E-8区	桜ヶ丘団地 基幹管開工工事に伴う立会調査（厨戸改修）	2003年2月12日（既掘部）
	2002-P	F-8区	鶴元団地 食育部実験ガス管設置工事に伴う立会調査（ガス管）	2003年2月27日
	2002-Q	J-8区	鶴元団地 理学部校舎改修その他の工事に伴う立会調査（外灯設置）	2003年3月11日（既掘部）
	2002-S	K-8区	鶴元団地 理学部校舎改修その他の工事に伴う立会調査（噴水）	2003年3月17日
	2002-T	I-7区	鶴元団地 理学部講義棟改修工事に伴う立会調査（ガス管）	2003年3月18日
	2002-U	K-8区	鶴元団地 理学部校舎改修工事その他の電気設備工事に伴う立会調査（電気配管）	2003年3月19日
	2002-V	D-10区	鶴元団地 育生部資源有機肥料リサイクル設置工事に伴う立会調査（基礎埋設）	2003年3月20日
	2002-W	M-O-6・7区	鶴元団地 教育部新幹線並木設置工事に伴う立会調査（樹木移植）	2003年3月20～21日
	2002-X	F-8区	鶴元団地 埋設土実験に伴うガス管設置工事に伴う立会調査（ガス管）	2003年3月24日

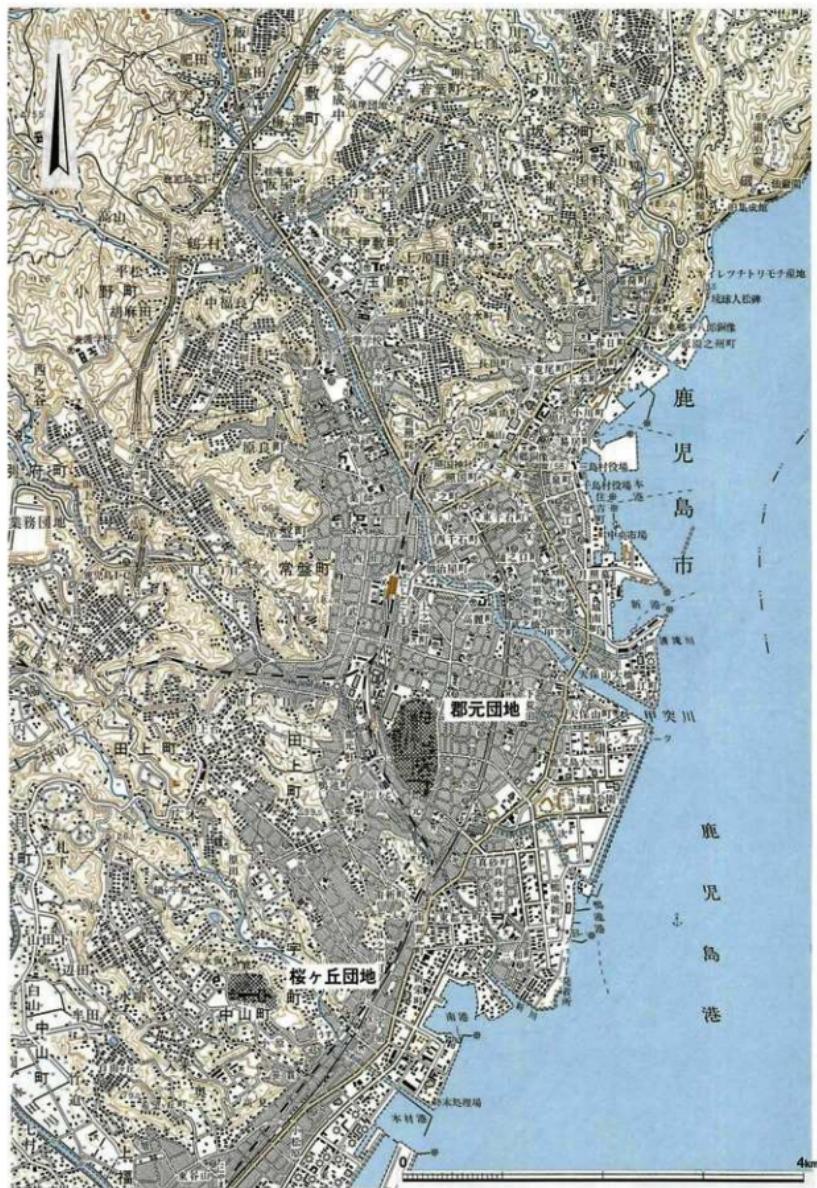


Fig.2 鹿児島大学構内遺跡の位置(S=1/50000)

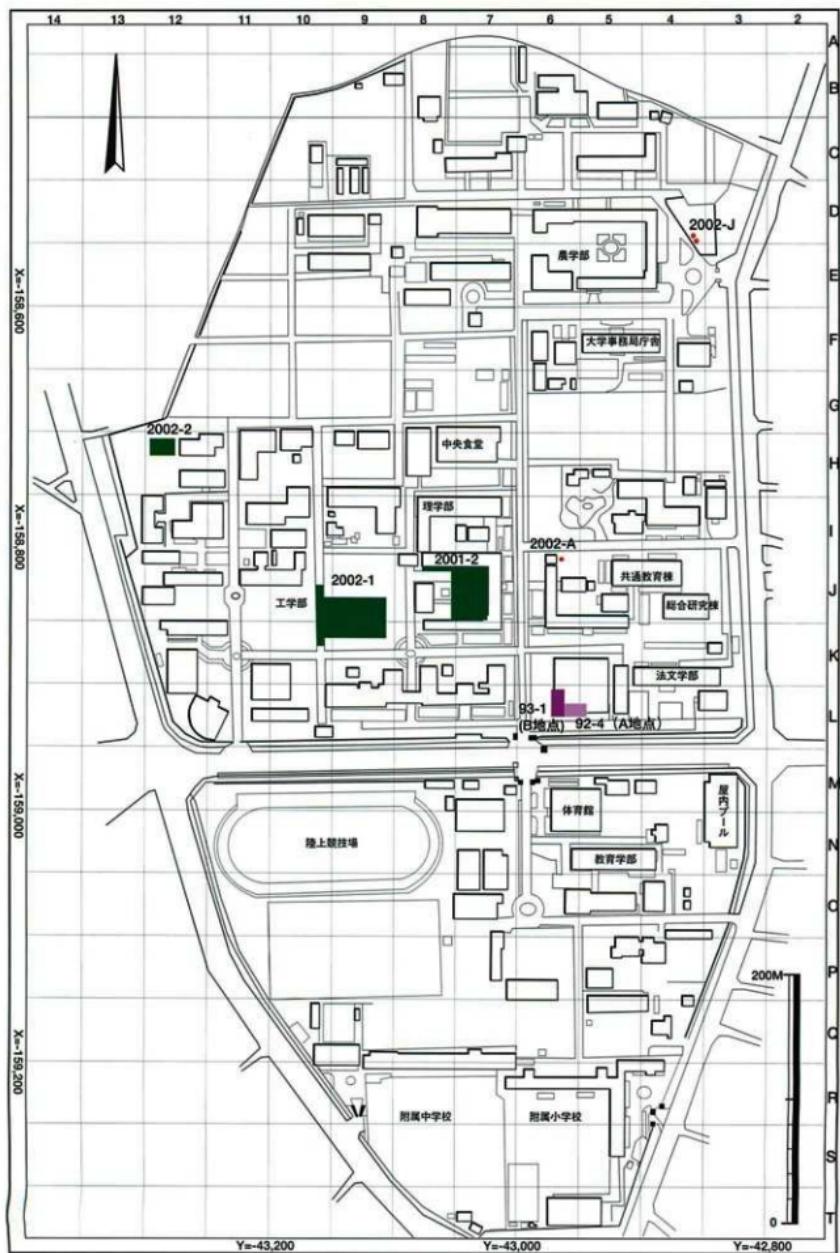


Fig.3 都元団地構内図(S=1/4000)

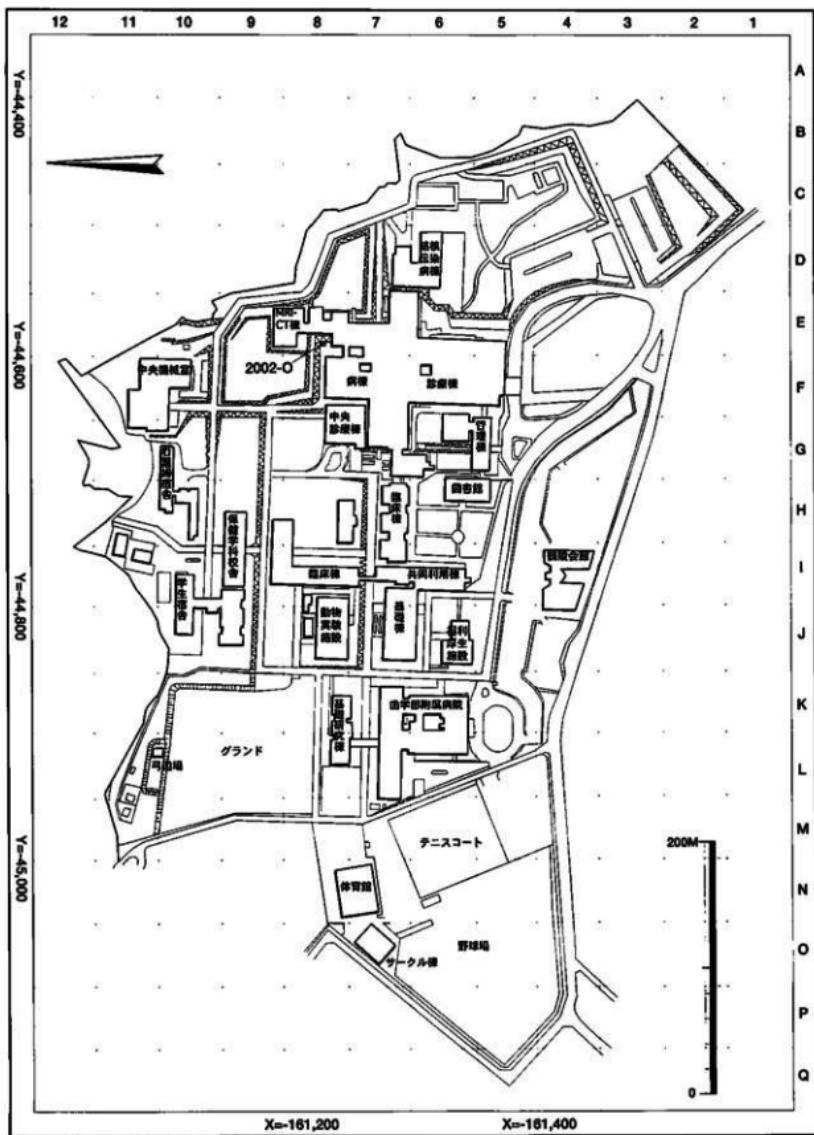


Fig.4 核ヶ丘公園地図内図(S=1/4000)

2 平成14年度(2002年4月-2003年3月)の立会調査

1章のTab. I にあるよう
に、平成14年度は24件の立会調査を実施した。団地別に見ると、郡元団地23件、桜ヶ丘団地1件で、なかでも理工系総合研究棟建設に伴う立会調査が多かった。これらのうち、2002-I・2002-L・2002-M・2002-N・2002-P・2002-Q・2002-Rは掘削が表土層および既掘部の範囲でおさまっており、埋蔵文化財への影響はなかった。

以下、プライマリーな土層が確認されたものについて、立会調査ごとに説明す

2002-A 漏水確認掘削工

事に伴う立会調査

(Fig.3 構内図)

調査地点 共通教育棟I号
館北側車庫近く(郡元団

地1-6区)

調査期間 2002年10月24日

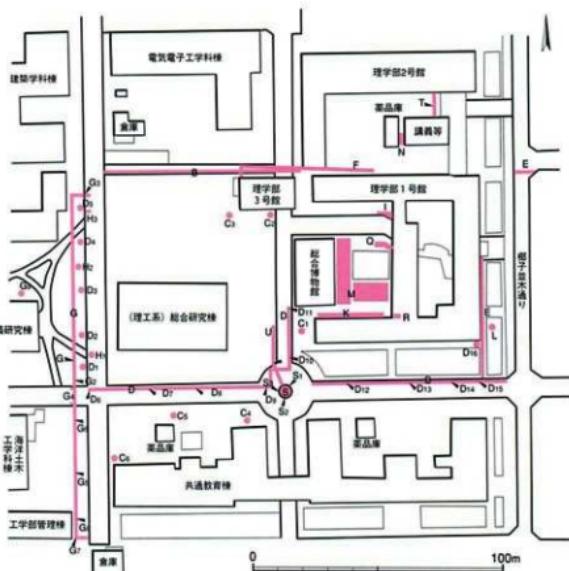


Fig.5 立会調査区の位置(S=1/2000)

本学総合研究博物館の橋本達也氏より掘削工事を行って
いる旨、連絡があったので、埋蔵文化財調査室員が工事地
点に出向いたところ、消火栓漏水のため掘削工事を行つ
ていた。工事に立会っていた施設部設備課職員に学内掘
削工事の際には埋蔵文化財調査室の立会調査が必要であ
ることを説明し、急速、立会調査を実施した。

掘削場所は1カ所で、 $1 \times 0.6m$ の面積を地表下75cm
にわたって掘削した。基本層位として、1-4層までを確認

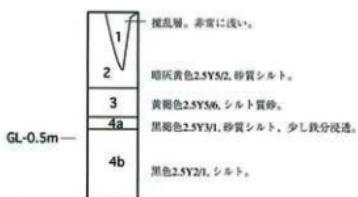


Fig.6 A 土層柱状図



Tab.2 2002-A 造物観察

No.	層	器種	部位	色調	混和材	混和材の 多さ	調整	備考
1	4層	甕	口縁部	外面: 深黄色2.5YB/1を基調 裏: 石英、粗砂・砂粒: 石 どうるが、焼のため墨。内面: 黄・角せん石・白色粒。 灰白色2.5YB/2と灰色SY5/1 細砂粒も含む。 (透明)		3	外面: ナゲ、内面: ナゲ(+) 外面: スス付君	
2	4層	甕	脚部下 半	外面: 深黄色2.5YB/2とぶ き: 赤色粒、粗砂粒・砂 い體色5Y6/4(加熱部分)、裡: 赤色粒・角せん石・白 色粒、細砂粒も含む。		3	外面: 板状の工具による上 面: スス付君、二次的 ナゲ(+)。内面: ハケ(-)の 熱を受けている ナゲ。	
3	4層	甕	脚台付 近	外面: 塗褐色10R8/6、脚部 裡: 石英、粗砂粒・砂粒: 裏: 烧色2.5YB/6、 面: 黄灰色2.5YB/1。		3	外面: ユビナゲ(+)、脚部 外表面: 二次的加熱を受けて 内面: 離地なナゲ(-)、体 いる。 内面: ハケ(-)ナゲ。	
4	4層	甕	脚台	外面: にぶら、黄褐色10R7/4、 粗砂粒: 赤色粒、砂粒: 赤 色粒・石英・黑色粒。 内面: 橙色SY6/6。		3		

したが、4層は古墳時代の包含層で、古墳時代の土器片が
多く出土した。

出土遺物は土器片だけだったが、図示できたものは4
点だった (Fig.7, Tab.2, PL.1)。いずれも、壺の破片で
ある。1は口縁部であるが、直口形の圓形を呈すると推
定できる。粗雜なつくりで、口唇部はユビオサエによっ
て歪んでいる。2は、脚台近くで脚部下半の破片である。
比較的丁寧なナゲ調整によって仕上げられている。3は
脚台付近の破片で、脚端部は欠損している。脚台内面天
井部には、突起が付けられている。突起にはユビオサエ
や爪の痕が明瞭で、摘み上げて整形したと考えられる。
4は、脚端部で、若干外反する器形を呈する。1, 3は簞
貫式である可能性が高いので、これらは古墳時代後半期
のものであると考えられる。

2002-B 理学部校舎改修その他工事に伴う立会調 査 (Fig.5)

調査地点 理学部1号館南側と3号館北側道路 (都
元団地H-8~10区)

調査期間 2002年5月22日

理学部校舎改修に伴う消防栓設置工事における立会調
査で、理学部1号館近くと、3号館北側道路の2カ所で
行われた。1号館近くでは、古墳時代の住居跡2基を確
認した。また、3号館北側では、壁面で造構を確認し、古
墳時代土器を主体とする遺物が多く出土したが、近隣で
同時に行われていた2002-2理学部改修工事に伴う発掘
調査とあわせて報告することにする。

2002-C 理学部校舎改修その他工事に伴う立会調査 (Fig.5)

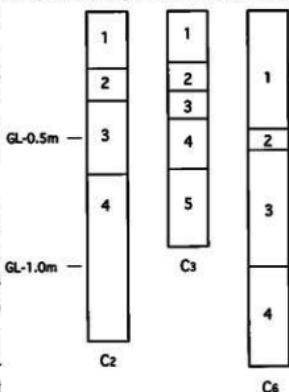
調査地点 理学部3号館南側一帯 (都元団地J・K-
8・9)(X)

調査期間 2002年7月22日

Tab.3 2002-C 出土遺物観察

No.	地点	器種	部位	色調	混和材	混和材 の多さ	調整	備考
5	検?	口縁部	外面: 塗褐色10R8/8、内面: 細砂粒(光沢のある粒子) にぶら、橙色2.5YR6/4 を含む。		1	外面・内面: ナゲのち ガキ(-)、口唇部: ヨリナ ゲ。		

電柱埋設のための掘削工事に伴う立会調査である。直
径30cm、深さ120cmの掘削を6ヶ所行ったが、そのうちC2,C3,C6でプライマリーな層を確認した (Fig.8)。C2の4層は周辺の過去の調査結果から、古墳時代の包含
層に比定できると考えられるが、遺物は出土しなかった。



C3からは遺
物が出土し、
そのうち1点
が図示できる
ものである
GL-0.5m —
(Fig.9, Tab.3,
PL.2)。

5は、少し
内湾しながら
外向きに立ち
上がる圓形

で、埠か林の
口縁部である
と考えられ
る。胎土が精
製されてお
り、外面上には
ミガキも施さ
れていて、丁
寧なつくりの
土器である。

古墳時代のもの
との考えられ
る。

C2
1号 残底。
2号 にぶら、青褐色10YR5/4、砂質シルト。しまっている。
0.5~2cmのバース合む
3号 塗褐色10YR5/6、2層との混じる砂質シルト。少しバ
ースを含む。

4号 黒褐色10YR3/2、砂質シルト。均質。

C3
1号 表土。
2号 塗褐色10YR6/1、細砂。
3号 にぶら、青褐色10YR4/5、根付凝じり砂質シルト、0.5
cmの大いバース合む。

4号 黑褐色10YR4/2、砂質シルト。マンガンがまだらに
残遺してしまっている。

5号 黑褐色10YR6/1、シルト質、やわらかい。

C6
1号 表土。
2号 塗褐色10YR6/1、細砂。
3号 にぶら、青褐色10YR2/2、細砂凝じり砂質シルト。
4号 明褐色2.5YR6/6、細砂。
5号 上部は4層に類似、下部は徐々に灰褐色に変化。

Fig.8 2002-C 土層柱状図

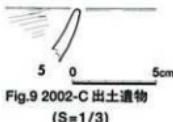


Fig.9 2002-C 出土遺物
(S=1/3)



PL.2 2002-C 出土遺物

2002-D 理学部校舎改修その他機械工事に伴う立会調査(Fig.5)

調査地区 工学部から理学部一帯 (郡元団地J・K-8~10区)

調査期間 2002年7月18日-8月8日

ガス管理設工事のため共通教育棟3・4号館の北側道路を、幅80cm、深さ80-100cmの掘削を行った。このうち、D4・D5と、D12-D16は既掘部であった。また、D1-D12の範囲では、プライマリーな層を確認したが(Fig.10)、2002-1理工系総合研究棟における発掘調査で確認できた基本層位とはほぼ同じである。今回の調査では、遺構・遺物等は出土していない。

2002-E 理学部校舎新営その他機械設備工事に伴う立会調査 (Fig.5)

調査区 理学部1号館西側 (郡元団地J・K-7区)

調査期間 2002年8月29日-9月18日

掘削工事は排水管理設工事であったが、その地点は古墳時代の遺構が良好な状態で残存している可能性が高かつたため、工事前に発掘調査を実施した。埋設地は2カ所だったが、北側地点は既掘部だったため立会調査のみを行った。本調査を実施した地点は、理学部1号館東側の玄関から南側に向かって幅1mほどのトレンチであったが、古墳時代の溝状遺構や住居跡1基を検出した。遺物も、古墳時代を中心とする土器片が多く出土した。

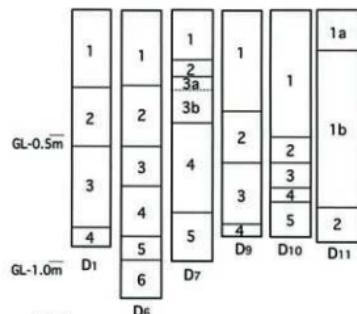
これらの調査結果については、2002-2理学部改修工事に伴う発掘調査とあわせて報告する予定である。

2002-F 理学部校舎新営その他機械設備工事に伴う立会調査 (Fig.5)

調査区 理学部1号館西側 (郡元団地I-7・8区)

調査期間 2002年9月18日-10月23日

掘削工事は電気配管設工事であったが、この地点も古墳時代を中心とする遺構が良好に存在している可能性が高かつたため、工事前に発掘調査を実施した。古墳時代の住居跡・土器窯より・弥生時代中期の溝等が検出し、遺物も弥生時代・古墳時代を中心に多量に出土した。この調査成果についても、2002-2理学部改修工事に伴う発掘調査とあわせて報告する予定である。



D1-D3
1層 表土。
2層 斧黄色2.5Y6/2層底, 1~0.5cm大の白いバミス含む(5%)。
3層 斧黄色2.10YR5/2, 混凝じりシルト, 1~0.5cm大の白いバミス含む(10%)。管状の鉄分あり。
4層 斧黄色2.5YR6/2, シルト。管状の鉄分あり。

D4
1層 表土。
2層 斧黄色2.5Y6/2層底, 1~0.5cm大のバミス含む(5%)。
3層 斧黄色2.10YR5/2, 混凝じりシルト, 1~0.5cm大の白いバミス含む(10%)。管状の鉄分あり。
4層 斧黄色2.5YR6/2, シルト。管状の鉄分あり。

D7~9
1層 表土。粗砂層・砂利を含む。
2層 オリーブ褐色2.5Y4/3, 0.5cm大の白いバミス含む(3%)。
3a層 黄褐色2.5Y4/1, シルト質砂, 0.5cm大の白いバミス含む(5%)。マンダム混造, 下部鉄分多い。
3b層 3a層に類似するが, 鉄分多い。
4層 褐褐色10YR4/1, シルト。
5層 オリーブ黒色7.5YR2/2, シルト。

D10
1層 アスファルトと砂利層。
2層 10YR5/2層底, 0.5cm大の白いバミス含む(3%)。
3層 斧黄色2.10YR5/2, シルト質砂。小さな管状の鉄分含む。
4層 褐褐色10YR4/1, シルト。
5層 斧黄色10YR6/1, シルト。粘状の鉄分含む0.5cm大の白いバミスを含む(2%)。

D11
1層 アスファルトと砂利層。
2層 10YR5/2層底, 0.5cm大の白いバミス含む(3%)。
3層 斧黄色2.10YR5/2, シルト質砂。0.5cm大の白いバミスを含む(2%), マンダム混造。

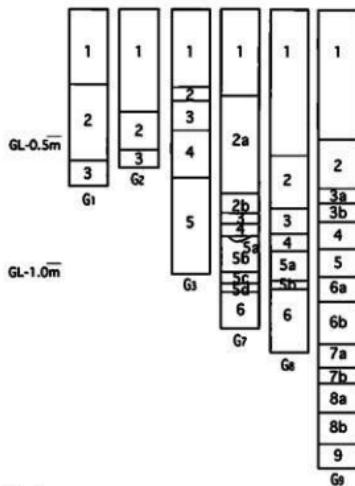
Fig.10 2002-D 土層柱状図

2002-G 理工系総合研究棟新営電気設備工事に伴う立会調査 (Fig.5)

調査区 理学部1号館西側 (郡元団地I-7・8区)

調査期間 2002年9月18日-10月23日

掘削地点のほとんどでプライマリーな層が確認できた。特に、掘削深度が1m以上に及んだところは、周辺の過去の発掘調査から推定すると、古墳時代・弥生時代の包含層(6-9層)に比定できる層が確認できた(Fig.11)が、遺物は出土しなかった。



- G1・2
1号 長上。
2号 2.5%の鉄鉱土～0.5mの大のバシス含む(5%)。
3号 黄褐色10YR5/2.シルトじりシルト。1～0.5mの大のバシス含む(10%)。骨格的鉄分あり。

- G3
1号 長上。
2号 黄褐色10YR5/2.シルト質砂。
3号 黄褐色10YR5/2.シルト質砂。
4号 黄褐色2.5Y4/2.シルト質砂。
5号 黄褐色2.5Y6/6.シルト質砂。

- G7
1号 長上。
2号 にふい黄褐色10YR5/0.砂質シルト。0.5～1cmの大のバシス含む。
3号 にふい黄褐色10YR4/0.砂質シルト。0.5～1cmの大のバシス含む。

- 3号 黄褐色10YR4/0.砂質シルト。
4号 4号との混じりシルト。

- 5号 黄褐色10YR5/2.シルト。
5号 5Cとの混じりシルト。
6号 黑褐色10YR3/2.シルト。粘質。1cmの大のバシス含む。

- G8
1号 長上。
2号 にふい黄褐色10YR5/0.砂質シルト。0.5～1cmの大のバシス含む。
3号 黄褐色10YR5/6相模原。1～3cmの大のバシス含む。

- 4号 黄褐色10YR5/2.相模原。

- 5号 黄褐色10YR4/2.シルト。粘質。

- 5号 5Cとの混じり。

- 6号 黑褐色10YR3/2.シルト。粘質。

- G9
1号 長上。
2号 黄褐色2.5Y4/2.砂質シルト。0.5～4cmの大のバシス含む。
3号 3号まで。

- 3号 黄褐色10YR4/2を基層として赤褐色10YR4/6が覆する。砂質シルト。0.5～4cmの大のバシス含む。

- 3号 3号より灰黃褐色の色調強い。0.5～4cmの大のバシス含む。

- 4号 黄褐色2.5Y4/4.砂質シルト。0.5～4cmの大のバシス含む。

- 5号 黄褐色2.5Y4/4と出雲色2.5Y3/1の中間色。砂質シルト。

- 6号 黑褐色10YR3/1.シルト質砂。

- 7号 黄褐色10YR3/1.シルト。

- 7号 黄褐色10YR3/2のシルト。0.5～3cmの大のバシス含む。

- 7号 黄褐色10YR3/2のシルト。0.5～3cmの大のバシス含む。

- 8号 にふい黄褐色10YR5/0.シルト。

- 8号 黄褐色10YR4/2.シルト。

- 9号 黑褐色10YR3/1.シルト。

Fig.11 2002-G 土層柱状図

2002-H 理工系総合研究棟新營機械設備工事に伴う立会調査 (Fig.12)

調査区 理工系総合研究棟西側道路 (都元団地J・K-10区)

調査期間 2002年12月9日-12月11日

3カ所の掘削地点での立会調査を行った。いずれもブライマーな土層を確認した (Fig.12)。今回の調査では遺物は出土しなかつたが、周辺の調査から近世・調査時代の遺物包含層にあたると考えられる。

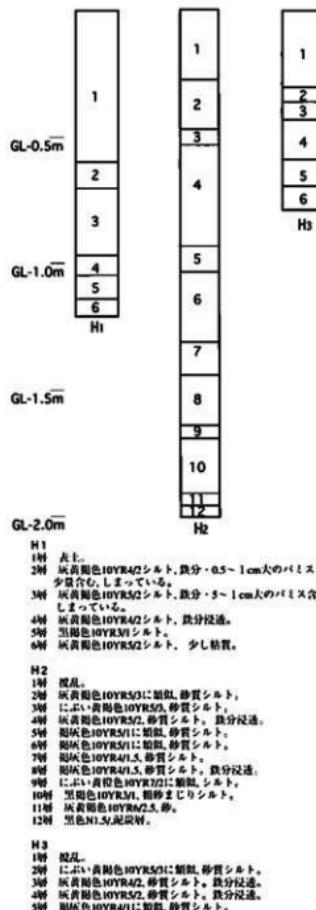


Fig.12 2002-H 土層柱状図

2002-J 高倉看板設置工事に伴う立会調査 (Fig.3
構内図)

調査地点 正門西北側緑地帯 (郡元団地D-4区)

調査期間 2002年12月10日

看板設置の

ため、2カ所の

掘削工事を

行った。2カ所

とも同じ層位

(Fig.13)で、2' GL-0.5m

Fig.13 2002-J 土層柱状図

土した。近現代のものであろうと考えられる。



2002-K 理学部校舎改修その他機械設備工事に伴う立会調査 (Fig.5)

調査区 理学部1号館南側 (郡元団地J-8区)

調査期間 2002年12月11日

理学部校舎際の

掘削を行った。2層

を確認した (Fig.

14)が、どちらにも

瓦片等の出土が確

認され、現代の層 GL-0.5m

であると考えられ

Fig.14 2002-K 土層
柱状図2002-N 理学部講義棟改修工事に伴う立会調査
(Fig.5)調査地 理学部2号館南側薬品庫と講義棟との間
(郡元団地I-7区)

調査期間 2003年1月22日

薬品庫と講

義棟との間の

掘削工事に伴

う立会調査を

行った。表土

が厚く堆積し

ていたが、河

川跡と考えら

れる土層を検

出した (Fig.

15)。A層から GL-1.0m

古墳時代後半

期の遺物が多く

出土した

が、いずれも

細かく破損

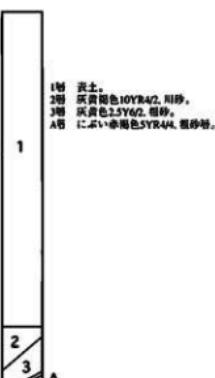


Fig.15 2002-N 土層柱状図

し、ほとんどの破片の表面には鉄分が付着し、砂粒が固着していた。以下、実測できるものについて図示し、説明を加える (Fig.16, Tab.4, PL.3)。

図示できたのは14点である。6-17は壺、6-13は壺の口縁部である。いずれも小破片のため口縁部形態は不明だが、直立またはゆるやかに外反する口縁部の端部であろうと考えられる。口縁部には平坦面をもつ。9は、内消音味に立ち上がるため鉢である可能性もある。14-17は胴部上半部に貼付された突起部である。いずれも格縦突起で、粗雑なつくりである。

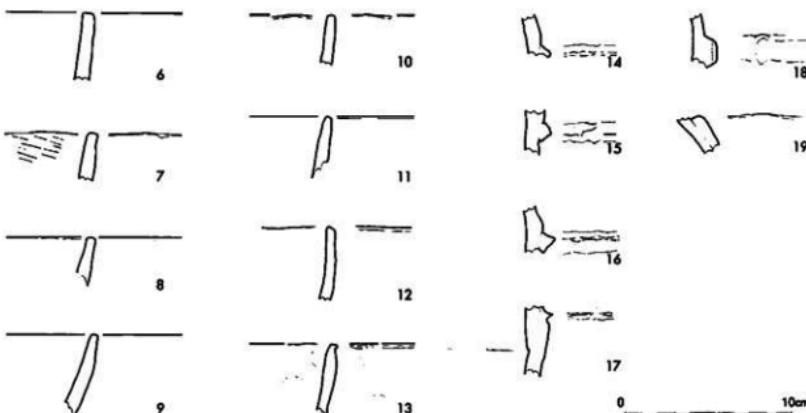


Fig.16 2002-N 出土遺物 (S=1/3)

Tab.4 2002-N 出土土器観察

No.	層	器種	部位	色調	混和材	混和材の多さ	調整	備考
6	A層	甕	口縁部	外面:不明、内面:にぶい黄褐色 色10YR7/4。	付着物のため不明。	-	外面:不明、内面:ナ デ?、	鉄分などの付着物あり、特に外 面。
7	A層	甕	口縁部	外面:灰黃褐色10YR4/2、内面: 細砂粒を含む。 褐灰色2.5Y4/1。	-	2	外面:ナ デ、内面:ハ ケ	鉄分などの付着物あり。 (-)→ナ デ。
8	A層	甕	口縁部	付着物のため不明。	付着物のため不明。	-	付着物のため不明。	鉄分などの付着物あり。
9	A層	甕	口縁部	付着物のため不明。	付着物のため不明。	-	付着物のため不明。	鉄分などの付着物あり。
10	A層	甕	口縁部	浅黄褐色10YR8/3を基調とす る。	粗砂粒:石英・角せん石、詳細 は付着物のため不明。	-	ナ デ?	鉄分などの付着物あり。
11	A層	甕	口縁部	浅黄褐色10YR8/4。	粗砂粒:白色粒・赤色粒、砂 粒:石英・白色粒・赤色粒・黑 色粒。	3	外面:ナ デ、内面:ナ デ (-)→。	鉄分などの付着物あり。
12	A層	甕	口縁部	外面:付着物のため不明、内 面:浅黄褐色10YR8/4。	付着物のため不明。	-	ナ デ?	鉄分などの付着物あり、特に外 面。
13	A層	甕	口縁部	付着物のため不明。	付着物のため不明。	-	ナ デ?	鉄分などの付着物あり。
14	A層	甕	口縁部	外面:付着物のため不明、内 面:浅黄褐色10YR8/4。	付着物のため不明。	-	ナ デ?	鉄分などの付着物あり。
15	A層	甕	頭部	付着物のため不明。	付着物のため不明。	-	付着物のため不明。	鉄分などの付着物あり、頸上 下隣間。
16	A層	甕	頭部	外面:にぶい黄褐色10YR7/3、 内面:10YR7/4	粗砂粒:角せん石、砂粒:角せ ん石・白色粒、細砂粒:赤色粒, 細砂粒も含む。	3	外面:ナ デ(-)、内面: 内面:鉄分などの付着物あり。 付着物のため不明。	付着物のため不明。
17	A層	甕	頭部	外面:付着物のため不明、内 面:にぶい黄褐色10YR7/4。	粗砂粒:砂粒:石英・角せん 石・白色粒、細砂粒も含む。	3	外面:付着物のため不 明、内面:ナ デ(+)、 内面、接合部あり。	鉄分などの付着物あり、特に外 面。
18	A層	甕	頭部	付着物のため不明。	付着物のため不明。	-	付着物のため不明。	鉄分などの付着物あり。
19	A層	甕	頭部	外面:褐灰色、内面:付着物の ため不明。	粗砂粒:砂粒:石英・角せん 石・白色粒。	3	ナ デ。	鉄分などの付着物あり。

17は内面に粘土帯の接合痕が明瞭に残っている。18・

19は甕の幅広突帯である。18は太く浅い刻み目が施さ
れている。19は突帯下部が欠損している。図示できた遺物のほとんどが、古墳時代後半期の土器
であると考えられる。

PL.3 2002-N 出土遺物

2002-P 農学部実験ガス管理設工事に伴う立会調査
(Fig.24)

調査地 農学部4号館南側道路（郡元団地F-8区）

調査期間 2003年2月27日

実験ガス管理設工事の試掘のため、1m四方の範囲を
地表下1mまで掘削した。1-6層まで確認したが、遺物・
遺構等は検出しなかった。2002-S 理学部校舎改修その他工事に伴う立会調査
(Fig.5)

調査地 共通教育棟3号館北側道路噴水（郡元団



Fig.17 2002-P 土層柱状図

地 K-8 区)

調査期間 2002年3月17日

在來の貯水槽を撤去したのち、壁面上土層観察を行った
(Fig.18)。近代・古代の遺物包含層と考えられる層が確
認できたが、プライマリーな層の掘削は行わなかつたた
め、埋蔵文化財への影響はなかった。2002-T 理学部講義棟改修機械整備工事に伴う立会
調査 (Fig.5)

調査地 理学部2号館南側（郡元団地I-7区）

調査期間 2003年3月18日

掘削深度は基本的に70cmまでで、既掘部の範囲だつ
たが、在來の配管と交差する部分を地表下85cmまで掘
り下げたため、下部に河川跡の埋土と考えられる層が確
認できた (Fig.19)。遺物などは出土していない。



Fig.18 2002-S 土層柱状図

Fig.19 2002-T
土層柱状図

2002-U 理学部校舎改修その他電気設備工事に伴う立会調査 (Fig.5)

調査地 理工系総合研究棟東側 (都元団地 K-8 区)

調査期間 2003 年 3 月 19 日

電気配管工事のための発掘調査で、幅 80cm、地表下 95cmまでの掘削を行った。1-3 層までを確認したが、D10 地点の層位と同じである。遺物などの出土はなかった。

2002-V 農学部資源有機物リサイクル場設置工事に伴う立会調査 (Fig.20)

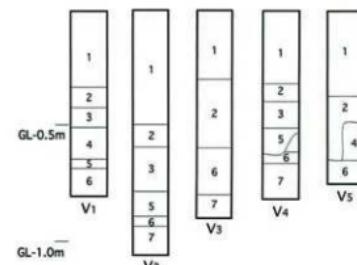
調査地 農場管理棟北側 (都元団地 D-10 区)

調査期間 2003 年 3 月 20 日

リサイクル場の基礎部分のみ 5カ所の掘削を行った。1 カ所の掘削範囲は、2.7 × 2m、深さ 75-106cm におよんだ。1-7 層の基本層位を確認したが (Fig.21)，地点ごとに若干の層位の起伏が見られた。遺物は出土しなかつた。



Fig.20 2002-V 立会調査区の位置 (S=1/500)



1層 オリーブ黒色7SYR3/0, シルト。
2層 黒オリーブ色7SYR4/2, シルト。
3層 に深い黄褐色10YR4/5, シルト, 0.5cm大のバシスを含む。
4層 に深い黄褐色10YR5/5, 腐泥。筋状の鉄分あり。
5層 黄褐色10YR3/6, 腐泥混じりシルト。
6層 黄褐色10YR5/2, 砂質シルト, マンガン含む。
7層 に深い褐色10YR3/0, シルト。マンガン・鉄分混透。

Fig.21 2002-V 土層柱状図

2002-W 教育学部幹線並木設備工事に伴う立会調査 (Fig.22)

調査地 教育学部ゲートから南側道路・音楽美術棟西側緑地帯 (都元団地 M ~ O-6-7 区)

調査期間 2003 年 3 月 20-21 日

教育学部ゲートより南へのびる道路沿いの並木一帯と、音楽美術棟西側緑地帯に樹木移植のための掘削工事を行った (Fig.22-23)。W2 では、3 層上面に溝状透構が確認できたが、周辺の過去の発掘調査結果の土層から推定すると、古代か古墳時代のものであると考えられる。遺物などの出土はなかった。



Fig.22 2002-W 立会調査区の位置(S=1/1400)

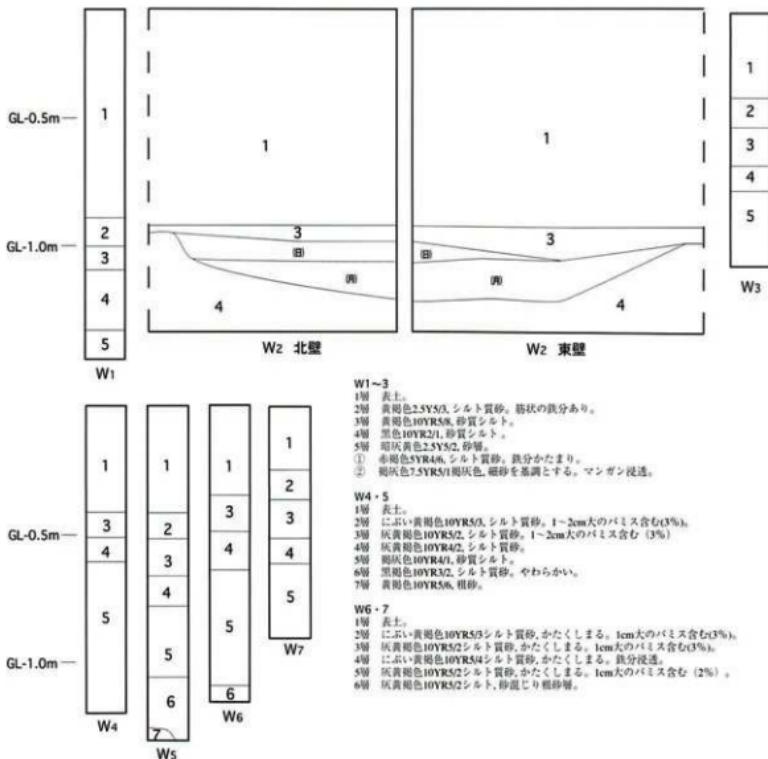


Fig.23 2002-W 土層柱状図

2002-X 埋設土実験に伴うガス管布設工事に伴う立会調査 (Fig.24)

調査地 農場内道路 (郡元町地F-8区)

調査期間 2003年3月24日

道路部分を、 $3.2 \times 0.7\text{m}$ の範囲で、深さ85cmにわたって、5カ所の掘削を行った。いずれも同一層で (Fig.25)、2・3層は水田層であると考えられるが、遺物等の出土はなく、時期は不明である。

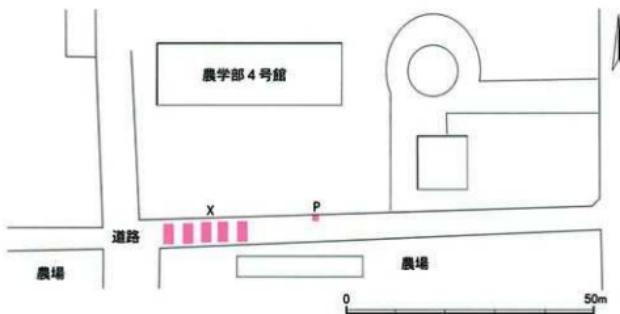


Fig.24 2002-X 立会調査区の位置(S=1/1000)

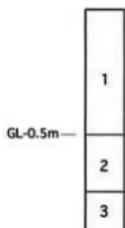


Fig.25 2002-X 土層柱状図

受贈図書 平成14年度(2002年4月~2003年3月)

文献名	発行所	文献名	発行所
車軸本 平成13年度企画展公開シンポジウム 「有輪尖頭器の発生・変遷・終焉」下巻 記念録	千葉県立郷土歴史博物館	東北大学埋蔵文化財調査年報17	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
市川市出土の埴輪 静岡の縄像をさぐる	市立市川考古博物館 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	東京大学構内遺跡調査研究年報3 東京都埋蔵文化財センター年報21	財團法人茨城県教育財團 東京大学埋蔵文化財調査室 財團法人東京都生涯学習文化財團 財團京都埋蔵文化財センター 財團法人東京都生涯学習文化財團 財團東京都埋蔵文化財センター 財團法人兵庫県文化財センター 財團法人群馬県文化財センター
10年のあゆみ	財團法人岐阜県文化財保護センター	東京都埋蔵文化財センター年報22 青森県文化財センター年報No.19 青森県文化財センター年報No.20	財團法人茨城県教育財團 東京大学埋蔵文化財調査室 財團法人東京都生涯学習文化財團 財團京都埋蔵文化財センター 財團法人東京都埋蔵文化財センター 財團法人兵庫県文化財センター 財團法人群馬県文化財センター
牛ヶ山古墳 大河の考古学100年 20年のあゆみ しまねの古代文化 第九号 山陰地方における古墳群と地域社会 西谷正先生年譜・著作目録	学生社 奈良県立橿原考古学研究所 八尾市文化財調査研究会 島根県古代文化センター 島根県古代文化センター 九州大学大学院人間環境学研究所	千葉県立郷土歴史博物館 平成10年度 市立市川考古博物館年報(第27号) 平成11年度 市立市川考古博物館年報(第28号) 平成13年度 市立市川考古博物館年報(第29号)	千葉県立郷土歴史博物館 市立市川考古博物館 市立市川考古博物館
太宰府市史 文芸資料編	太宰府市	平報9 平成13年度 静岡県埋蔵文化財調査研究年報18	財團法人かなわ考古学財團 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究センター 財團法人岐阜県文化財保護センター 財團法人兵庫県教育文化財團 財團法人岐阜県文化財保護センター
国縁 海を渡ったアリストの芸芸・英國人医師マローラのコレクションから 震災に備え、ある東京の風景―関東大震災から戦前までー	財團法人アリスト文化振興・研究推進機構 大田区立郷土博物館	年報 平成13年度 年報	財團法人かなわ考古学財團 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究センター 財團法人岐阜県文化財保護センター 財團法人兵庫県教育文化財團 財團法人岐阜県文化財保護センター
郷内遺跡出土品重要文化財指定記念 展 「跡が伝える櫛文玉王冠」 美濃陶山陶 京都市所蔵古瓦図録(山野道三コ レクション) 紫金山古墳 西への道 シルクロードと大谷探検隊 未遂古墳の世界 足利神谷道路・加茂岩合道路 志津見ダム地内の道路	富士見町教育委員会 土岐市 美濃陶磁研究室 京都大学大学院文学研究科 大垣市立近つ飛鳥博物館 大垣市立近つ飛鳥博物館	相模考古学研究年報26 相模考古学研究年報27 高槻市文化財年報平成12年度 平成12年度 年報 平成13年度 年報	奈良県立橿原考古学研究所 奈良県立橿原考古学研究所 高槻市教育委員会 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 神戸市教育委員会 倉敷市埋蔵文化財センター 浜松市生田の里第9号 広島大学統合伝統地域埋蔵文化財発掘調査年報XVII 山口大学構内遺跡調査研究年報XIV 鳥取県教育局 理蔵文化財調査センター 愛比光一 平成12年度年報— 愛比光一 平成13年度年報—
共生時代・日本海地域の交流 伊豫の風に吹かされた古代伊豫～ 「伊豫國王都・三當遺跡」展 玉のアカシヤー 郡ノ前郷の文化財 車道遺跡・円筒道跡・大谷遺跡 刻まれた歴史 ～沖縄の石碑と拓本～ 琉球王国 ～大交易時代とグスク～ 復興後三十年間の県内発掘調査展	下関市立考古博物館 佐山市考古組 伊都歴史資料館 伊都歴史資料館 豊岐郷土館 那珂郡立歴史教育委員会 沖縄県立博物館 沖縄県立博物館 沖縄県立埋蔵文化財センター	平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報 倉敷市埋蔵文化財センター年報8 浜松市生田の里第9号 広島大学統合伝統地域埋蔵文化財発掘調査年報XVII 山口大学構内遺跡調査研究年報XIV 鳥取県教育局 理蔵文化財調査センター 愛比光一 平成13年度年報— 愛比光一 平成13年度年報— 豊島市埋蔵文化財研究会 熊本大学埋蔵文化財調査年報8 川内市歴史資料館年報 平成11年度 川内市歴史資料館年報 平成12年度 川内市歴史資料館年報 平成13年度 ミュークム知覧 認定 第8号 波佐村立歴史民俗資料館年報第28号 波佐村立歴史民俗資料館年報第27号	財團法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 財團法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 財團法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 財團法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 財團法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 伊豆市教育委員会 熊本大学埋蔵文化財調査室 川内市歴史資料館 川内市歴史資料館 川内市歴史資料館 ミュークム知覧 波佐村立歴史民俗資料館 波佐村立歴史民俗資料館
パンフレット 20年のあゆみ 島根物語 石器時代の痕跡 地から弓矢へ	財團法人兵庫県文化財センター 東京都埋蔵文化財センター (財)かなわ考古学財團・厚生省 市教育委員会・大和市教育委員会	紀要 群馬県立歴史博物館紀要第23号 かながわの考古学研究紀要7 研究紀要区 金沢大学考古学紀要第26号 富山考古学研究5号	群馬県立歴史博物館 財團法人かなわ考古学財團 財團法人兵庫県文化財センター 金沢大学考古学講座 財團法人富山県埋蔵文化財調査事務所 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究会
くろがねのわざ 新しい時代への變遷 海を渡ってた技術と文化 移すひとびと 行き交うひとびと 古墳古墳の潮流を求めて どこにあの? 神の遺跡 ドラえでなにしとん?	群馬県立登呂博物館 群馬県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 松阪市教育委員会 神戸市埋蔵文化財センター 神戸市埋蔵文化財センター	研究紀要9号	
年報 越後年報14 平成13年度 北上市埋蔵文化財年報 北上市埋蔵文化財年報(2000年度)	財團法人北海道埋蔵文化財センター 北上市立埋蔵文化財センター 北上市立埋蔵文化財センター		

文献名	発行所	文献名	発行所
研究紀要第11号	三重県埋蔵文化財センター	京都府埋蔵文化財情報 第86号	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
研究紀要第12号—舟橋遺跡一	三重県埋蔵文化財センター	青段 第108号	奈良県立橿原考古学研究所
研究紀要第7号	財団法人山口大和古代文化研究所	青段 第109号	奈良県立橿原考古学研究所
古事 天理大学考古学研究室紀要第6回	天理大学考古学研究室	青段 第110号	奈良県立橿原考古学研究所
考古学論叢第24回	奈良県立橿原考古学研究所	墓火 97.98号	財団法人大阪市文化財調査会
兵庫県埋蔵文化財研究紀要第2号	兵庫県教育委員会	墓火 99号	財団法人大阪市文化財調査会
紀要愛媛第2号	財团法人愛媛県埋蔵文化財調査センター	墓火 100号	財団法人大阪市文化財調査会
ミュージアム知覧紀要第8号	ミュージアム知覧	墓火 101号 (Vol.17, No.5)	財団法人大阪市文化財調査会
運次刊行物		墓火 102号	財団法人大阪市文化財調査会
テヌエ 北海道埋蔵文化財センター	財団法人 北海道埋蔵文化財センター	墓火 納部引出 (創刊号～100号)	大阪府立近つ飛鳥博物館
だまく 第7号	テヌエ 北海道埋蔵文化財センター	大阪府立近つ飛鳥博物館 館報7	大阪府立近つ飛鳥博物館
だまく 北海道埋蔵文化財センター	財団法人 北海道埋蔵文化財センター	アスカダイ・古墳の森 Vol.16	大阪府立近つ飛鳥博物館
だまく 第8号	テヌエ 北海道埋蔵文化財センター	アスカダイ・古墳の森 Vol.17	大阪府立近つ飛鳥博物館
昭和城 第51号	水本市埋蔵文化財調査センター	ひょうごの道跡 43号	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
平成文化研究年報第2号	岩手県教育委員会	ひょうごの道跡 44号	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
沖縄研究ノート11	宮城学院女子大学キリスト教文化研究所	ひょうごの道跡 45号	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
研究ノート11号	財団法人茨城県教育財團	年報 沢山先生の里 第10号 (平成13年度)	沢山先生の里文化財センター
歴史人類第31号	筑波大学歴史・人類学系		
歴史人類第30号	筑波大学歴史・人類学系		
さきたまvol.13	埼玉県立さきたま資料館		
調査研究報告第15号	埼玉県立さきたま資料館	自然科学研究研究所研究報告 第27号	岡山理科大学
駒場考古第27号	駒場考古学研究室	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第27号	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
駒場考古第28号	駒場考古学研究室	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第28号	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
研究紀要第30X	東京都市埋蔵文化財センター	出云地方における前方後円墳の出現とその時代	鳥取県教育委員会
人類史探訪2001	東京農立大学人間史探訪グループ	尾崎に召すまき資源 第9号	島根県埋蔵文化財調査センター
吉山史探訪2007	吉山中学校大学文学部史学研究室	オロチのいぶし (特別号) 尾原ダム建設とその時代の追跡	島根県埋蔵文化財調査センター
さみらこづけ19.20号	財団法人宇都宮市埋蔵文化財センター	青木道跡調査報林木バイパス発掘判例	島根県埋蔵文化財調査センター
旭止里第7号	財団法人青森市埋蔵文化財センター	だいわ増刊号	島根県埋蔵文化財調査センター
千葉県立房總風土記の丘だより第38号	千葉県立房總風土記の丘	伊川谷水路発掘調査概報「要伊川谷水路発掘調査物語」PART8	島根県埋蔵文化財調査センター
千葉県立房總風土記の丘だより第39号	千葉県立房總風土記の丘	F4土器まいぶん No.13	島根県埋蔵文化財調査センター
千葉県立房總風土記の丘だより第40号	千葉県立房總風土記の丘	F4土器まいぶん No.17	島根県埋蔵文化財調査センター
研究所報No.97	財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	F4土器まいぶん No.18	島根県埋蔵文化財調査センター
研究所報No.98	財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	F4土器まいぶん No.19	島根県埋蔵文化財調査センター
研究所報No.99	財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	F4土器まいぶん No.20	島根県埋蔵文化財調査センター
研究所報No.100	財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	古代文化研究 第10号	鳥取県古代セミナー
研究所報No.101	財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	石見山山ニユース第3号	鳥取県・大田市・温泉津町・仁摩町教育委員会
研究所報No.102	財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	まいぶんえひめ No.28	財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
静岡市立登呂博物館館報12	静岡市立登呂博物館	まいぶんえひめ No.29	財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
－平成13年度－			
長野県埋蔵文化財発掘調査一覧	長野県教育委員会	湯澤城より 1号	湯澤城資料館
その12		湯澤城より 2号	湯澤城資料館
名古屋市博物館などより 第145号	名古屋市博物館	学内出版20年の歩み	山口大学埋蔵文化財資料館
名古屋市博物館などより 第146号	名古屋市博物館	山口大学埋蔵文化財資料館収蔵考古資料	山口大学埋蔵文化財資料館
名古屋市博物館などより 第147号	名古屋市博物館	シンポジウム韓国考古学の新紀元	九州大学大学院人文科学研究院
名古屋市博物館などより 第148号	名古屋市博物館	三道峰交流二どもフォーラム記録集	福岡県教育委員会
名古屋市博物館などより 第149号	名古屋市博物館	婦人追跡	福岡県教育委員会
名古屋市博物館などより 第150号	名古屋市博物館	夜明町聚居歴史教室	夜明町教育委員会
みえ 第33号	三重県埋蔵文化財センター	まいぶん久留米 創刊号	久留米市埋蔵文化財センター
佐加太 第16号	坂田郡社会教育研究会文化財部	大字市史 中世資料編	大字市
佐加太 第17号	坂田郡社会教育研究会文化財部	宇土市史研究第23号	宇土市教育委員会
京都府埋蔵文化財情報 第83号	財团法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	熊本の物語報 No.14	熊本県立熊本博物館
京都府埋蔵文化財情報 第84号	京都府埋蔵文化財調査研究センター	ふるさと古代見聞録	鹿児島市立ふるさと考古歴史館
京都府埋蔵文化財情報 第85号	京都府埋蔵文化財調査研究センター	一級久保道跡の調査－	ミュージアム知覧
		ミュージアム知覧通信 第4号	鹿児島県国际大学付属地域総合研究所
		南日本文化 第35号	

文献名	発行所	文献名	発行所
東畠毛道跡発掘調査報告書	沼津市教育委員会	理叢文化財調査概要一平成13年度-	財團法人富山県文化振興財團
尾崎道路発掘調査報告書	沼津市教育委員会	理叢文化財調査事務所	理叢文化財調査事務所
埋蔵文化財発掘調査報告書	沼津市教育委員会	京都大学境内道路調査研究平報	京都大学埋蔵文化財研究センター
岩井戸古跡遺跡	財團法人岐阜市文化財保護センター	1997-1998年度	
後平茶子古墳・後平遺跡	財團法人岐阜市文化財保護センター	野口遺跡群III	奈良県教育委員会
上・平遺跡II	財團法人岐阜市文化財保護センター	下木東方遺跡	奈良県立橿原考古学研究所
深掘古窓跡	財團法人岐阜市文化財保護センター	石垣遺跡	奈良県立橿原考古学研究所
太江遺跡・寿楽寺廢寺跡	財團法人岐阜市文化財保護センター	栗谷遺跡群	奈良県立橿原考古学研究所
穂田遺跡	財團法人岐阜市文化財保護センター	菅田遺跡	奈良県立橿原考古学研究所
施山遺跡	財團法人岐阜市文化財保護センター	西坊遺跡	奈良県立橿原考古学研究所
南音御跡・南音傳古墳・大前平遺跡	財團法人岐阜市文化財保護センター	長谷寺	奈良県立橿原考古学研究所
保原戸古跡群	財團法人岐阜市文化財保護センター	坪井・大福遺跡	奈良県立橿原考古学研究所
野坂遺跡II・赤池4号古墳	財團法人岐阜市文化財保護センター	東大寺三社池	奈良県立橿原考古学研究所
名古屋大学加速器質量分析計業績報告書	名古屋大学年代測定統合研究センター	奈良県道路調査平報1997年度(第3分冊)	奈良県立橿原考古学研究所
告書(XIII)		奈良県道路調査平報1998年度(第一~三分冊)	奈良県立橿原考古学研究所
国指定史跡 小長曾陶器窯跡	財團法人滋賀県文化財セイツナ	東則馬遺跡	三宅町教育委員会 奈良県立橿原考古学研究所
市内遺跡調査報告 川合K窯跡	滋賀県教育委員会・財團法人滋賀県理叢文化財センター	平城京左京四条三坊十一坪発掘調査報告書	平城京左京四条三坊十一坪発掘調査会・奈良大学考古学研究室
内田町遺跡	財團法人滋賀県文化財セイツナ	三伯似理叢文化財センター	兵庫県多可郡中町教育委員会
里生城跡	財團法人滋賀県文化財セイツナ	多番地遺跡	奈良大学文学部考古学研究室
一般国道23号 中勢道路 理叢文化財発掘調査風景写真	三重県理叢文化財センター	-1980~1982年度発掘調査報告書I~III	天理大学考古学研究室
別荘跡遺跡	三重県理叢文化財センター	埴丘のない稲の稲作研究	大阪府教育委員会 財團法人東大阪市文化財協会
別荘跡遺跡	三重県理叢文化財センター	鬼鹿川遺跡第22次調査概要報告	大阪府教育委員会 大阪市文化財協会
宮山遺跡(第2次)・大久保城跡	三重県理叢文化財センター	瓜坂遺跡発掘調査報告 II	財團法人大阪市文化財協会
宮川用水第二期地区 理叢文化財発掘調査報告	三重県理叢文化財センター	大根川ににおける朝野・日本石造物調査報告	財團法人大阪市文化財協会
近畿自動車道尼勢第6号橋・山村遺跡発掘調査報告書	三重県理叢文化財センター	大根川 V	財團法人大阪市文化財協会
尼勢第6号橋・尼勢第6号橋・尼勢第6号橋	三重県理叢文化財センター	長原・瓜坂群は掘開き報告書 XVIII	財團法人大阪市文化財協会
金塚遺跡・金塚橋穴名跡・山村遺跡発掘調査報告書	三重県理叢文化財センター	長原遺跡東部地区発掘調査報告 V	財團法人大阪市文化財協会
福島古跡報告	三重県理叢文化財センター	長原跡発掘調査報告 IX	財團法人大阪市文化財協会
旗殿城跡	三重県理叢文化財センター	長原跡発掘調査報告 VIII	財團法人大阪市文化財協会
山道遺跡発掘調査報告	三重県理叢文化財センター	南木古遺跡発掘調査報告 II	財團法人大阪市文化財協会
城壁遺跡発掘調査報告	三重県理叢文化財センター	大根川理叢文化財発掘調査報告 I	財團法人大阪市文化財協会
真名井神社裏包合地発掘調査報告	三重県理叢文化財センター	大根川理叢文化財発掘調査報告一	財團法人大阪市文化財協会
神道遺跡・埴原塙跡発掘調査報告	三重県理叢文化財センター	天平14年度(昭和)八尾市文化財調査研究会事業報告	財團法人大阪市文化財協会
勢武古跡	三重県理叢文化財センター	寄功寺跡西林部の中・近世遺構	財團法人八尾市文化財調査研究会
石徹原古墳群・石徹原東遺跡	三重県理叢文化財センター	人佐戸遺跡・小野川放水路文号に伴う理叢文化財発掘調査報告(III)	財團法人東大阪市文化財協会
(第14次)発掘調査報告	三重県理叢文化財センター	年ノ神遺跡	兵庫県教育委員会
川島遺跡群(第1次)発掘調査報告	三重県理叢文化財センター	年・神古墳群	兵庫県教育委員会
想作遺跡(第2次)発掘調査報告	三重県理叢文化財センター	山陽白動車道建設事業に伴う理叢文化財発掘調査報告	兵庫県教育委員会
想作遺跡発掘調査報告	三重県理叢文化財センター	古川やま遺跡II	兵庫県教育委員会
中庄遺跡(第2次)発掘調査報告	三重県理叢文化財センター	梅田古墳群I・播磨連絡道路(5期工事)に伴う理叢文化財調査報告書II	兵庫県教育委員会
天花寺丘内遺跡発掘調査報告書	三重県理叢文化財センター	下原遺跡発掘調査報告書	兵庫県教育委員会
見シ遺跡	三重県理叢文化財センター	栗庭遺跡	兵庫県教育委員会
見・A遺跡-第一・第二次調査-	三重県理叢文化財センター	貝塚遺跡	兵庫県教育委員会
堺田 第3~5次調査	三重県理叢文化財センター	上石門跡	兵庫県教育委員会
理叢文化財発掘調査平報III	三重県理叢文化財センター	西山B・C古墳群	兵庫県教育委員会
理叢文化財発掘調査平報V	三重県理叢文化財センター	大手山遺跡・大手山古墳	兵庫県教育委員会
理叢文化財発掘調査平報VIII	三重県理叢文化財センター	山陽白動車道建設事業に伴う理叢文化財発掘調査報告書	兵庫県教育委員会
野野瀬中道跡発掘調査報告	三重県理叢文化財センター	002	兵庫県教育委員会
野田塚・野田遺跡	三重県理叢文化財センター	荒川神社裏遺跡	兵庫県教育委員会
里前遺跡発掘調査報告	三重県理叢文化財センター	住吉山遺跡第33次調査	兵庫県教育委員会
里前遺跡発掘調査報告	三重県理叢文化財センター	上石門跡	兵庫県教育委員会
六人山遺跡発掘調査報告	三重県理叢文化財センター	五反田遺跡	兵庫県教育委員会
伊弉諾町22.24.25火	三重県理叢文化財センター	立柱コウノトリの郷公園整備事業に伴う理叢文化財発掘調査報告書	兵庫県教育委員会
岡の古跡跡	松本市教育委員会	荒川神社裏遺跡	兵庫県教育委員会
出川南遺跡	松本市教育委員会	住吉山遺跡第33次調査	兵庫県教育委員会
川西園田遺跡V・三周沢川左岸遺跡III	松本市教育委員会	上石門跡	兵庫県教育委員会
百萬遺跡IV	松本市教育委員会	西山B・C古墳群	兵庫県教育委員会
平田北遺跡VI	松本市教育委員会	大手山遺跡・大手山古墳	兵庫県教育委員会
清水島II遺跡・中名山遺跡・持田II遺跡	松本市教育委員会	山陽白動車道建設事業に伴う理叢文化財発掘調査報告書	兵庫県教育委員会
発掘調査報告	2002	002	兵庫県教育委員会
石名木本船跡発掘調査報告	財團法人富山県文化振興財團	栗庭遺跡	兵庫県教育委員会
中山山遺跡発掘調査レポート	理叢文化財調査事務所		
能越自動車道理叢文化財包蔵地調査報告	財團法人富山県文化振興財團		
	理叢文化財調査事務所		

文献名	発行所	文献名	発行所
約場道路・上ノ段道路 一(国)175号 特許改良第一種事業に伴う発掘調査 報告書一	兵庫県教育委員会	弥生時代の磨製石器	島根縣埋蔵文化財調査センター・ 島根縣古代文化センター
宝林寺北道跡II 北口道跡	兵庫県教育委員会	史跡松江城壁事務報告書	松江市教育委員会
御所前道路発掘調査報告書	兵庫県教育委員会	二ツ橋手道跡発掘調査報告書	松江市教育委員会
源江北町道路 第9次 淡河木津道路 第1次・第2次発掘調査報告書	神戸市教育委員会	シアケ遺跡発掘調査報告書	伯太町教育委員会
兵庫県指定有形民俗文化財 武の船大石造見掘調査報告書	神戸市教育委員会	石見銀山 道跡検討調査報告(2)	温泉津町教育委員会・仁摩町 教育委員会・大田市教育委員会・ 島根縣教育委員会
野原道路 特別史跡姫路城跡 一お城本町地区市街地再開発事業に 伴う発掘調査報告書	神戸市教育委員会	吉本坂道跡	淡江町教育委員会
TSUBOHORI姫路市埋蔵文化財調査 略報	姫路市教育委員会	淡江町内道跡VIII	淡江町教育委員会
沼道跡I 美作国分跡	済山市教育委員会	農学部道路1	香川大学埋蔵文化財調査室
今岡寺跡	済山市教育委員会	牛の木道路	財團法人愛媛縣埋蔵文化財調 査センター
赤坂城跡群発掘調査年報 XVI	広島大学大学院文学研究科	大久保道路・大久保1号墳	財團法人愛媛縣埋蔵文化財調 査センター
星ヶ古墳群・鶴崎古墳群・足頭古墳 群・長瀬古墳群・海老城跡・均子殿 古墳群・均子殿古墳・道路	島根縣教育委員会	中城跡 佐なし田・道路 元城跡	財團法人愛媛縣埋蔵文化財調 査センター
鶴崎谷・道路	島根縣教育委員会	土居庄道路2次・桜谷畑中道路・況谷 本村道路2次	財團法人愛媛縣埋蔵文化財調 査センター
一海軍監修の官舗跡の調査一	島根縣教育委員会	上石山道路	財團法人愛媛縣埋蔵文化財調 査センター
勝浦改訂 島根縣道路地図(石見編)	島根縣教育委員会	東峰道路第2-4地点 高見1道路	財團法人愛媛縣埋蔵文化財調 査センター
田中谷道路・塙山古墳・下がり松道 跡・角谷道跡	島根縣教育委員会	湯屋城跡 第5分間	財團法人愛媛縣埋蔵文化財調 査センター
東峰道路・旧石器時代から近代ま での複合道路の調査一	島根縣教育委員会	道町道路	財團法人愛媛縣埋蔵文化財調 査センター
馬場道路・杉ヶ枝道路・客山塙塙群・ 進行道路	島根縣教育委員会	伊台惣道路	松山市教育委員会
石見銀山	島根縣教育委員会・大田市教 育委員会	森原地区的道路IV	松山市教育委員会
石見銀山(能寺跡)	島根縣教育委員会・大田市教 育委員会	愛媛大學埋藏文化財調査年報	愛媛大學埋藏文化財調査室
加茂岩倉道路	島根縣教育委員会・加茂町教 育委員会	-1995・1996年度-	
下山道路(2) 一構文時代遺構の調査一	国土交通省中国地方整備局・ 島根縣教育委員会	愛媛大學埋藏文化財調査年報 -1997・1998年度-	愛媛大學埋藏文化財調査室
貝谷道路	島根縣教育委員会	大字府政門跡	九州歴史資料館
小丸道路	国土交通省中国地方整備局	堂庭道路I	福岡縣教育委員会
上野・道路・弥生後期集落及び治治 間道遺跡の調査一	日本道路公团中国支社・島根 県教育委員会	波川地区道路群	福岡縣教育委員会
神原・道路-1997年の調査結果-	日本道路公团中国支社・島根 県教育委員会	宍道湖道路・浦ノ田道路II	福岡縣教育委員会
相原道路(2)-自然科学分析編-	日本道路公团中国支社・島根 県教育委員会	原東道路 一原東道路 第2次調査	福岡縣教育委員会
鏡過山道路・獅子谷道路(1) 一追根・遺物編一	国土交通省中国地方整備局・ 島根縣教育委員会	門谷A道路	福岡縣教育委員会
島根県出雲市 古志本郷道路IV・故 山川横穴群跡・只谷圓周・上沢・道路 (分析編)	日本道路公团中国支社・島根 県教育委員会	西新町道路IV	福岡縣教育委員会
堤平道路	国土交通省中国地方整備局出 雲工事事務所・島根縣教育委 員会	船越高原A道路III	福岡縣教育委員会
馬場道路発掘調査報告書	日本道路公团中国支社・島根 縣教育委員会	櫛木道路群	福岡縣教育委員会
白石大谷・越智三郷道路・關田ヶ 谷道路・越後道路・熊谷道路 青森県埋蔵文化財調査報告書(銅彈編)	日本道路公团中国支社・島根 縣教育委員会	島根縣埋蔵文化財調査センター・ 島根縣古代文化センター	福岡縣教育委員会

文献名	発行所	文献名	発行所
大界D道跡3—大界D道跡群第5次・第6次調査報告一	福岡市教育委員会	三沢ハサコの古道跡II	小郡市教育委員会
那珂30—那珂道跡第75次調査報告一	福岡市教育委員会	三沢古賀道跡3	小郡市教育委員会
那M31—那珂道跡第77次・78次調査報告一	福岡市教育委員会	三沢今小路道跡2	小郡市教育委員会
那珂2—那珂道跡第73次調査報告一	福岡市教育委員会	三沢北中込道跡1地点	小郡市教育委員会
内・窓宮跡2	福岡市教育委員会	三沢蓬ヶ浦道跡2	小郡市教育委員会
佐ノ川古墳	福岡市教育委員会	寺脇古道跡2	小郡市教育委員会
田島A道跡—第3.4.5.6次調査報告	福岡市教育委員会	小原寺南面追跡2	小郡市教育委員会
博多8—御供所海防隊地道路關係整理	福岡市教育委員会	小原山古道跡6	小郡市教育委員会
歴史文化財調査報告書一	福岡市教育委員会	小原川原田道跡II	小郡市教育委員会
博多81—博多道跡群第100次調査の概要一	福岡市教育委員会	小原井通路道跡	小郡市教育委員会
博多82—	福岡市教育委員会	上野川通路道跡	小郡市教育委員会
博多道跡群第115次調査の報告一	福岡市教育委員会	山口川の上道跡4	小郡市教育委員会
博多83—	福岡市教育委員会	力式内畠道跡3	小郡市教育委員会
博多道跡群第127次調査の概要一	福岡市教育委員会	力式内畠道跡4	小郡市教育委員会
博多84—	福岡市教育委員会	外野川道跡、草木今宮道跡	久留米市理謹文化財センター
博多道跡群第122次発掘調査報告書一	福岡市教育委員会	久留米市山内近路群	久留米市理謹文化財センター
博多85—	福岡市教育委員会	久留米市理謹文化財調査集報IV	久留米市理謹文化財センター
博多小学校建設に伴う理謹文化財発掘調査報告書一	福岡市教育委員会	企丸古跡	久留米市理謹文化財センター
寺谷II道跡	福岡市教育委員会	御原川通路道跡	久留米市理謹文化財センター
一志野I道跡群第10次調査報告一	福岡市教育委員会	大瀬戸跡	久留米市理謹文化財センター
一志野II道跡	福岡市教育委員会	筑後山道跡	久留米市理謹文化財センター
一志野I道跡群第10次調査報告一	福岡市教育委員会	原ノ江道跡	春日市教育委員会
猪崎11—	福岡市教育委員会	須崎タカラ道跡	春日市教育委員会
一猪崎道跡第16次調査報告一	福岡市教育委員会	立之川道跡	春日市教育委員会
猪崎12—	福岡市教育委員会	高祖道跡群II	前原市教育委員会
一猪崎道跡群第17次・第23次調査報告一	福岡市教育委員会	高原山生木水道跡	前原市教育委員会
猪崎13—猪崎道跡第21次調査報告一	福岡市教育委員会	三吉・井原道跡II	前原市教育委員会
板付市周辺道路調査報告書第23号	福岡市教育委員会	三原・じの道跡	前原市教育委員会
板付市周辺道路調査報告書第24号	福岡市教育委員会	神木根石道跡	前原市教育委員会
板付市周辺道路調査報告書第25号	福岡市教育委員会	神木根石家住宅	前原市教育委員会
坂合II道跡3 第5次調査	福岡市教育委員会	坂井川II道跡	前原市教育委員会
坂井道跡1	福岡市教育委員会	坂井川通路道跡	前原市教育委員会
福岡外環状道路關係文化財調査報告書一	福岡市教育委員会	坂井川通路道跡	前原市教育委員会
野方I・II道跡	福岡市教育委員会	筑後通路	前原市教育委員会
第一第1・第2次調査の報告一	福岡・田代第37集	田原山中岳歌道跡	大牟田市教育委員会
立花B道跡	福岡市教育委員会	梅原道跡 第3次調査	大牟田市教育委員会
一部の高速道路5号線建設に伴う理謹文化財発掘調査報告書一	福岡市教育委員会	坂口II道跡	大野城市教育委員会
木下道跡	筑紫野市教育委員会	大野城市的文化財 第34集	大野城市的文化財 第34集
案内道跡	筑紫野市教育委員会	山田西道跡群II	宗像市教育委員会
水元道跡	筑紫野市教育委員会	山田山道跡群	那珂川町教育委員会
貝元道跡I	筑紫野市教育委員会	山田山道跡群	那珂川町教育委員会
山家地区史跡整備調査報告I	筑紫野市教育委員会	施政官ノ上道跡	那珂川町教育委員会
柴田堀岸糞道跡第7次調査	筑紫野市教育委員会	道原道跡I	夜須町教育委員会
油木道跡	筑紫野市教育委員会	八ヶ坪道跡	夜須町教育委員会
太宰府兔坊跡	筑紫野市教育委員会	三亞宮/前道跡、本宮道跡、屋根道跡	夜須町教育委員会
太宰府兔坊跡	筑紫野市教育委員会	山城II道跡群IV	夜須町教育委員会
大河の道跡II	筑紫野市教育委員会	赤坂古墳群I	夜須町教育委員会
峰古野I号墳	筑紫野市教育委員会	曾根川前田道跡4	夜須町教育委員会
半畠道跡	筑紫野市教育委員会	曾根川前田道跡II	夜須町教育委員会
端野道跡II	筑紫野市教育委員会	笠置道跡I	夜須町教育委員会
老松川古墳群	筑紫野市教育委員会	大坪道跡II	夜須町教育委員会
大保西小路道跡2	小郡市教育委員会	大木道跡III	夜須町教育委員会
横原仕解田道跡	小郡市教育委員会	中原道跡	夜須町教育委員会
横原十三塚道跡I	小郡市教育委員会	豊原古墳群II	夜須町教育委員会
横原十三塚道跡2	小郡市教育委員会	船子木道跡	夜須町教育委員会
横原I・内郷道跡3	小郡市教育委員会	広瀬地区道跡	吉井町教育委員会
横原II・内郷道跡4	小郡市教育委員会	吉井中学校道跡構造	吉井中学校
横原II・上郷道跡6	小郡市教育委員会	改革に伴う理謹文化財発掘調査	吉井町教育委員会
花立山古墳群I	小郡市教育委員会	吉井町道跡群 南部西面造跡	吉井町教育委員会
千葉山道跡6	小郡市教育委員会	吉井町道跡群 千年地区道跡群 千年山道跡	吉井町教育委員会
千葉山古道跡	小郡市教育委員会	宇野地区道跡群IV 一級河川基盤上部	新古富村教育委員会
三沢・浦道跡4	小郡市教育委員会	新古富村所在道跡群の調査一	新古富村教育委員会

文献名	発行所	文献名	発行所
東北アジアにおける先史文化の比較考 古学的研究	九州大学大学院人文学科研究院	上ノ原遺跡 磯庄村遺跡 長崎原遺跡	宮崎県立埋蔵文化財センター
那覇原遺跡 那覇原遺跡2区 一出生時代遺物の調査—	佐賀市教育委員会	東九州自動車道(都農→西都岡)関連 理収文化財発掘調査報告書II	宮崎県立埋蔵文化財センター
那覇原遺跡 那覇原遺跡2区 一出生時代遺物の調査—	佐賀市教育委員会	東九州自動車道関連埋蔵文化財発掘 調査概要報告書II	宮崎県立埋蔵文化財センター
佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書 —1999年度—	佐賀市教育委員会	内城跡 南字原第1遺跡・南字原第2遺跡	宮崎県立埋蔵文化財センター
佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書 —1999年度—	佐賀市教育委員会	白ヶ野第2・第3遺跡 白ヶ野第2・第3遺跡・上の原第1遺跡	宮崎県立埋蔵文化財センター
上と泉道跡群・上と泉道跡9区 一佐賀市久保泉工業地園地埋蔵文 化財発掘調査報告書I	佐賀市教育委員会	道内遺跡 別府原遺跡・内ヶ道跡・別府原第2 遺跡	宮崎県立埋蔵文化財センター
上と泉道跡群・上と泉道跡9区 一佐賀市久保泉工業地園地埋蔵文 化財発掘調査報告書II	佐賀市教育委員会	母智丘谷道跡・畠山道跡・妹坂道跡	宮崎県立埋蔵文化財センター
石七井遺跡・上九郎道跡 石七井遺跡・上九郎道跡	佐賀市教育委員会	本城跡 木幡道跡	宮崎県立埋蔵文化財センター
増田道跡群 一増田道跡4・5段の調査—	佐賀市教育委員会	宮崎縣文化財年報III 西都原100号塙	宮崎県教育委員会
熊永道跡VII 熊永道跡20区 一佐賀市久保泉工業地園地埋蔵文 化財発掘調査報告書I	佐賀市教育委員会	西都原古墳群 横市地区遺跡群 江内谷遺跡・坂元 B遺跡・加賀B遺跡(第1次調査)	宮崎県都城市教育委員会
熊永道跡群VII 熊永道跡21区 一佐賀市久保泉工業地園地埋蔵文 化財発掘調査報告書II	佐賀市教育委員会	横市地区遺跡群 横穴遺跡(1)・今房 遺跡/今房遺跡(第1次)	宮崎県都城市教育委員会
熊永道跡群VI 熊永道跡7-16区 一佐賀市久保泉工業地園地埋蔵文 化財発掘調査報告書III	佐賀市教育委員会	下久玉遺跡 第9-10次調査	宮崎県都城市教育委員会
熊永道跡群VII 熊永道跡7-16区 一佐賀市久保泉工業地園地埋蔵文 化財発掘調査報告書IV	佐賀市教育委員会	森原遺跡 志和池古墳・91号塙	宮崎県都城市教育委員会
熊永道跡群VII 熊永道跡7-16区 一佐賀市久保泉工業地園地埋蔵文 化財発掘調査報告書V	佐賀市教育委員会	大浦道跡 大久保第3号遺跡	宮崎県都城市教育委員会
熊永道跡群VII 熊永道跡7-16区 一佐賀市久保泉工業地園地埋蔵文 化財発掘調査報告書VI	佐賀市教育委員会	大島山古道跡 池ノ友遺跡(第1次調査)	宮崎県都城市教育委員会
熊永道跡群VII 熊永道跡7-16区 一佐賀市久保泉工業地園地埋蔵文 化財発掘調査報告書VII	佐賀市教育委員会	天神道跡第2次・中町道跡第3次調査	宮崎県都城市教育委員会
熊永道跡群VII 熊永道跡7-16区 一佐賀市久保泉工業地園地埋蔵文 化財発掘調査報告書VIII	佐賀市教育委員会	平野道跡 鶴原下道跡II	宮崎県都城市教育委員会
熊永道跡群VII 熊永道跡7-16区 一佐賀市久保泉工業地園地埋蔵文 化財発掘調査報告書IX	佐賀市教育委員会	小国町地区遺跡群	宮崎県都城市教育委員会
平尾二本杉道跡—1区の調査— 平尾二本杉道跡—2—6区の調査— 佐賀中道遺跡(2)	佐賀市教育委員会	草刈田道跡 下迫道跡[1]裏張・萬文時代遺構	宮崎県都城市教育委員会
川原道跡 天神ノ元遺跡	佐賀市教育委員会	下迫道跡[1]上原・範文土器I	鹿児島県立埋蔵文化財センター
店津市内道跡調査報告(18)	佐賀市教育委員会	下迫道跡[1]2範文土器II	鹿児島県立埋蔵文化財センター
安国寺道跡・延道跡ほか 原道跡丘井1地区、原道跡平原1地 区、原道跡七丘1道跡	国吉町教育委員会	下迫道跡[1]3範文土器III 下迫道跡[1]4範文土器IV 下迫道跡[1]5範文土器V	鹿児島県立埋蔵文化財センター
国史跡 安国寺原道跡	国吉町教育委員会	丸山田道跡・供食之元道跡・前原和田 道跡 東九州自動車道設置(末吉IC ~四国IC間)に伴う理藏文化財発掘調 査報告書I	鹿児島県立埋蔵文化財センター
原道跡 上原道跡 中幅道跡 原の辻道跡 原の辻道跡	国吉町教育委員会	志志加里道跡 九州新幹線鹿児島 ルート建設に伴う理藏文化財発掘調 査報告書II	鹿児島県立埋蔵文化財センター
原の辻道跡 一低地帯の設置工事 に伴う緊急発掘調査報告書I	国吉町教育委員会	高井田道跡 国道10号姶良バイパス 建設に伴う理藏文化財発掘調査報告 書II	鹿児島県立埋蔵文化財センター
特許史跡 原の辻道跡 一原の辻道 跡記念物保存修理に伴う発掘調査I	国吉町教育委員会	今里道跡 一南九州西回り自動車道 建設に伴う理藏文化財発掘調査報告 書IV-(P1集場IC~市来IC)	鹿児島県立埋蔵文化財センター
特許史跡 原の辻道跡 一青御製椎 にに関する自然科學分析の成果報告I	国吉町教育委員会	那国寺跡・梅落道跡 九州新幹線鹿 児島ルート建設に伴う理藏文化財発掘 調査報告書 IV	鹿児島県立埋蔵文化財センター
特許史跡 金田城跡環境整備基本計画 実施書	国吉町教育委員会	出水平道跡 糸湯免道跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター
矢立古墳群発掘調査報告(2)	破城原町教育委員会	糸湯免道跡 糸湯免馬路道 九州新幹線鹿児島 ルート建設に伴う理藏文化財発掘調 査報告書II	鹿児島県立埋蔵文化財センター
江口道跡 先史墳場の生業と交易	破城原町教育委員会	池之頭道跡 一南九州西回り自動車 道建設に伴う理藏文化財発掘調査報 告書III-(P1集場IC~市来IC)	鹿児島県立埋蔵文化財センター
延牧道跡 能見道跡・能見寺道跡	日本大学文学部		
桔木々道跡	宮崎県立埋蔵文化財センター		
	宮崎県立埋蔵文化財センター		

文献名	発行所	文献名	発行所
茶屋ノ光道路、燈・安原道路、宮野郷 道路、小松道路、前市野原道路、東下 原道路九州街幹線鹿児島ルート建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1	鹿児島県立埋蔵文化財センター	外園道路 宮ノ上道路 健昌城跡 立山B道路 常盤原道路	松元町教育委員会 鹿児島県吉田町教育委員会 姶良町教育委員会 大崎町教育委員会 鹿児島県都山町教育委員会 ミュージアム知覧 財部町教育委員会
小倉畠道路 一般国道10号姶良バイ バス接続に伴う埋蔵文化財発掘調査 報告書(1)	鹿児島県立埋蔵文化財センター	「仲元兵衛細引事集」調査報告書	
松尾城跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター	田平下道路	鹿児島県上郡久町教育委員会
本御内道路	鹿児島県立埋蔵文化財センター	柳川城跡	鹿児島県熊毛郡中村町教育委員会
鹿児島市道路分布図	鹿児島市教育委員会	立切道路	鹿児島県知名町教育委員会
原田久保道路	鹿児島市教育委員会	志布垣武当道路	沖縄県立埋蔵文化財センター
武道跡E地点	鹿児島市教育委員会	ヤッチのガマ・カンジン話古事記	沖縄県立埋蔵文化財センター
名山道路	鹿児島市教育委員会	円覺寺跡—道路発掘調査報告書1—	浦添市教育委員会
春日町道路B地点	鹿児島市教育委員会	浦添ようどれ!	
伊作跡	秋上町教育委員会	大里城跡—都市公園計画に係わる緊 急発掘発掘調査報告書(2)	沖縄県大里村教育委員会

埋蔵文化財調査室要項

鹿児島大学埋蔵文化財調査室要項

鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則

(設置)

第1条 本学に、鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(審議)

第2条 委員会は、本学の施設計画を円滑に行うため埋蔵文化財に関する次の事項を審議する。

(1) 基本計画の策定に関すること。

(2) 調査結果に基づく対策に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

(1) 学長

(2) 各学部長、附属図書館長、医学部附属病院長および歯学部附属病院長

(3) 事務局長

(4) 学生部長

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

(議事)

第5条 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、議事は出席委員の3分の2以上をもつて決する。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聞くことが出来る。

(調査委員会)

第7条 委員会は、本学の埋蔵文化財の調査を行なうため、埋蔵文化財調査委員会(以下「調査委員会」という。)を置く。

第8条 調査委員会は次の事項を審議する。

(1) 調査実施計画に関すること。

(2) 第13条に規定する調査室の室長等の選任に関する事。

(3) 第13条に規定する調査室の予算に関するこ。

(4) その他埋蔵文化財及び第13条に規定する調査室の業務に関するこ。

第9条 調査委員会は、次に掲げる委員をもって組織し、学長が任命する。

(1) 各学部の教授、助教授、講師の中から選任され

た者各1名

(2) 第15条2項に規定する調査室長

2 前項第1号の委員の任期は2年とし、委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第10条 調査委員会に委員長を置き、前項第1項第1号の委員の中から互選により選出する。

2 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

第11条 調査委員会は、委員の過半数の出席をもつて成立し、議事は、出席委員の過半数をもつて決する。

第12条 調査委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聞くことができる。

(調査室)

第13条 調査委員会に、本学の埋蔵文化財の調査に関する業務を行うための埋蔵文化財調査室(以下「調査室」という。)を置く。

第14条 調査室は、次の業務を行なう。

(1) 調査実施計画の立案

(2) 発掘調査、分布調査及び確認調査

(3) 調査報告書の作成

(4) その他必要な事項

第15条 調査室に、室長、主任及びその他必要な職員を置く。

2 室長は、本学の考古学に関する教官の中から委員会が推薦し、学長が任命する。

3 室長は、調査委員会の定める方針に基づき調査室の業務を掌理する。

4 室長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

5 主任は、調査室の職員の中から、特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を調査委員会が推薦し、学長が任命する。

6 主任は、室長の命を受けて調査室の業務を処理する。

7 職員は、調査室の業務に従事する。

(その他)

第16条 埋蔵文化財に関する事務は、事務局施設部において行なう。

付 則

1 この規則は、昭和60年4月18日から施行する。

2 この規則の施行後最初に任命される委員及び室長の

任期は、第9条第2項及び第15条第4項の規定に
かかるわらず、昭和62年3月31日までとする。

3 鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則(昭和51年
1月22日制定)は、廃止する。

付則

この規則は、平成9年4月1日から施行する。

・鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会(平成12年4月1日
現在)

委員長 石田忠彦(鹿児島大学副学長)

委員 段村吉康(法文学部長)

中山右尚(教育学部長)

井上政義(理学部長)

永田行博(医学部長)

納光弘(医学部付属病院長)

大工原恭(歯学部長)

井上裕喜(歯学部附属病院長)

矢野利明(工学部長)

下川悦厚(農学部長)

上田耕平(水産学部長)

荒井啓(速合農学研究科長)

山口建太郎(事務局長)

岩本義男(学生部長)

石田尚治(附属図書館長)

・鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会委員(平成14年4月
1日現在)

委員長 辻尾昇三(工学部教授)

委員 本田道輝(法文学部助教授)

日隈正守(教育学部助教授)

竹内亨(医学部教授)

田中卓男(歯学部教授)

古川一男(理学部教授)

松元光春(農学部助教授)

中村啓彦(水産学部講師)

新田栄治(調査室長併任 法文学部教授)

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室長(併) 法文学部教授 新田栄治

主任(併) 法文学部助教授 中村直子

(併) 法文学部助手 新里貢之

技術補佐員 寒川朋枝

技術補佐員 松本益幸(王 力明)

付録1 郡元団地L-6区(中央図書館増築地A・B地点)における発掘調査

1. 調査にいたる経過

鹿児島大学では、郡元団地に位置する中央図書館の増築を予定している。増築予定地は、第1次調査に、中央図書館の南側(A地点)、第2次調査として、図書館の南西側(B地点)、北西側の隣接地點(C地点)である。周辺部では、1975年調査の釘田第1地點¹⁾において、古墳時代後半期の住居跡が20基以上検出された。また、1980年の中央図書館工事の際に、多量の遺物が出土していたらしく、遺物の一部が図書館職員によって保管されていた²⁾。

本地点においても、良好な状態で跡が埋蔵されている可能性が高く、発掘調査を実施した。

今回の報告は、整理作業期間の都合上、第1次調査のA地点と、第2次調査B・C地点のうち、B地点のみを報告し、C地点は、3次調査D・E地点とともに次号に譲る。

2. 調査体制

調査は下記の体制で行った。

Tab.5 調査体制

第1次調査		第2次調査	
所在地	鹿児島市東元1-21-25	所在地	鹿児島市東元1-21-25
期間	1993(平成5)年3月20日-3月30日	期間	1993(平成5)年3月13日-3月19日
面積	A地点1300m ²	面積	B地点のみ1250m ²
主参考	埋蔵文化財調査在室京上・上村徳	主参考	埋蔵文化財調査在室京上・上村徳
担当	埋蔵文化財調査室京上・上村徳	担当	埋蔵文化財調査在室京上・中村直子
	埋蔵文化財調査室京上・中村直子		鈴木山一郎・大西豊司・西野勇
人材	人材	人材	西野勇・西原洋子・鶴間千恵子・川口千恵子・鶴間千恵子・鶴間千恵子・鶴間千恵子・鶴間千恵子・鶴間千恵子
作業員	作業員	作業員	西野勇・西原洋子・鶴間千恵子・鶴間千恵子・鶴間千恵子・鶴間千恵子・鶴間千恵子・鶴間千恵子・鶴間千恵子・鶴間千恵子・鶴間千恵子・鶴間千恵子・鶴間千恵子

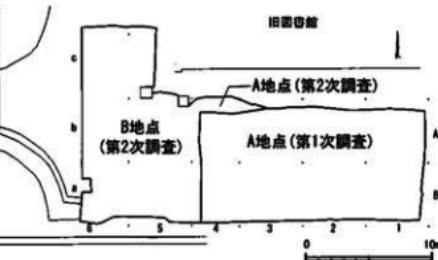


Fig.28 調査地点配置図(S=1/400)

2次調査は、中央図書館を挟んで南北に分かれ、A地点に西接した部分をB地点、北側をC地点としている。また、A地点検出の住居跡(SK4)の北・西の拡張部の調査も行われた(Fig.26)。B・C地点の調査は、同時並行して行われ、遺構などは、調査の都合上、連続番号が両地点にまたがって付けられている。そのため、今回の報告における遺構番号は、C地点に属するものである。

B地点は、東西方向はA地点に準ずるように、連続番号としたが³⁾、A地点西壁を基準に西方向へ改めて5mメッシュのグリッドを設定し、東から西に5, 6とした。したがって、A-B地点の境界である4の東西長は、5mではなく、4.249mである。また、南北方向は、A地点とは異なり、C地点を見通して、南から北へa-cとした。

3層上面からは、土坑1基(SK1)が検出された。4層上面からは、A地点の統計で、溝状遺構(SD1-3)が検出された。また、浅い落ち込み(SK2)も検出されている。5層上面では、直線状に伸びる溝状遺構(SD5-7)、浅い落ち込み(SK11)、多数のピット群を検出した。A地点の拡張部では、A地点の住居跡(SK4)や土坑(SK6)の、それぞれの統計と、ピット群が検出されている。これらの調査を完了し、5層地山を検出して、調査を終了した。

3. 調査の経過

A地点は、5mメッシュでグリッドを設定し、東から西へ1-4、北から南へA-Bとした(Fig.26)。

表土層は、重機によって除去し、プライマリーな層である2層以下より手作業による掘削を行なった。掘削は層ごとに遺構を確認し、写真撮影・実測・測量・遺物取り上げを行なながら進行した。3層上面では土坑が2基(SK1・2)、4a層上面では溝状遺構2条 (SD1・2)、4b層上面では、土坑1基(SK3)が確認されている。5層上面では、住居跡(SK4)1軒と土坑3基(SK5-7)、ピット群が検出されている。調査は5層上面までを掘り下げ、地山として検出、確認した時点と終了した。

4. 層位(Fig.27-32, Tab.6・7, PL.4-8)

基本的に、A地点とB地点の土層は整合的であり、対応している。5枚の層に大別され、それぞれが内容物や若干の色調の相違で、さらに細分されている。

1層は、表土層や大学造成時の搅乱層である。2層は、中近世以降の水田層である可能性がある。3層は、時期が不明の水田層である。4層は、古墳時代後半期を中心とする遺物包含層で、最も遺物量が多い。5層は粗砂の層で地山であり、基本的に遺物を含まない。

付録1 那元団地L-6区(中央図書館跡地 A・B 地点)における発掘調査

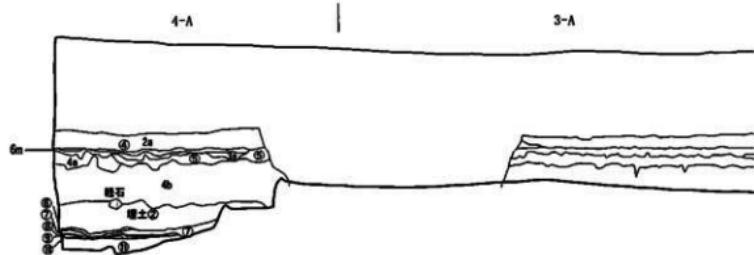


Fig.27 A地点北壁(S=1/60)

Tab.6 A地点基本土層

層序	色調・内容	性状など
1層	灰土・土質	表土・表土
2a層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
2b層	灰土。	
3a層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
3b層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
4a層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
4b層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
5a層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
5b層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
6a層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
6b層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
7a層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
7b層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
8a層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
8b層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
9a層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
9b層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
10a層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
10b層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
11a層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
11b層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
12a層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。
12b層	灰青褐色(10YR6/2)シルト質砂・輕石含む。	遺物包含層。

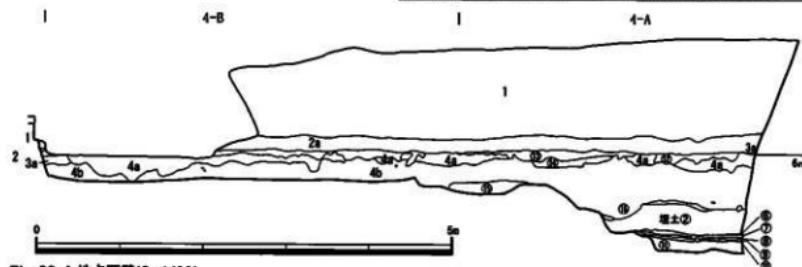


Fig.28 A地点西壁(S=1/60)

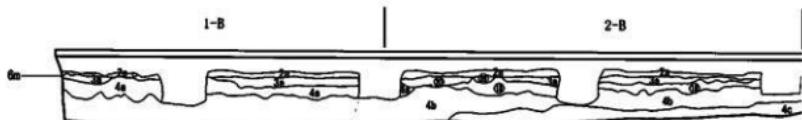


Fig.30 A地点南壁(S=1/60)

- ① 明黄褐色10YR6/6、輕石を含む。2b層と3a層との間の中間色。3層に近い。
- ② 5a層土。4層土をブロック状に含み、3層土を基調としている。
- ③ にぶい褐色7.5YR5/3、輕石含む。
- ④ にぶい黃褐色10YR7/4、砂混じり、炭。
- ⑤ にぶい黃褐色10YR7/4、砂混じり、炭。
- ⑥ ⑦に塑性。⑧より砂質、黃色味が強く、色が濃い。
- ⑨ 灰の層。
- ⑩ 細かい白砂層を基調とした炭との混土。
- ⑪ 黒色7.5YR2/1、砂混じり、炭。
- ⑫ 細かい白砂層を基調とした炭との混土。
- ⑬ オリーブ褐色5YR3/3暗炭。
- ⑭ 砂と4b層の底土。基調は5層土。
- ⑮ にぶい黃褐色7.5YR5/3、シルト質砂、輕石小粒を含む。
- ⑯ 淡黄色2.5YR7/3、粗砂、輕石粒、輕石を含む。

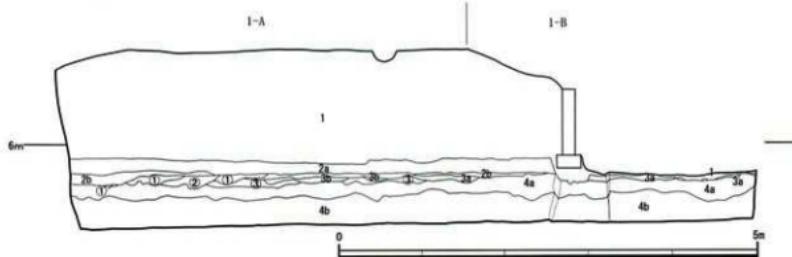
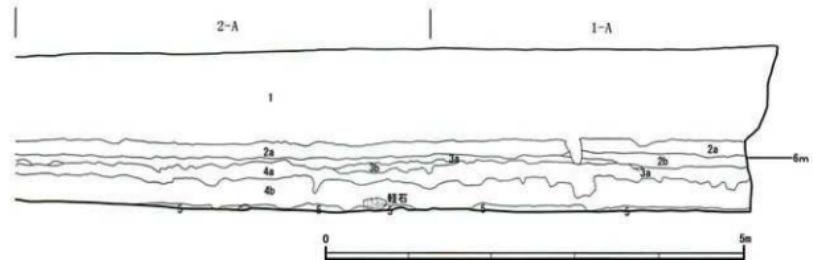
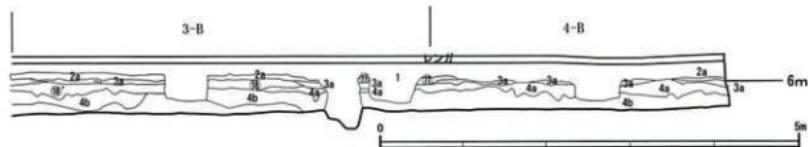


Fig.29 A地点東壁(S=1/60)



- ⑥ 明黄褐色2.5Y6/8、粗砂層、軽石小粒を少し含む。
- ⑦ 黒褐色10YR3/1、シルト質砂、下部は砂質。
- ⑧ 4b層土と砂との混土。
- ⑨ 2層土を基調としたカクラン、3層土・5層土をブロックで含む。
- ⑩ オリーブ褐色2.5Y4/6を基調とする、明黄褐色10YR6/8をブロック状に含む。シルト質砂、軽石を含む。
- ⑪ 灰褐色7.5YR5/2を基調とするシルト質砂、東側ほど褐色を帯びる。
- ⑫ SD2の埋土、浅黄色2.5Y7/3粗砂を基調とする、明黄褐色2.5Y6/8粒を含む。軽石を含む。
- ⑬ SD2の埋土、明黄褐色2.5Y6/8粗砂を基調とする、軽石粒、2cm大の礫を多く含む。上部に、浅黄色2.5Y7/3粗砂ブロックを含む。
- 堆土② 黒褐色10YR3/1、シルト質砂、埋土上部より砂質。

PL.6 A 地点南壁

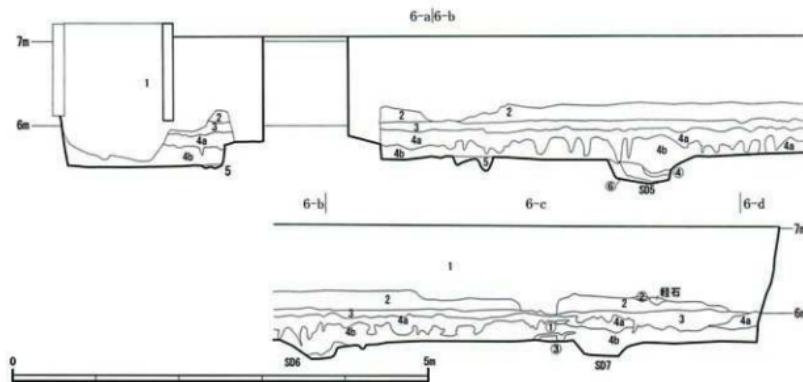


Fig.31 B地点西壁(S=1/60)



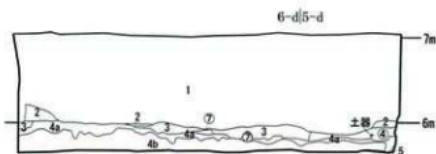
PL.7 B 地点西壁



PL.8 B 地点北壁

- ① オリーブ褐色2.5Y6/1 シルト質砂、5mm~1cm大の軽石を含む。
 ② 黄灰色2.5Y5/1 シルト質砂。
 ③ 明灰色7.5Y5/8から赤い黄褐色10YR6/4、樹木。
 ④ 褐色10YR4/4 シルト質砂、SD5埋土。
 ⑤ オリーブ黒7.5Y3/1 シルト質砂、SD5埋土。
 ⑥ に4a・黄褐色10YR4/3 シルト質砂、SD5埋土。
 ⑦ 明灰色褐色2.5Y5/2を基調として、4a・4b層をブロック状に含む。

Fig.32 B地点北壁(S=1/60)



Tab.7 B地点基本土層

層序	色調・内容	性質など
1層	黄灰色(2.5Y6/1)シルト質砂、0.5~1cm大の軽石を含む。	灰土・客土
2層	黄褐色(10YR6/1)粗砂混じシルト質砂、0.5~1cm大の軽石を含む。	遺物包含層。
3層	明黄色褐色(10YR7/6)粗砂混じシルト質砂、0.5~1cm大の軽石を含む。	遺物包含層。上面よりSK1検出。
4a層	黒褐色(7.5Y3/1)砂質シルト、緑藻の跡の混透。	遺物包含層。上面よりSK2, SD1~3検出。
4b層	黒褐色(7.5Y3/1)砂質シルト。	遺物包含層。
5層	褐色(10YR1/1)粗砂。	A地点のSK4の建塗。上面よりSD5~7, SK11など小群検出。

5. 遺構・遺物

5-1. A・B地点1層(表土・出土地不明)出土遺物

(Fig.33, Tab.8, PL.11・12)

1層出土遺物は、重機で表土層を除去した後、攪乱部分に残った遺物を中心に採集されている。また、調査時に出土し、

調査地点や層位が分からなくなってしまった遺物もここに含めた。

遺物は、弥生時代中期、古墳時代、近世の遺物が含まれ(Fig.33)、ほかにも近・現代の遺物が出土している。この一帯の遺物の包蔵状況を反映している(PL.11)。

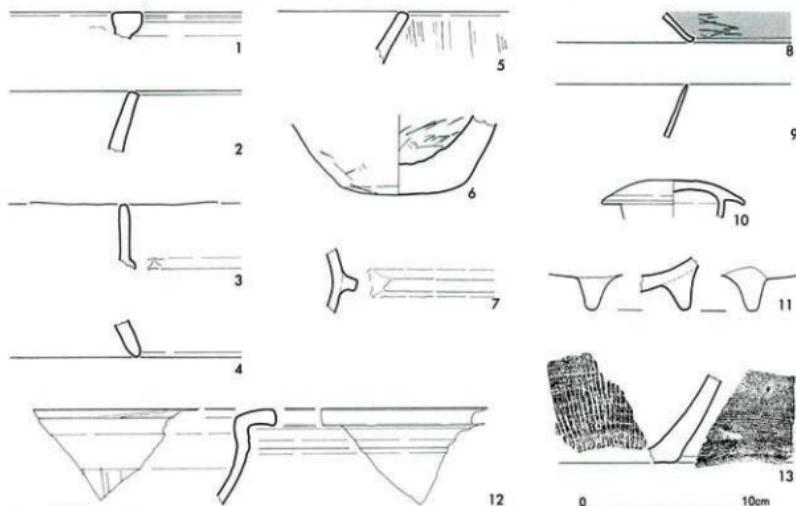


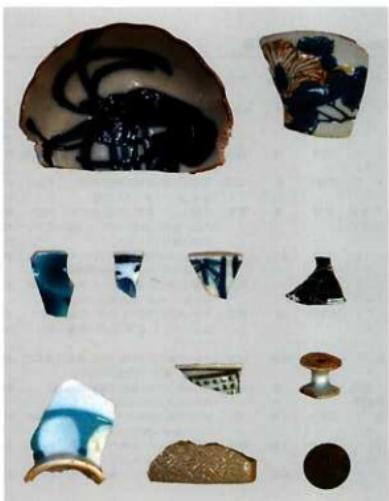
Fig.33 1層遺物(S=1/3)



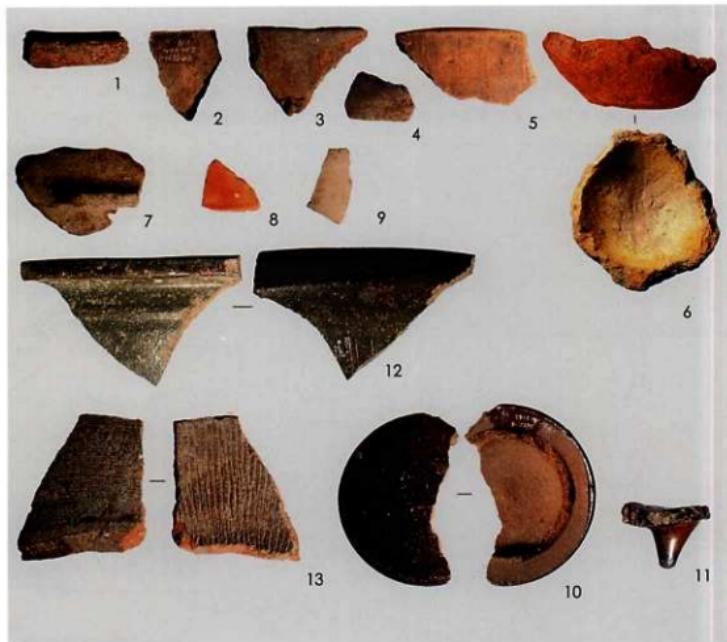
PL.9 A地点表土掘削



PL.10 B地点表土掘削



PL.11 近・現代の遺物



PL.12 1層出土遺物

Tab.8.1 層出土遺物観察

No.	層	地點	種別	器種	部位	色調	胎土		調整	備考
							混和材	砂粒の 多さ		
1	SK9	入来日式	甕	口縁部	外面にぶついた黄緑に類似10YR7/4、内面・器内にぶついた黒に類似7.5YR7/4。	白地粒・赤色粒・粗砂・角閃石・石英・砂・石英・繊維:	2	内面:ハケ(〔〕)。		
A						黒色粒・角閃石?				
2	1	古墳	甕	口縁部	外・内面にぶついた黄緑に類似10YR5/3、器内:黒褐2.5Y3/2。	白地粒・赤色粒・粗砂:石英・白	2	外面:ヨコナデ、内面:ヨコナデ。		
B						色粒・黒色粒。				
3	?	波打式	甕	口縁部	外・内面にぶついた黄緑に類似10YR5/3、内面・器内に付着するもの不明。	白地粒・黒色粒・白色粒・繊維:	4	外面:ヨコナデ、内面:鉄分付着の點付突起1条、ため不明。		
?						色粒・透明粒。				
4	表探	古墳	甕	脚台	外・内面にぶついた黄緑に類似10YR7/3、内面にぶついた黄緑に類似10YR7/4、器内にぶついた黄緑に類似10YR7/3。	白地粒・粗砂・石英・白色粒・角閃石・石英・繊維:	2	内・外面:粗・ヨコナデ。		
2次調査						黒色粒・透明粒。				
5	1	古墳	甕?	口縁部	外・内面にぶついた黒に類似10YR6/4、内面:白・黒2.5Y7/2、器内:灰黄2.5Y7/2。	白地粒・黒色粒・透明粒。	3	外面:ハケ(〔〕)→ナダ(〔〕)。		
A						内面:丁寧なヨコナデ。				
6	1	弥生か	甕	底部	外・内面にぶついた黄緑に類似10YR5/3、内面:明黄褐10YR6/8、器内:黄褐色10YR6/2。	角閃石・石英。	4	内・外面:ハケ、内面:ハケによる底深7.0cm、打ち込み感強。		
A						粗砂・白色粒・砂・角閃石。				
7	?	弥生?	甕	脚部	外・内面:淡黄色に類似82.5Y7/3、内面:淡黄色に類似82.5Y7/4、器内にぶついた黄緑に類似10YR7/3。	白地粒・粗砂・角閃石・砂・角閃石・繊維:	1	外面:ヨコナデ、内面:剥落、羽茎状把手つき。		
A						黒色粒。				
8	1	古墳	高杯	脚部	外・内面:赤褐色2.5YR4/6、内面:鉄分付着のため不明、器内:洗黄色10YR6/6。	白地粒(極少)・繊維:	1	外面:ミガキ、内面:鉄分付着の外面:赤色顔料塗布、ため不明。		
A						砂・角閃石。				
9	表探	東原式	壺	口縁部	外・内面にぶついた黄緑に類似10YR7/3、器内:洗黄色10YR6/3。	白地粒・透明粒。	1	内・外面:ヨコナデ。		
2次調査						砂・角閃石。				
10	1	齒摩焼	土瓶	蓋	輪・輪軸部にぶついた黄緑10YR7/2、光沢あり、素地:砂・白地粒・白色粒。	白地粒・白地粒・白色粒・砂・角閃石。	3	外面:施釉、内面:無釉、近世、昔代川系。		
A						にぶついた黄緑に類似10YR7/3。				(径6.6cm)。
11	1	齒摩焼	土瓶	脚部	輪・輪軸部にぶついた赤褐色10YR7/4、不透明、光沢あり、素地:にぶついた黄緑10YR6/3。	白地粒・白色粒。	4	内・外面とも施釉、近世、昔代川系。		
A						にぶついた黄緑に類似10YR6/2。				
12	1	齒摩焼	楕球	口縁部	内・外面:灰10YR4/1、素地:灰褐色5YR6/4、2。	白地粒・繊維:透明粒。	1	内・外面とも施釉、たどり口縁上面18世紀、昔代川系、は輪が拭き取られる(拭き残し部分が確認状態)。		
A						砂・白色粒。				
13	1	齒摩焼	楕球	底部	輪:暗褐色7.5YR3/3、素地:暗褐色2.5YR6/6。	白地粒・砂・白色粒・黑色粒。	3	外面:ハケ(○)、底部でも輪重ね、近世、昔代川系。		
B						砂。				

5-2. A・B地点2層出土遺物(Fig.34-36, Tab.9-11, PL.13-15)

2層以下は、プライマリーな層である、現代の大規模な攪乱は受けていなければ。

A・B地点における2層出土の遺物は、弥生時代・古墳時代の土器小破片や、須恵器、ほかに中世の中国青磁・白磁、備前焼鉢、近世以降の薩摩焼、肥前焼器などが認められる。また、土錐や、古銭の出土もあった(Tab.38)。

遺物の出土量からすれば、近世代のものが多く、2層の形成時期は、この時期に近いと考えられる。しかし、青磁などの中世陶磁器も出土していることから、近隣に中世の遺物包含層や生活城が存在する可能性もある。

2層は、土壤プランツ・オ・パール分析によれば、最もイネの含有量が高く、水田であった可能性が高いが、ヨシなどが検出されていないため、水田のような湿润な環境にあったかは不明な部分もある(付編2参照)。

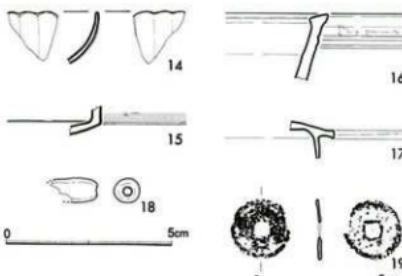


Fig.34 A地点 2a層出土遺物(S=1/3), (19)は S=1/2

Tab.9 古銭

No.	層	直径	孔径	残厚	重量	備考
19	2a	8mm	2.5mm	6mm / 6mm	1mm	2.40g 初鉄1647年清領初期 背面:無文

Tab.10 石器

大学構内遺跡において、古墳時代後半期を中心とする集落跡でもときおり黒曜石の破片や削片が出土することがある。発掘時期は不明である。

No.	層	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
20	2a	電気水素	2.50	1.95	1.1	4.32

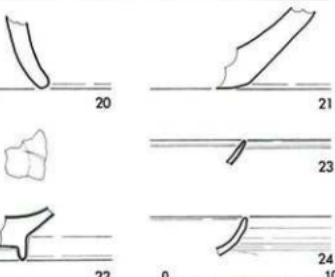
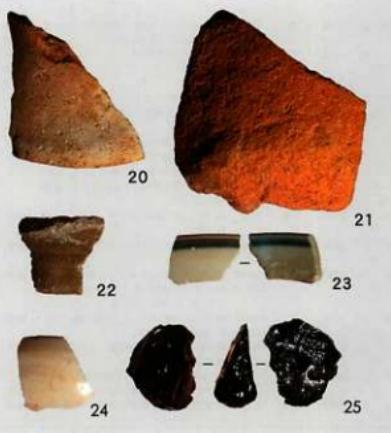


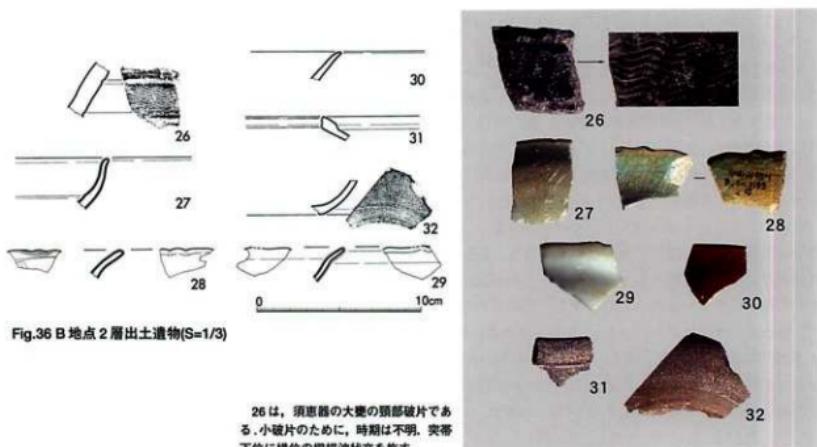
Fig.35 A地点 2b層出土遺物(S=1/3), (25)は S=1/2



PL.13 A地点 2a層出土遺物



PL.14 A地点 2b層出土遺物



26は、須恵器の大甕の頸部破片である。小破片のために、時期は不明。突帯下位に横位の櫛波状文を施す。

PL.15 B地点2層出土遺物

Tab.11 A・B地点2層出土遺物観察

No.	層	種別	器種	部位	色調	胎土		砂粒の 多さ	調整	備考
						混和材	砂粒の 多さ			
14	2a	青磁	皿?	口縁部	釉:不透明(風化か?)、明瞭灰に相似10 A	GVT1/L、光沢少なし、素地:白色。	1	内・外とも施釉。		近世。肥前系。
15	2a	染付	筒碗	胴(足)	釉:透明釉、光沢あり、全体に細5~4、貫入 A	が認められる。素地:灰(2.5VH/1)。	1	内・面とも施釉、外表面文様あり、 内面:屈曲部に線状の文様。		18世紀末~19世紀初。 近世。
16	2a	高麗焼	鉢	口縁部	釉:黒に類似5VH/2/L、若干光沢ある、素地:	砂:黒色粒、細砂:白色粒。	1	内・外とも施釉、ただし口縁上面 は釉が拭き取られる。外表面:黒粒 部位あり、2条の凹線。		近世。當代川系。
	A				灰褐色:灰(2.5VH/2)。					
17	2a	高麗焼	土瓶	蓋	釉:黑10VH2/L、光沢あり、不透明釉、素 A	地:赤10VH5/L。	2	外面のみ施釉(口縁部上半 面)。		近世。當代川系。
18	2a	土瓶		内・外面・器内:二重、黄釉10VH7/4.		砂:角閃石、細砂:黑色粒・白 色粒:透明粒。	7			直径:14.2mm, 中心孔:4.8mm, 一部欠損。
20	2b	古墳	甕	脚部	内・外面に二重、黄釉に相似10VH7/4. 器 A	砂:角閃石・黒雲母・石英、細 砂:黑色粒:透明粒。	4	内・外とも丁寧なナデ。		
21	2b	古墳	甕	底部	鉄分付着のため不明。	粗砂:白色粒・石英、砂:白色 粒:黑色粒・石英、細砂:黑色 粒:透明粒。	5	鉄分付着のため不明。		
22	2b	青磁	碗	脚部	透明釉+灰オーバー5VH/3. 光沢あり、全 A	面に細5~4が認められる。素地:灰白に 混入2.5VH/2。	1	内・外とも施釉。		中世。中国系。
23	2b	染付	皿?	口縁部	釉:灰2.5GVH/1. 不透明釉、光沢あり、 A	素地:白5VH/1.	1	内・外とも施釉、口縁部に暗褐色 灰色SGA/1のライン(内・外とも)。		
24	2b	白高麗	皿?	口縁部	釉:透明釉が非常に薄く落される。光沢あ り、細5~4、貫入が全面に認められる。素地: 灰2.5VH/2.		1	下端部で一部素地が露點。		
26	2	須恵器	大甕	頸部	内・外面・底に相似10VH4/L、器内:灰に粗 B	砂:黑色粒。	1	外表面:3コナデ、内面:剥落が 著しい。		櫛波状文。
27	2	青磁	桶?	口縁部	釉:オーバー7/1に相似5GVH/1. 素地:灰白 B	に相似5VH7/1.	1	内面:埋かに貫入が認められる。 内・外とも施釉。		中世。中国系。
28	2	青磁	皿?	口縁部	釉:明瞭灰に相似5.5GVH/1. 透明釉、光沢 B	あり、全面上に細5~4・貫入が認められる。 (梅花?)。	1	内・外とも施釉。		中世。中国系。内面 文様あり(草花?)。
29	2	白磁	皿	口縁部	釉:灰白に相似10VH8/1. 不透明釉、光沢あ B	り、素地:灰白NVH9.	1	内・外とも施釉。		中世。中国系。
30	2	高麗焼	土瓶	口縁部	釉:10VH4/L、不透明釉、光沢少なし、 B	素地:灰10VH6/L。	1	内・外とも施釉。		近世。
31	2	高麗焼	土瓶	底部	釉:オーバー黒5VH/1. 不透明釉、あまり光 B	沢がない。素地:赤10VH4/L。	1	口縁内面:3コナデ。		加治木・始良系。 近世。當代川系。
32	2	高麗焼	急須	底部	釉:較厚、光沢あり、赤5VH1. 素地:灰 B	オーバー5VH/2.	1	内・外とも施釉。		19世紀。龍門司。

5-3. A・B地点3層上面検出遺構(Fig.37-40, Tab. 12, PL.16-23)

3層上面検出遺構は、A地点において、土坑2基(SK1・2), B地点において、土坑1基(SK1)が確認されている。

A地点SK1は、検出面からの深さが9-10cm、埋土は、2b屑土で、灰黄色2.5Y6/2シルト質砂。パミスを含む。壁面の様子から(Fig.29;A地点東壁参照)、遺構で

ではなく、自然の層の落ち込みである可能性が高い。

A地点SK2は、推定径約0.6-1.0mの楕円形で、深さ9.5-10cmを計る。埋土は、2b屑土で、灰黄色2.5Y6/2シルト質砂。パミスを含む。(Fig.39)。

B地点SK1は、推定径約0.93-1.0mの楕円形で、深さ13-15cmである。埋土は、黄灰色2.5Y6/1シルト質砂0.5-1.0cm大のパミスを含む (Fig.40)。

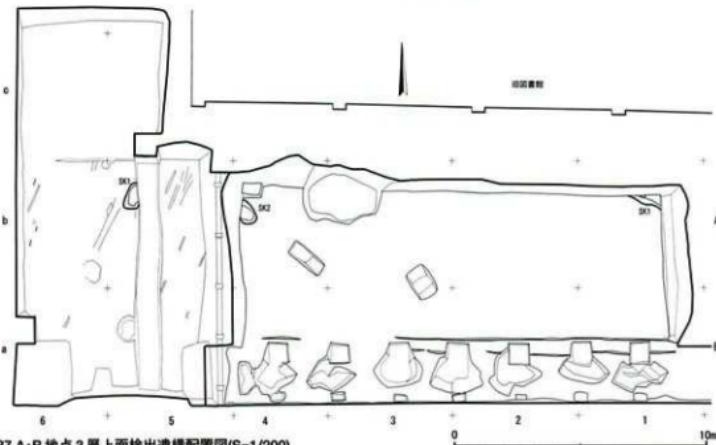
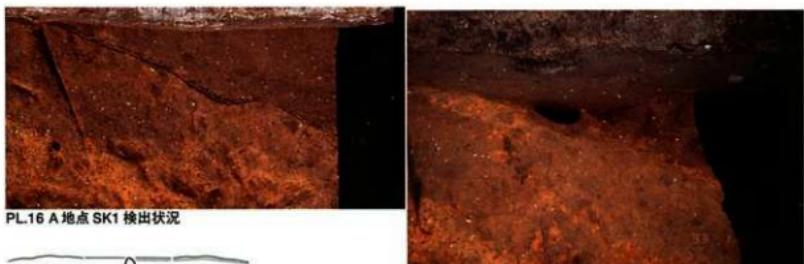


Fig.37 A・B地点3層上面検出遺構配置図(S=1/200)



PL.16 A地点SK1検出状況

PL.17 A地点SK1発掘状況

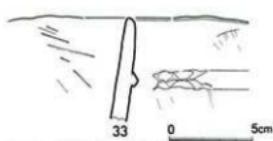


Fig.38 A地点SK1出土土器(S=1/3)



PL.18 A地点SK1出土遺物

典型的な簽賈式甌である。突帯貼り付けの際につまんだ指頭圧痕が、突帯上に明瞭に残る。

Tab.12 A地点SK1出土遺物観察

No.	層	地点	種別	器種	部位	色調	胎土		調整	備考
							混和材	砂粒の 多さ		
33	SK1	A	簽賈式	甌	口縁部 外面: 灰10YR4/6, 内面: 橙7.5Y8/6, 器身: 灰10YR4/2.	褐色	3 粗粒・角閃石 鐵: 白色粒, 硫酸: 黒色 粘土: 透明粒	外表面: ハケ(+) 内表面: ハケの打ち込み痕あり。		胎土充填1箇。

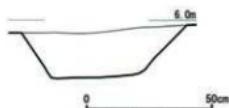


Fig.39 A地点 SK2(S=1/20)



PL.19 作業風景1

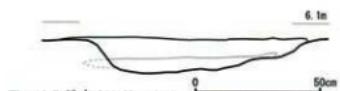
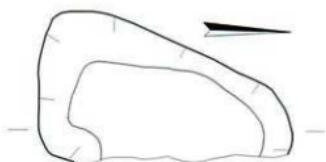


Fig.40 B地点 SK1(S=1/20)
断面は見通し。



PL.20 作業風景2



PL.21 B地点 SK1断面
断面の形状も不整形であり、浅く、底面に凹凸がみられる。このことも自然な落ち込みか、樹根の可能性があると考えられる。



PL.22 B地点 SK1 検出状況



PL.23 B地点 SK1 完掘状況

5-4. A・B地点3層出土遺物(Fig.41-42, Tab.13, PL.24-25)

3層出土遺物は、古墳時代後半期の遺物が中心に、わ

ずかに1点、薩摩焼(苗代川系)の羽釜資料が含まれている(Tab.38)。この資料は、2層形成段階における、何らかの落ち込みによるものであると考えられる。

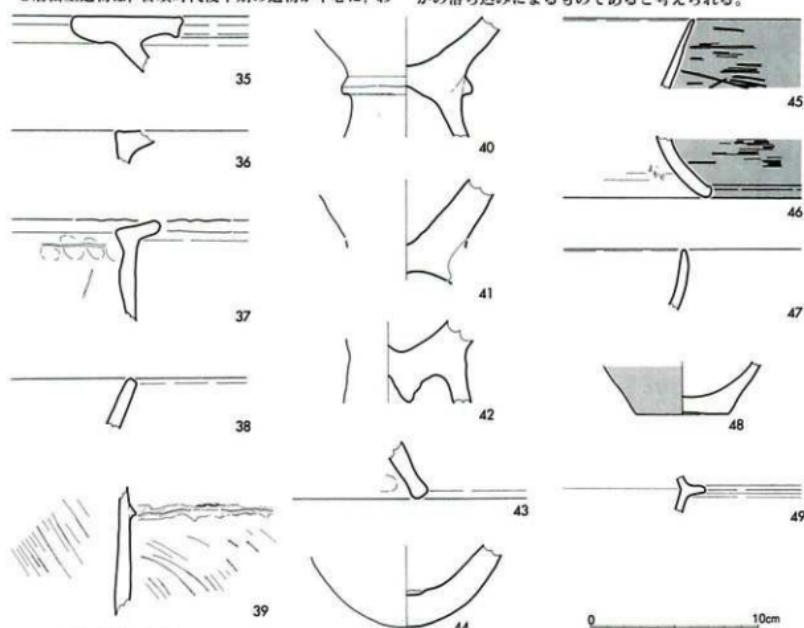


Fig.41 A地点3層出土遺物(S=1/3)



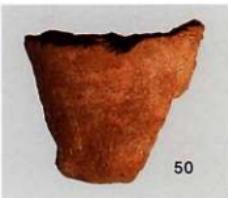
PL.24 A地点3層出土遺物

35は、甕の口縁部資料であるが、近年、鹿児島県内での出土例が増加してきている。口縁部上部平坦面の長さは、約6.5cmで、さほど大きな甕ではない。

36-37は、弥生時代中期に属すると考えられるが、つくりが難である。

38-43、45-48・50は、古墳時代のもので、甕(38-43・50)、鉢(77)、高環(46)、壺(48)などがある。

42の脚部内部の突起は、いわゆる「舌型」³⁾に属する資料で、やや低い。古墳時代後半期に散見されるものである。41は全形が不明であるが、立ち上がりのしっかりとしたとした厚みから、甕であると判断した。40の脚部の接合部に突帯を巡らせて加飾するものも、多くはないが、散見されるものである。

Fig.42 B地点3b層出土土器
(S=1/3)

PL.25 B地点3b層土器

Tab.13 A・B地点3層出土遺物観察

No.	層	地点	種別	器種	部位	色調	胎土		調整	備考	
							混和材	砂粒の多さ			
35	3	A	甕	甕部	外表面:黄褐色に類似3SYR6/6、内面:器内:にぶい黄褐色に類似10YR7/3.	粗砂:石英、砂:石英、雲母、細砂:雲母、透明粘土。	5	口縁部(内外面)ヨコナデ。全体に磨入品。剥落が大きい。			
			36	3	A	甕	甕部 細分付着・摩滅のため不明。		鉄分付着・摩滅のため不明。		
37	3	A	甕	甕部	外表面:にぶい黄褐色に類似3SYR7/4、内面:にぶい黄褐色に類似10YR8/4、器内:浅黄色10YR8/4.	粗砂:白色粘・白色粘、砂:角閃石・石英、細砂:黑色粘。	3	外表面:ハケの打ち込み痕、摩減。内面:コビオサエ、摩減。	接合痕あり。		
			38	3	A	古墳	甕部 外表面:にぶい黄褐色に類似3SYR6/4、器内:にぶい黄褐色10YR7/4.	粗砂:白色粘、砂:角閃石・石英、細砂:黑色粘。	2	外表面ヨコナデ、内面:ナデ(一ノ)。	
39	3	A	古墳	甕	脚部	内表面:鉄分付着のため不明。器内:にぶい黄褐色10YR6/3.	粗砂:黑色粘、白色粘、細砂:黑色粘・透明粘。	3	内外・内面:粗(一)ハケ(一ノ)。		
			40	3	A	古墳	脚部付近 外表面:浅黄色10YR8/4、器内:浅黄色7.5YR8/4.	砂:角閃石・石英、細砂:黑色粘。	4	外表面ヨコナデ・ナデ(一)、内面:接合痕あり。粗(一)ナデ。	接合痕あり、三角突起1本。
41	3	A	古墳	甕	底部	外表面:明黄色10YR6/6、内面:明黄色10YR8/6. 器内:鉄分付着のため不明。	粗砂:石英・白色粘・灰色粘、砂:角閃石・石英、細砂:白色粘。	4	外表面:ナゲ、内面:摩減。		
			42	3	A	古墳	甕 底部 外表面:黄褐色10YR8/6、内面:灰黃褐色10YR7/6. 器内:灰白色10YR8/2.	粗砂:石英・角閃石・石英、砂:角閃石・石英、細砂:白色粘。	6	外表面:ナゲ、内底面:ハケーナゲ。	
43	3	A	古墳	甕	脚部付近 外表面:浅黄色10YR8/4、内面:明黄色に類似10YR7/4.	粗砂:石英・砂:白色粘・石英、細砂:白色粘。	4	外表面:摩減、内面:ヨコナデ。			
			44	3	A	古墳	底 底部 外表面:明黄色10YR6/6、内面:器内:黄色10YR5/6.	砂:角閃石・石英・白色粘、細砂:黑色粘。	2	内面:コビオサエ。	
45	3	A	古墳	高杯	甕部	外表面:明赤褐色に類似2SYR5/6、内面:にぶい黄褐色に類似10YR7/6. 器内:にぶい黄褐色2.5SYR5/6.	粗砂:白色粘。	1	外表面ミキ(ただし鉄分付着のため不明顔)、内面:ヨコナデ。外表面赤色顔料坐布、内面:顔料が粗面状に残る。		
			46	3	A	古墳	高杯 脚部 外表面:黄褐色10YR5/6、内面:黄褐色10YR5/8. 器内:赤褐色10YR8/2.	粗砂:角閃石・砂:角閃石・灰岩色粘、細砂:黑色粘。	4	外表面:ハケ(一)、内面:ナデ(一)。→ヨコナゲ。	外表面赤色顔料坐布。
47	3	A	古墳	鉢	甕部	鉄分付着のため不明。	鉄分付着のため不明。	2	鉄分付着のため不明。		
			48	3	A	古墳 坑	底部 外表面:赤10R5/6、内面:にぶい黄褐色に類似10YR7/4. 器内:黄褐色2.5SYR5/6.	砂:角閃石・石英、細砂:黑色粘・透明白粘。	1	外表面ミキ(鉄分の付着により不明)。外表面赤色顔料坐布、内面:鉄分付着のため不明。底径(5.6cm)。	
49	3	A	魔術施用器	鉢	内・外表面:暗赤褐色2.5SYR3/3. 壁厚:粗約2.5YR6/6.	砂:白粘・細砂:白色粘・黑色粘。	2	内面:外底面とも施塗。	19世紀以降、苗代川系。		
			50	3b	B	古墳 坑	脚台 外表面:浅黄色2.5SYR8/4. 内面:鉄分付着のため不明。器内:浅黄色10YR8/4.	粗砂:石英・砂:角閃石・石英・白色粘、細砂:黑色粘・透明粘。	3	外表面:ナゲ、内面:ナゲ・コビオサエ。	

5-5.A・B地点4層上面検出遺構(Fig.43-50, Tab.

14-18, PL.26-41)

A地点における4a層上面検出遺構は、SD1-2, SD1a・1bがあり、これらは北西-南東方向に伸びている。また、4b層上面検出遺構SK3は、推定径約0.9-1.1mの楕円形で、性格不明である。B地点では、SD1-3, SK2が検出されており、SK2は浅い方形状の落ち込みであるが、住居跡であるという確証がなかった。

A地点のSD1=SD1b=SD2は、方向性から考えて、同一の遺構である。A地点SD2=SD1aも同一遺構に属するものと考えられる。これらの埋土には、粗砂や細砂が多量に含まれ、また、周の平面形状も凹凸が著しく、人為的なものとは考えにくい。また、B地点において検出されたSD1やSD3も同一方向にあるとすれば、約5m幅の河川があったか、湿地における浅い自然流路の可能性が高い。断面形状か

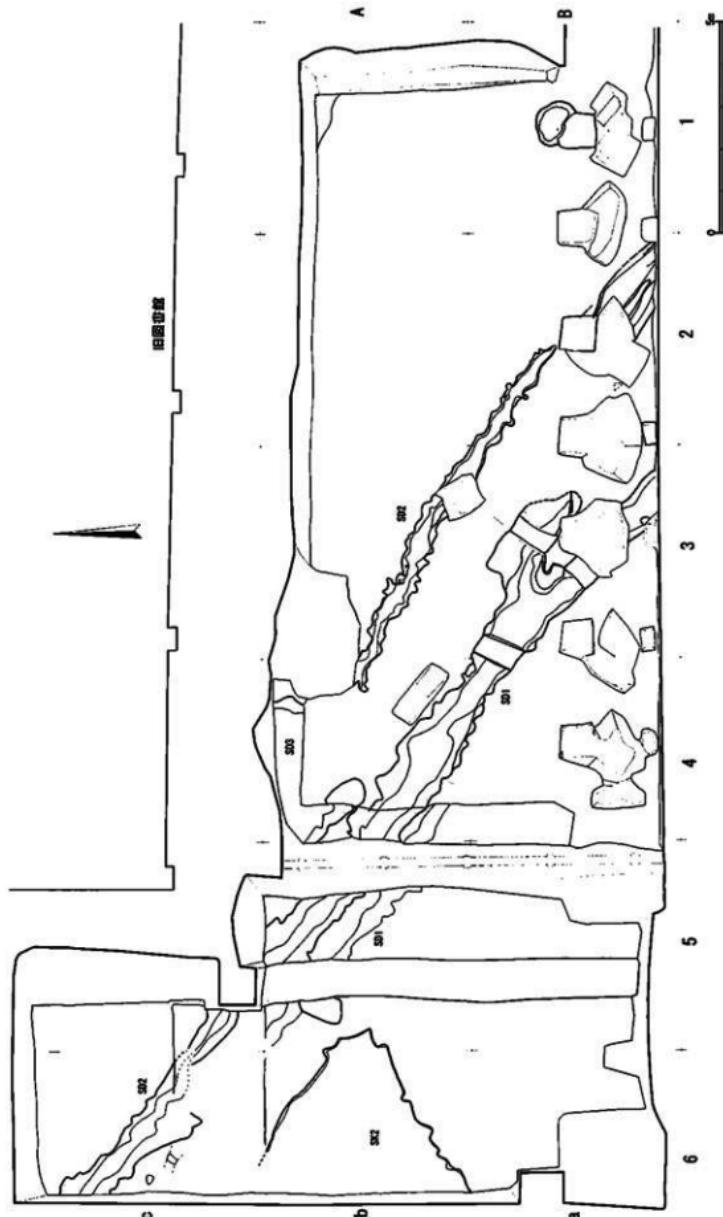


Fig.43 A・B地点4層上面検出造構(S=1/120)

らみると(PL.28),
2層土の堆積時に,
削平されたよう,
上部がなくなつて
いる。しかし、付録
2にあるように、3
層の土壤プラン
ト・オパール定量
分析では、かなり
の量でイネ・ヨシ
が検出されており、水田の可能性があ
る。しかし、その周辺には他の遺構は
認められていない。



PL.26 A地点 SD1 検出南側



PL.27 A地点 SD1 完掘



PL.28 A地点 SD1 断面

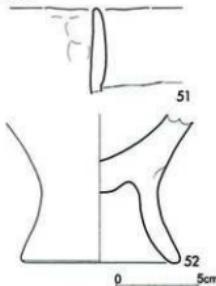
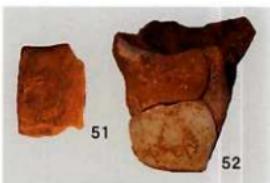


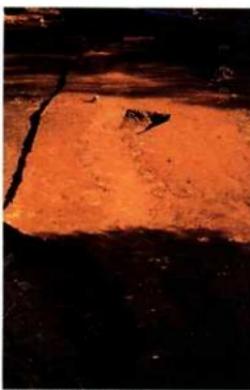
Fig.44 A地点 SD1 出土土器(S=1/3)



PL.29 A地点 SD1 出土土器

Tab.14 A地点 SD1 出土土器観察

No.	層	地点	種別	器種	部位	色調	胎土	混和材	砂粒の 多さ	調整	備考
51	SD1	A	古墳	甕	口縁部	鉄分付着のため不明	細砂: 黒色粒・透明粒	1	外面: ナデ、内面: ナデ・コビオサ	貼付容器の接合部か り、 ニ。	
52	SD1	A	古墳	甕	脚台	外面: 明黄褐色10YR6/6、内面: 黒褐色2.5Y 3/2、脚内: 淡黃褐色10YR6/1.	粗砂・砂: 角閃石・石英、細砂:	4	内・外表面: ナデ、 黒色粒・透明粒	底径(9.0cm)、	



PL.30 A地点 SD2 検出



PL.32 A地点 SD2 断面

Fig.45 A地点 SD2
出土土器 (S=1/3)PL.33 A地点 SD2 出
出土土器

Tab.15 A地点 SD2 出土土器観察

No.	層	地点	種別	器種	部位	色調	胎土	混和材	砂粒の 多さ	調整	備考
53	SD2	A	古墳	甕	底部	外面: 明黄褐色10YR6/6、内面: 明黄褐色10YR 6/6、器内: 鉄分付着のため不明	細砂・粗砂: 灰色粒、砂: 角閃石 -石英、細砂: 黒色粒	4	内・外表面とも剥落、外表面: ハケの 打ち込み痕あり		



PL.34 B地点 SD1・2検出状況

B地点SD2において、作業台石らしき石器の破損品が出土している(54)。片面に磨面があり、片面は自然面のままで、加工痕らしきものは見当たらない。

出土状況からは、時期判断が困難であるが⁵、遺跡の性格から、弥生時代あるいは古墳時代に属するものが⁶、後世の流路による削平であらわれたものとみなしたい。



54

PL.36 B地点 SD2出土石器

PL.35 B地点 SD2
完掘

Tab.16 B地点 SD2出土石器観察

No.	層	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
54	SD2	碧玉安山岩	25.1	11.8	4.8	1350	作業台

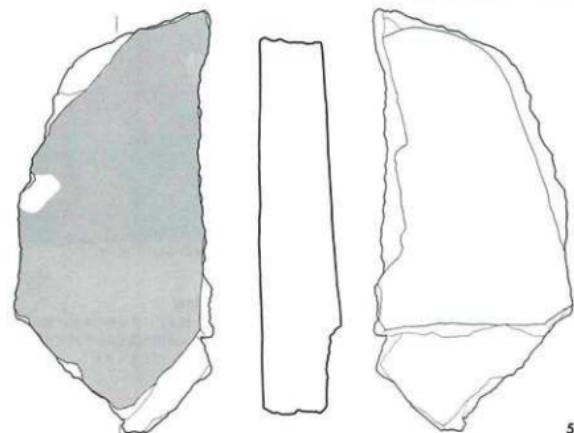
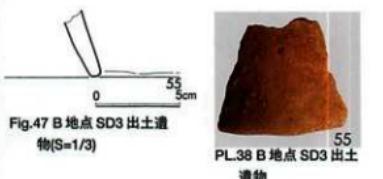


Fig.46 B地点 SD2出土石器(S=1/3)



PL.37 B地点 SD3発掘状況

Tab.17 B地点 SD3出土土器観察

No.層	種別	器種	部位	色調	埴土		調整	備考
					混和材	砂粒の 多さ		
55 SD3	古墳	先	脚台 内・外面・器内	褐7.5YR8/6.	粗砂:石英、砂:角閃石・黒色 粒:白色粒。	1	内・外面:BBナゲ。	
B								

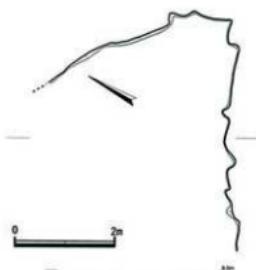


Fig.48 B地点 SK2
(S=1/100)
深さ2-3cm程度しかなく、土層の落ち込みである可能性が高い。

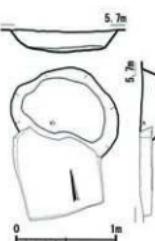


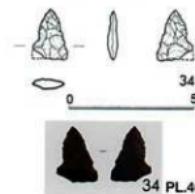
Fig.50 A地点 4b層上面検出
SK3(S=1/50)



PL.39 B地点 SK2発掘



PL.41 A地点 4b層上面検出SK3発掘



34 Fig.49 B地点 SK2出土石旗
(S=1/2)



34 PL.40 B地点 SK2出土石旗

Tab.18 B地点 SK2出土石旗観察

長さ2cm程度の石旗であり、技術的に縁辺部の剥離が粗く、大雑把である。本調査区の出土遺物の状況から判断すれば、弥生時代中期ごろの遺物ではないかと考えられる。

No.層	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
34 SK2	ホルンフェルス化した頁岩	2	1.5	0.41	0.85

No.層 材質 最大長(cm) 最大幅(cm) 最大厚(cm) 重量(g)

34 SK2 ホルンフェルス化した頁岩 2 1.5 0.41 0.85

5-6.A・B地点4層出土遺物(Fig.51-56, Tab.19-28,
PL.42-49)

4層は、A・B地点において、最も遺物の出土量の多い層である。出土遺物は5層上面で検出される遺構の時期に近いものと判断されるが、遺物に弥生時代中期・古墳時代後半期という時期幅がある。

弥生時代の遺物も少なくない。弥生時代中期前半新段階の人来II式土器は、小破片が多いものの、口唇部を平坦にし、凹部を形成する特徴と、口縁部上端が水平もしくはわ

ずかに上下に傾く特徴から、比較的容易に認定される(56・57・59, 81・84・117-126)。また、口縁部上端がやや上傾していることから、人来II式よりも、やや後出すると考えられる一群があり(58-82・83・127)、そのほかにも中九州系の黒髮式系統土器(85)や、北部九州の須玖式系統の土器片も出土している(89)。また、系統不明の資料(60・86)も存在する。

特筆すべきは、人来II式段階の大甕(120・121・125)と、

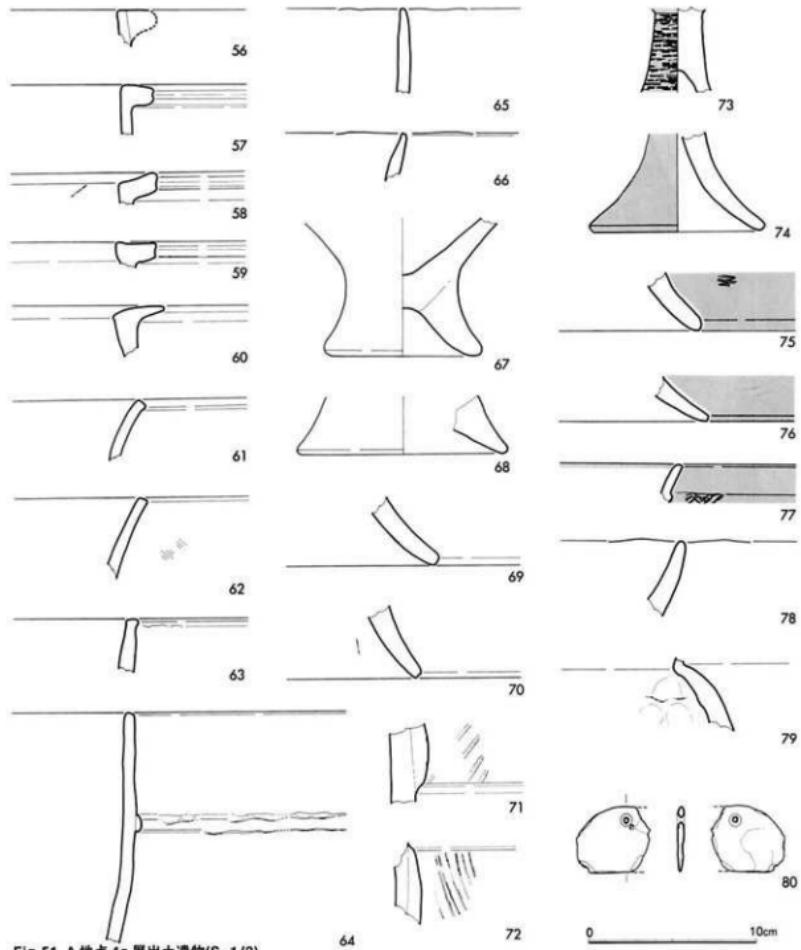


Fig.51 A地点4a層出土遺物(S=1/3)



PL.42 A 地点4a層出土遺物

一の宮式段階の甕(127)の出土であろう。前者は、大粒の雲母を胎土に混入しており、鹿児島湾沿岸部の主要な胎土ではない。大隅半島や指宿地域、甑島地域、大隅諸島地域に顕著な胎土である。ほかにも(56-58-81-117-123-124-129)などは、大粒の雲母を混入しており、日常的な地域間交流の一端をあらわしている可能性が高い。教育学部キャンパスにあたる郡元団地M-N-4-5区(サークル棟建設地)の調査では、山ノ口式土器が多量に出土しているが、その大半に雲母を混入する⁴⁾。

後者の一の宮式甕は、「格撋突帯」・「中実脚台」・「口

縁部の内面への張り出し」・「黒褐色」・「粗造」などで、特徴付けられる土器であるが⁵⁾、その系譜など不明な部分が多い。近年では、北薩遺跡において、入来日式段階から格撋突帯・黒褐色・粗造などの特徴を持つことが知られており⁶⁾、少なくとも鹿児島市域では、このような特徴は、弥生時代中期中葉ごろから現れていることが分かってきている。本遺跡出土資料は、口縁部の屈曲部が短いことや、内面への突出がないことなどから、型式的には、典型的な一の宮式甕よりもや古手であり、入来日式よりは、後出であろうと考えられる。

Tab.19 A地点 4a層出土土器

No.	層	種別	器種	部位	色調	胎土		調整	備考
						混和材	砂粒の 率(%)		
56	4a	弥生	甕	口縁部 外面:に赤・黄褐色S15S-L 内面:鉢分付着のため不明 脳内:明赤系2.5YR6.6.	褐:石灰、黒砂:石英岩・角閃石・白石英・白色粘土・角閃石・白色粘土・細砂:黑色粘土・白色粘土	3	外赤・薄赤 内面:鉢分付着のため 混合瓶あり 不明		
57	4a	人差し式	甕	口縁部 内・外面:明褐色7.5YR5/6. 脳内:10YR7.5/6.	褐砂:角閃石・石英・黑色粘土	7	草誠のため不明		
58	4a	人差し式	甕	口縁部 内・外面:浅褐色2.5YR7/3. 脳内:10YR6/1.	白:白砂:粗砂:白色粘土・黑色粘土・白色粘土・黑色粘土	5	外赤:ミコナダ 内面:へクサ工具による調整板		
59	4a	人差し式	甕	口縁部 外面:灰褐色7.5YH1/2. 内面:に赤・黄褐色10YR5/3. 脳内:鉢分付着のため不明	褐砂:灰砂:粗砂:白色粘土・白色粘土・沙:角閃石・石英・黑色粘土	2	外赤:ロ碧酸:ミコナダ		
60	4a	弥生	鋤先付	口縁部 外面:に赤・黄褐色S15S-L/3. 脳内:脳内:鉢分付着のため不明	褐砂:赤砂:粗砂:白色粘土・灰白色粘土・沙:石英・黑色粘土	2	内・外赤:ミコナダ		
61	4a	古墳	甕	口縁部 外面:に赤・黄褐色S15S-L/3. 内面:に赤・暗褐色7.5YR6/2. 脳内:鉢分付着のため不明	褐砂:白色粘土・沙:石英・灰色粘土	2	内・外赤:ロ碧酸:ミコナダ		
62	4a	古墳	甕	口縁部 外面:に赤・黄褐色S15S-L/3. 内面:明褐色10YR6/2. 脳内:灰褐色10YR6/2. 脳内:灰褐色10YR6/2.	褐砂:沙:角閃石・石英・細砂:黑色粘土・透明粘土	4	外赤:ハケ(一)・刺窓 内面:ミコナダ・ミコナダ・オチャエ		
63	4a	直口式	甕	口縁部 外面:に赤・黄褐色S15S-L/3. 内面:灰褐色10YR6/2. 脳内:灰褐色10YR6/2.	褐砂:沙:角閃石・石英・細砂:黑色粘土・透明粘土	3	外赤:胎内が外側面にかかる。 内面:ハケ(一)・ミコナダ(一)		
64	4a	古墳	甕	口縁部 外面:に赤・黄褐色10YR6/2. 脳内:灰褐色10YR6/2.	褐砂:角閃石・石英・細砂:白色粘土・透明粘土	4	外赤:鉢分付着・摩滅のため不明 脱村安次先生の付名		
65	4a	直口式	甕	口縁部 上:2.5YR5/2. 下:2.5YR5/1. 脳内:灰褐色2.5YR5/1.	褐砂:石英・白色粘土・細砂:白色粘土	2	外赤:鉢分付着のため不明 内面: ロ碧酸:ミコナダ・ビコサエ		
66	4a	古墳	甕?	口縁部 外面:灰褐色5YR5/2. 脳内:鉢分付着のため不明 明褐色10YR6/1.	褐砂:沙:角閃石・石英・細砂:黑色粘土	2	外赤:ミコナダ 内面:鉢分付着のため不明		
67	4a	古墳	甕	脚台 外面:に赤・黄褐色に似た10YR7/4. 内面:に赤・暗褐色に似た10YR7/2. 脳内:に赤・暗褐色に似た10YR7/4.	褐砂:灰色粘土・粗砂:石英・白色粘土・沙:角閃石・石英・細砂:黑色粘土	4	外赤:ナダ(一)・明瞭に底が吸収。 混合瓶あり底径(0.8cm) 内面:非常に丁寧なナダ。		
68	4a	古墳	甕	脚台 内・外赤:灰褐色10YR6/2. 脳内:鉢分付着のため不明	褐砂:白色粘土	2	内・外赤:鉢分付着のため不明 混合部で底赤 瓶径(1.2cm)		
69	4a	古墳	甕	脚台 外面:に赤・黄褐色に似た10YR7/4. 内面:灰褐色に似た10YR6/2. 脳内:灰褐色に似た10YR6/2.	白:白色粘土・粗砂:石英・白色粘土・沙:角閃石・石英・細砂:黑色粘土	2	外赤:ナダ(一)・摩滅 内面:ミコナダ		
70	4	古墳	甕	脚台 外面:に赤・黄褐色に似た10YR7/4. 内面:に赤・暗褐色に似た10YR6/2. 脳内:に赤・暗褐色に似た10YR6/2.	白:白色粘土・粗砂:石英・白色粘土・沙:角閃石・石英・細砂:黑色粘土	2	外赤:ナダ(一)・端部はミコナダ 内面:ハケ(一)・ミコナダ・ハサツ 打ち込み痕あり		
71	4a	灰質式	表	副縁部 外面:に赤・黄褐色に似た10YR7/4. 内面:鉢分付着のため不明 脳内:鉢分付着のため不明	褐砂:石英・白色粘土・沙:石英・白色粘土・透明粘土	6	外赤:ミコナダ 内面:鉢分付着のため不明 初矢利(一)・摩滅		幅広突起にハケによる 初矢利(一)・摩滅
72	4a	灰質式	表	副縁部 内・外赤:に赤・黄褐色に似た10YR6/2. 脳内:灰褐色に似た10YR6/1.	白:白色粘土・粗砂:石英・白色粘土	4	外赤:ミコナダ 内面:刺窓		幅広突起にハサツによる 沈れ(一)・摩滅
73	4a	古墳	高杯	副縁部 外面:に赤・黄褐色に似た2.5YR5/6. 脳内:灰褐色2.5YR6/2.	褐砂:透明粘土	1	外赤:ミコナダ(一)		外赤:赤色顔料着赤
74	4a	古墳	高杯	副縁部 副縁部上:赤褐色に似た10YR4/1. 内面:脳内:鉢分付着のため不明	褐砂:黑色粘土・細砂:透明粘土	1	鉢分付着のため不明		外赤:赤色顔料着赤
75	4a	古墳	高杯?	副縁部 外面:に赤・黄褐色に似た2.5YR4/1. 内面:に赤・暗褐色に似た10YR5/2. 脳内:灰褐色2.5YR5/1.	褐砂:黑色粘土・沙:角閃石・石英・細砂:白色粘土	2	外赤:難いが赤 内面:ナダ(一)・外赤:赤色顔料着赤		
76	?	古墳	高杯	副縁部 内・外赤:灰褐色10YR6/2. 赤褐色粘土:灰褐色2.5YR4/2. 脳内:鉢分付着のため不明	白:角閃石・石英・細砂:白色粘土	2	外赤:ミコナダ		外赤:赤色顔料着赤
77	4a	古墳	鋤かき	口縁部 外面:に赤・黄褐色に似た2.5YR5/6. 内面:灰褐色2.5YR6/2. 脳内:灰褐色10YR6/2.	褐砂:黑色粘土・透明粘土	1	外赤:ミコナダ(一) 内面:丁寧なナダ		目口突起(赤)(一)・外赤:赤色顔料着赤
78	4a	古墳	甕	口縁部 外面:に赤・黄褐色に似た10YR6/2. 内面:鉢分付着のため不明	白:角閃石・沙:角閃石・石英・白色粘土・細砂:白色粘土・透明粘土	2	内・外赤:ナダ(一) 内面:ハケ(一) 打ち込み痕あり		
79	4a	古墳	堆	副縁部上 外面:に赤・黄褐色に似た2.5YR7/4. 内面:に赤・黄褐色に似た10YR6/4. 脳内:鉢分付着のため不明	白:角閃石・沙:角閃石・石英・白色粘土・細砂:黑色粘土・透明粘土	3	外赤:ナダ 内面:ミコナダ・ビコサエ サエ、第7の副縁部痕あり		

Tab.20 A地点 4a層出土土器

No.	層	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
80	4a	ホルンフェルス化した百合	4	4.1	0.4	13.6	直径:0.25cm. 平欠.

弥生時代後期に属する資料の存在はないが、弥生時代終末期ごろの特徴を備える土器片は認められる(87-88)。

B地点4b層では、弥生土器が比較的まとまって出土しており、弥生時代包含層の存在を窺わせる。ここでは、弥生時代終末期-古墳時代前期に属する中津野式の台付鉢(131)や、古式土師器系土器(132)も出土している。台付鉢(131)は、胎土に黒雲母の混入がみられる。古式土

器系土器(132)は、底部形態は不明であるが、口縁部や球胴形状の特徴から、布留式並行ごろの時期が与えられるものである。そのなかでも、口縁部の傾きや口唇部のつくりから、古墳時代前半期に位置づけられるものではないかと推定されるが、布留式土器を忠実に模したものではないため、判断が難しい。土器類が成川式土器様式群と比べて薄く、口縁部外面に暗文などを有する特徴から、

付録1 都元団地L-6区(中央図書館跡地A・B地点)における発掘調査

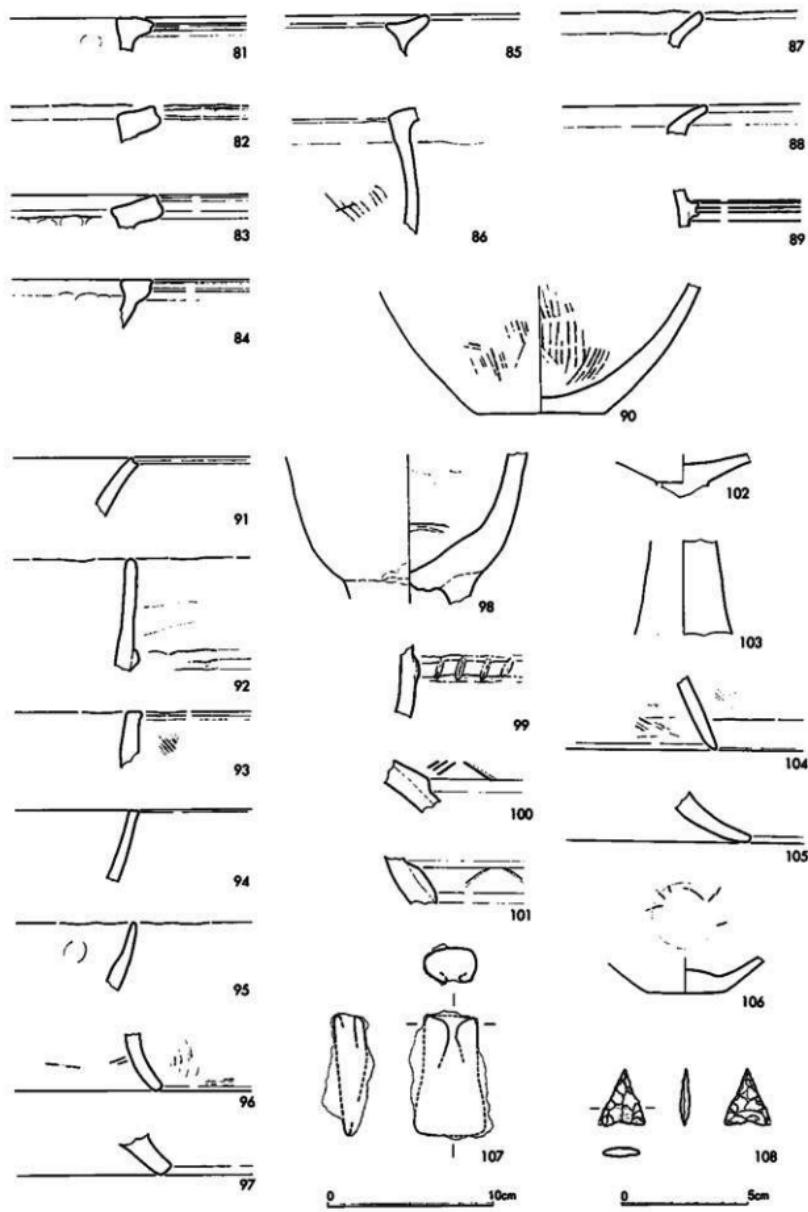
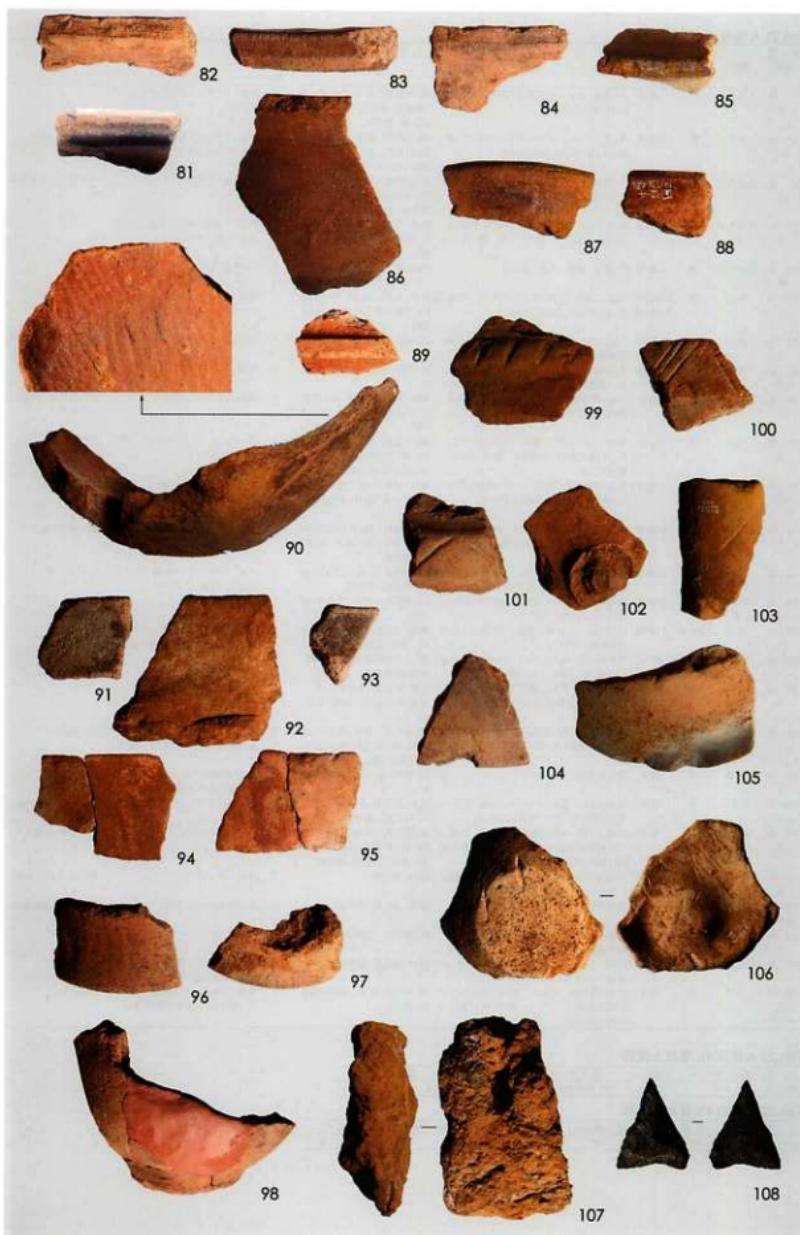


Fig.52 A地点 4b層出土土器(S=1/3), (106)は S=1/2



PL.43 A地点 4b層出土遺物

付録1 都元団地L-6区(中央図書館増築地A・B地点)における発掘調査

Tab.21 A地点 4b層出土遺物

No.	層	地點	種別	器種	部位	色調	胎土		調整	備考
							品目	砂粒の 含有量		
81-4b	A	人来式	甕	口縁部	内・外面:にぶ~薄に黒5VRS/4. 肉面:暗:灰色地. 種砂:白色粒. 砂:白. 黄褐色. 角閃石. 石英. 絹砂:	2	外面:ヨコナダ. 内面:ナデ・ユビオサエ.			
82-4b	A	人来式	甕	口縁部	内・外面:にぶ~薄に黒5VRS/4. 肉面:暗:灰色地. 種砂:角閃石. 石英. 絹砂:	2	外面:ナデ・ヨビオサエ. 内面:ユビオサエ・ヨコナダ. ロータリ:ヨコナダ.			
83-4b	A	人来式	甕	口縁部	内・外面:にぶ~薄に黒5VRS/4. 肉面:暗:白色地. 種砂:角閃石. 石英. 絹砂:	2	内・外面・ロータリ:ヨコナダ. 内面側に突出部を點付.			
84-4b	A	人来式	甕	口縁部	外面:にぶ~薄に黒5VRS/4. 内面:にぶ~薄に黒5VRS/4.	2	外面:ロータリ:ヨコナダ. 内面:ユビオサエ. 胎土が少ぶる.			
85-4b	A	堅壁式系	甕	口縁部	内・外面:内:黄に黒5VRS/1.	2	外・内面:ヨコナダ.			
86-4b	A	仰生	甕	口縁部	外面:にぶ~薄に黒5VRS/3. 内面:基部:石英. 白色粒. 砂:灰色粒. 砂:白色粒. 砂:白色粒. 白色地.	2	外面:ヨコナダ. 内面:ハケ(△). ヨコナダ. ハケの打ち込み痕.			
87-4b	A	仰生	甕	口縁部	内面:ホワイト5VRS/1. 外面:内面:鐵.	2	外・内面:ヨコナダ. 口縁部のゆがみが著しい.			
88-4b	A	仰生	甕	口縁部	外面:にぶ~薄に黒5VRS/1. 内面:内:黄に黒5VRS/1. 基部:灰5VRS/1.	4	外面:ヨコナダ. 内面:丁寧なナデ.			
89-4b	A	堅壁式	甕	胴部	外面:褐色2.5VRS/6. 内面:浅黄5VRS/6.	4	外面:ヨコナダ. 内面:ナデ. M字状突起. 外面:赤色斜削部.			
90-4b	A	仰生	甕	底部	外面:にぶ~黄に黒5VRS/4. 内面:にぶ~暗に黒5VRS/4. 基部:灰5VRS/4.	2	内・外面:ハケ(△)-ナデ. ただし底径(7.5cm). 腹周は丸みだらけ.			
91-4b	A	牛生か 古墳	甕	口縁部	外面:灰5VRS/1. 内面:にぶ~黄に黒5VRS/4. 基部:浅黄5VRS/3.	4	外面:ナデ. 槌突が苦しい. 内面:ナデ. ロータリ:ヨコナダ			
92-4b	A	堅壁式	甕	口縁部	外面:肉桂に黒5VRS/3. 内面:にぶ~黄に黒5VRS/3. 基部:浅黄5VRS/3.	2	外面:ナデ・ユビオサエ(△). 内面:撫付突起1本. ナデ・ハケの打ち込み痕(△).			
93-4b	A	古墳	甕	口縁部	外面:にぶ~黄5VRS/3. 内面:浅黄に黒5VRS/3. 基部:灰5VRS/2.	2	外面:ハケ(△). 外面側に胎土がススの付着. かるぶる. 内面:ナデ(△).			
94-4b	A	牛生か 古墳	甕	口縁部	外面:灰5VRS/6. 内面:にぶ~黄に黒5VRS/3.	3	内・外面:ヨコナダ.			
95-4b	A	古墳	甕	口縁部	外・内面:にぶ~暗に黒5VRS/4. 肉面:浅黄5VRS/4.	2	外面:草誠のため不明. 内面:ユビオサエ. 鉄分付・深鉢が苦しい.			
96-4b	A	古墳	甕	口縁部	外・内面:にぶ~黄に黒5VRS/4. 基部:浅黄5VRS/3.	4	外面:ナデ(△)-ナデ. ヨコナダ.			
97-4b	A	古墳	甕	脚部	外・内面:にぶ~黄に黒5VRS/4. 基部:浅黄5VRS/4.	3	内・外面:ヨコナダ.			
98-4b	A	古墳	甕	底部付近	外面:にぶ~暗に黒5VRS/4. 内面:にぶ~灰に黒5VRS/4. 基部:灰5VRS/2.	2	外面:ハケ(△)-ナデ(△). 接合部あり. 脱落あり. 内面:ハケ(△)-暗(△).			
99-4b	A	古墳	甕	胴部	外・内面:にぶ~黄に黒5VRS/4. 基部:灰5VRS/2.	2	外・草誠のため不明. 内面:鉄. 初日突起(△).			
100-4b	A	堅壁式	甕	胴部	外面:にぶ~黄5VRS/7. 内面:にぶ~灰5VRS/2.	3	外・内面:ナデ.			
101-4b	A	堅壁式	甕	胴部	外・内面:にぶ~黄に黒5VRS/4. 基部:にぶ~黄に黒5VRS/2.	3	外・草誠のため不明. 内面:ナデ・ヨコナダ.			
102-4b	A	古墳?	高杯	胴部	外・内面:にぶ~黄5VRS/4. 基部:にぶ~黄に黒5VRS/1.	1	外・外:ヨコナダ.		脚が落合部で欠落.	
103-4b	A	古墳?	高杯	脚部	外・内面:にぶ~黄に黒5VRS/1. 基部:にぶ~黄に黒5VRS/1.	1	脚部分のため不明.		外:赤斜削部.	
104-4b	A	牛生か 古墳	高杯	脚部	外・内面:にぶ~黄に黒5VRS/4. 基部:灰5VRS/2.	2	外面:ハケ(△)-ヨコナダ. 内面:ヨコナダ.			
105-4b	A	古墳	高杯	脚部	外・内面:にぶ~黄に黒5VRS/4. 基部:灰5VRS/2.	1	外面:ヨコナダ. 内面:ナデ. 内・外:同じ模様が苦しい.			
106-4b	A	古墳	壺	底部	外・内面:浅黄に黒5VRS/2. 基部:灰5VRS/2.	1	外・丁寧なナデ. 草誠. 内底面:底径4.5cm. ハケ打ち込み痕が明顯に見える.			

Tab.22 A地点 4b層出土鐵器

No.	層	最大長(cm)	刃部幅(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	備考
107-4b		7.0	4.5	不明	底部:約1.8cm.	110.39 完品. 鋸刃部が苦しい.

Tab.23 A地点 4b層出土石器

No.	層	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
108-4b		ホルンフェルス化した石片	2.05	1.8	0.4	0.95	一部欠損.



PL.44 A地点4b層出土鉄斧X線写真
(鹿児島県立埋蔵文化財センター提供)
X線写真でも鋸歯の美しい様子が分かる。ソケット部は密着せず、離れている。



PL.45 B地点4層出土土器

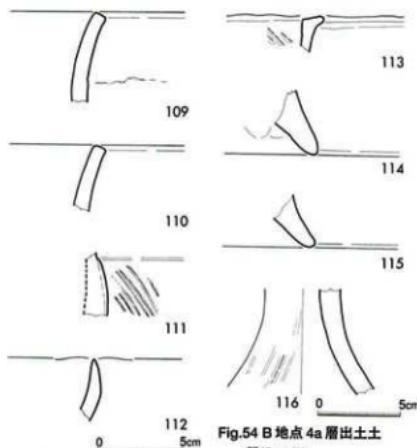


Fig.53 B地点4層出土土器 (S=1/3)



Tab.24 B地点4a層出土土器

No.	層	地点	種別	器種	部位	色調	粘土			備考
							混和材	砂粒の 多さ	調整	
109	4	B	古墳	甕	口縁部	外面:浅黄に細粒10YR7/3. 内面:に5Y-黄 粗粒に細粒10YR7/4. 器内:浅黄10YR8/3.	織:赤茶・粗砂・角閃石・石 英・砂・角閃石・白色粒・織	2	外面:ヨコナダ・丁寧なナダ. 内面: ヨコナダ・丁寧なナダ.ロ音部;ヨコ ナダ.	
110	4	B	古墳	甕	口縁部	外面:淡黄2.5YR6/3. 内面:浅黄2.5Y7/3. 器内:に5Y-黄2.5Y6/3.	織:石英・黒雲母・白色粒. 粗 砂:石英・黒雲母・黑色粒. 砂・ 織:石英・黑色粒.	5	内・外:剥落のため不明.	
111	4	B	灰質甕	甕	胴部	内・外:に5Y-黄褐色に細粒10YR7/3. 器 内:浅黄10YR8/4.	粗砂:石英・白色粒・黑色粒. 砂:石英・白色粒・赤色粒. 織 砂:白色粒・黑色粒・透明粒. 織:石英・黑色粒.	4	外:幅広突帯. 内:剥落. 幅広突帯にヘラ状工 具による刺突文(△).	
112	4	B	古墳	鉢	口縁部	内・外:に5Y-黄2.5Y6/3. 器内:淡黄2.5 YR7/3.	粗砂:赤色粒・白色粒・白色粒. 砂:角閃石・石英・白色粒. 細 砂:黑色粒・透明粒.	2	外:丁寧なナダ. 内:粗いナダ.	
113	4a	B	仰生	盆&甕	口縁部	外面:に5Y-黄褐色に細粒10YR7/4. 内面: 黄褐色に細粒10YR8/4. 器内:灰白10YR8/3.	粗砂:赤色粒・白色粒・白色粒. 砂:角閃石・石英・白色粒. 細 砂:黑色粒・透明粒.	4	外:ナダ. 内:ヘラ状工具の粗い 調整痕.	
114	4a	B	古墳	甕	脚台	外:に5Y-黄褐色に細粒10YR8/4. 内面: 器内:既分付着のため不明.	粗砂:石英・黑色粒・白色粒. 砂:角閃石・石英. 細砂:黑色 粒.	4	外:ヨコナダ. 接合部で剥落.	
115	4a	B	古墳	甕	脚台	外:明黄色に細粒10YR8/6. 内面:明黃 色に細粒10YR7/6. 器内:浅黄色に細粒 10YR8/6.	粗砂:黑色粒・石英・黑色 粒・白色粒. 細砂:黑色粒・透 明粒.	2	外:ナダ(一). 接合部で剥落.	
116	4a	B	古墳	高杯	脚部	外:に5Y-黄褐色に細粒10YR7/3. 内面: 器内:浅黄褐色に細粒10YR8/3.	粗砂:石英. 砂:角閃石・石 英・白色粒. 細砂:黑色粒.	3	外:ハケ(＼)→ミタキ(＼). 内 面:ナダ(＼).	

付図1 穂元団地L-6区(中央図書館増築地A・B地点)における発掘調査

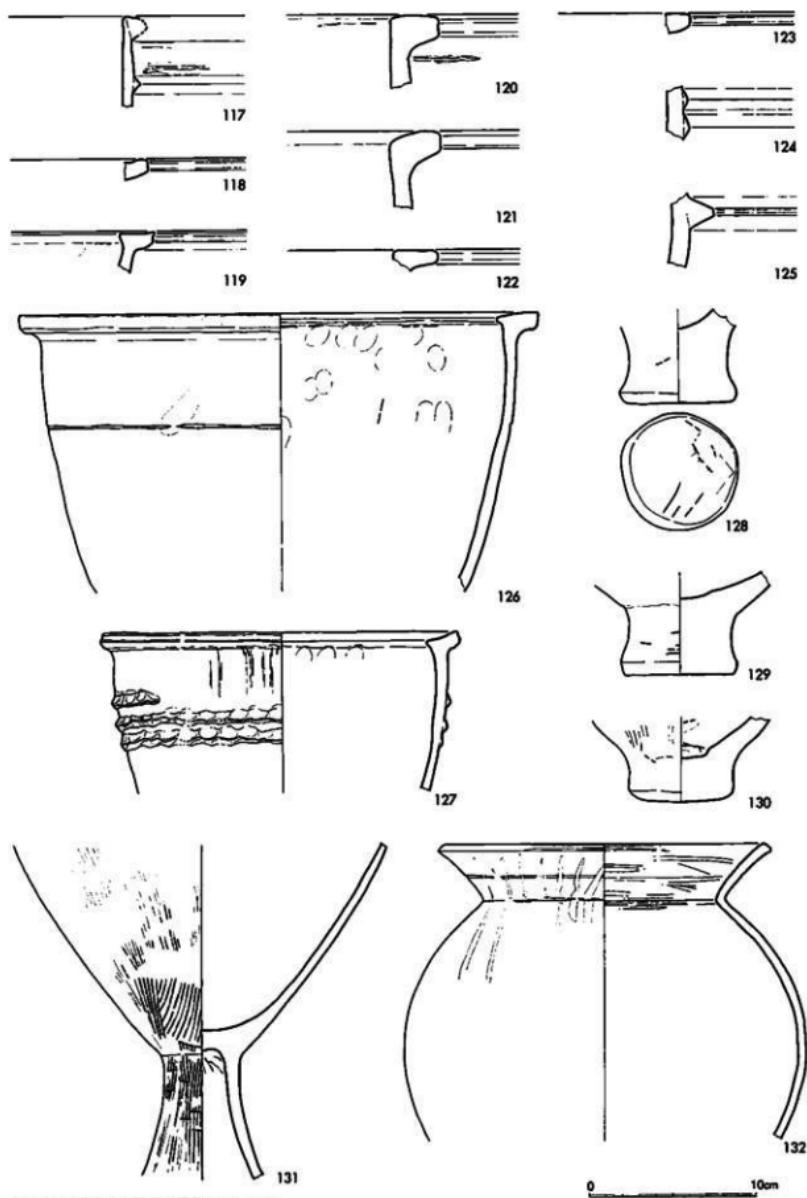


Fig.55 B地点4b層出土遺物(1)(S=1/3)



PL47 B 地点 4b 層遺物(1)

搬入品であると判断される。しかし、産地不明である。

古墳時代の在地土器である成川式土器は、甕、壺、鉢、高环、塙などがあり、甕は、大まかに、前半期と後半期の特徴を持つものとに分けられる。

すなわち、前半期：口唇部を平坦に面取りし、直状に開くもの、緩やかに開くもの(61・62・91・93・94・109・110・134・135)と、後半期：口唇部断面形状が、舌状に丸みを帯び、直状になるものや、やや内湾気味になるものなどである。これらは突帯や口縁部に指頭圧痕を明瞭に残し、粗雑な感を受けるものである(64・65・66・92・95・138・139・140)。しかし、箇貫式を中心とする成川式後半期の甕などは、個体差と捉えられる変異の幅が大きく、小破片でそれと確実に判断するのは難しい。

甕は、幅広突帯の大きさや施文などで分類される。突帯幅は、約1-5cm間であり、5cm幅の突帯はやや少なめである。突帯上の施文は、ヘラ状工具による斜位の沈線文(71-72・99・111)、ハの字の沈線文(100-101)などがあり、竹管工具による刺突文などは今回得られていない。

鉢は、認定できるものは少なく、時期の判断できないものである。高环もまた、時期の判断が難しい。鉢と高环の区別は、口縁部小破片の場合、困難な場合が多い。

塙も全形が窺える資料が少なく、口縁部資料もほとんどないが、(106)の底部資料などは、平底であることから、古墳時代後半期である可能性が高い。

また、時期不明の土器(152)も出土している。一応、口縁部として図化したもの、その確認がない。幅0.8cm

前後の半截竹管状工具か叉状工具で、2本を対にした沈線文を継位に施している。

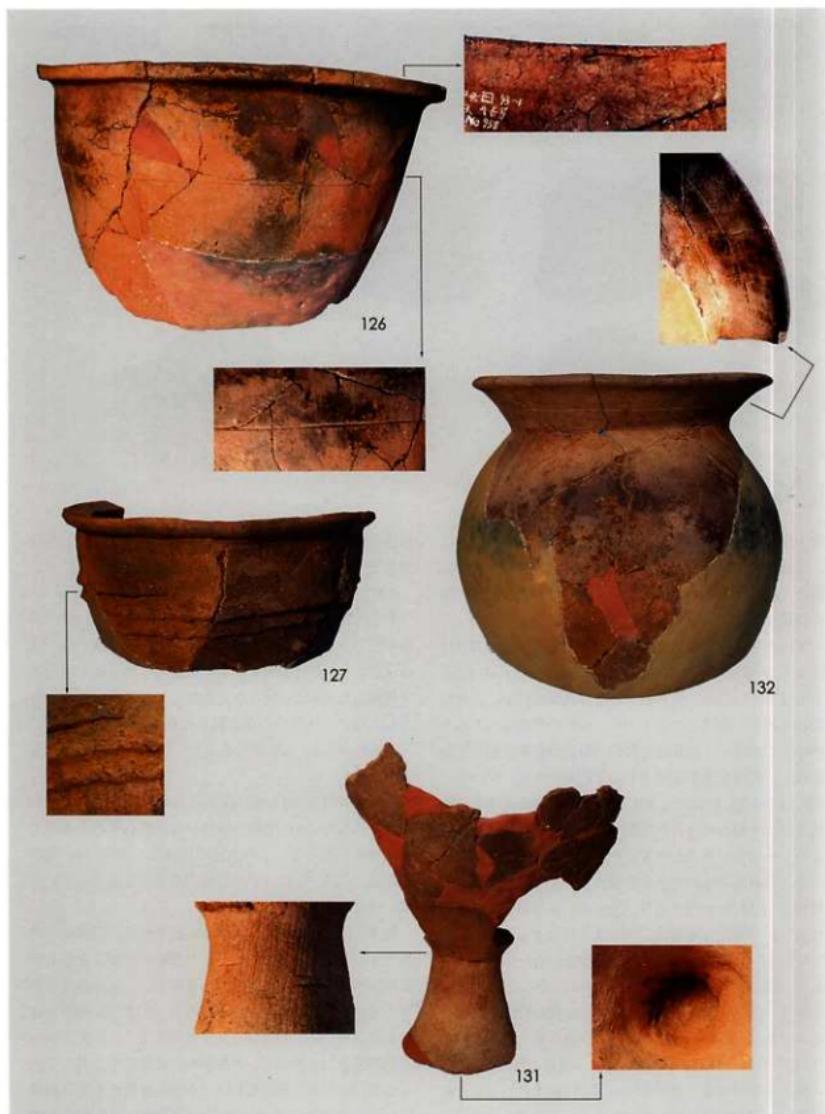
4層出土石器は、石包丁、石鎌と石材剥片がある。

石包丁(80)は、薄手・小型の直刃資料である。また、刃部が刃引きされ、刃緣は残っていない。薄手・小型であることから、かなり使い込まれたのち、砥ぎ直しの段階で破損したもののか、何らかの垂飾品に再利用したものかもしれない。片面から空け損じた孔も認められる。

石鎌(108)は、頁岩製であるが、B地点SK2出土のものと大差ない。

石材剥片(153)は、圓の下方にした部分に、剥離面が顕著であるものの、全体の形状から磨製石鎌の未製品である可能性もある。この赤色の頁岩は、1983年の理学部車庫の調査⁷⁾においても磨製石鎌として出土しているが、局所時期は断定できない。

鉄斧(107)は、袋状鉄斧の完形品である。現状から判断できる範囲で所見を記すと、刃部がやや幅広となる平面形かバチ形のもので、刃部の厚みが、0.5cm前後であろうと推定されるが、鋒彫れが著しく、表面の観察はほとんどできない。袋部は、完全に閉じず、1.3×2.0cm径の袋部をつくりだし、小さな木柄に装着するものであることが分かる。類似資料は、全国的に見ても早い時期には弥生時代後半ごろに出現し全国的に分布するものの、古墳時代の後期ごろには型式変化するようである⁸⁾。これから考えると、本遺跡の遺物量から推定される古地の中心時期とは異なることになる。



PL.48 B 地点4b層出土遺物(1)

Tab.25 B地点4b層出土遺物(1)

地層 地点	種別	器種	部位	色調	粘土		調整	備考
					混和材	砂粒の 多さ		
117 b 住生 瓢 口縁部 外面:にがい・黒10YR5/4、内面:裏面に 赤土色に帯び2.5YR5/4.				磚:石英・白色粒、細砂:石英、 黑雲母、砂:角閃石・黑雲母、 白色粒、細砂:黒雲母。	5	外面:ヨコナダ・ナダ(一)、内面:二角突起1条、 丁寧なナダ。		
118 b 住家式 瓢 口縁部 外面:にがい・黄褐色10YR5/4、裏面:にがい・黄 褐色に帯び10YR7/4.				磚:白色粒、細砂:白色粒、 砂:角閃石・石英・白色粒、細 砂:黑色粒・透明粒。	2	外面・口唇部:ヨコナダ、 口縁部上面が若干く ぼむ。		
119 b 住家式 瓢 口縁部 外面:褐色に帯び10YR7/4、内面:にがい・ 黄褐色に帯び10YR5/3、裏面:にがい・黄 褐色に帯び10YR7/4.				磚:石英・黑色粒・白色粒、 細砂:石英・黑色粒、 砂:赤色粒。	2	外面:ハケ(1)~ヨコナダ、内面: ヨビオサナ・ヨコナダ、口唇部:ヨコ ナダ。		
120 b 住家式 大甕 口縁部 外面:にがい・黄褐色に帯び10YR5/4、内面: 褐色に帯び2.5YR7/6、裏面:灰暗黃2.5Y 4/2.				磚:石英・黑色粒・白色粒・灰色 粒、細砂:石英・黑色粒・白色粒、 砂:黑色粒、細砂:黑色粒・白色粒、 砂:石英・黑色粒・白色粒、 細砂:黑色粒・白色粒、 砂:角閃石・石英・白色粒、 細砂:黑色粒・白色粒。	5	外面・口唇部:ヨコナダ、内面:ヨビ オサエ・ヨコナダ、 内面に若干粘土が 突出する。		
121 b 住生 大甕 口縁部 外面:2.5YR5/6、内面:にがい・黄褐色に 帯び2.5Y6/4、裏面:褐色に帯び2.5Y5/4、 裏面外:灰褐色に帯び2.5Y7/2.				磚:石英・黑色粒・白色粒・灰色 粒、細砂:石英・黑色粒・白色粒、 砂:石英・黑色粒・白色粒、 細砂:黑色粒・白色粒、 砂:角閃石・石英・白色粒・赤 色粒、砂:角閃石・石英、細砂: 白色粒。	5	外面・口唇部:ヨコナダ、内面:ヨビ オサエ・ヨコナダ。		
122 b 住生 瓢 口縁部 外面:にがい・褐色に帯び2.5YR6/4、裏面: 灰褐色10YR6/4.				磚:石英・黑色粒・白色粒、 細砂:石英・黑色粒、 砂:角閃石・石英、細砂: 白色粒、砂:角閃石・石英、 細砂:白色粒。	2	外面:ヨコナダ。		
123 b 住生 瓢 口縁部 外面:にがい・黄褐色に帯び10YR6/4、内面: 灰褐色、裏面:にがい・黄褐色に帯び2.5Y6/3.				磚:石英・黑色粒、細砂:石英、 白色粒、砂:角閃石・白色粒、 細砂:黑色粒・黑色粒。	4	外面・口唇部:ヨコナダ。		
124 b 住生 瓢 制部 外面:にがい・黄褐色に帯び10YR6/3、内面: にがい・黄褐色に帯び10YR6/3、裏面:灰分 付着のため不明。				磚:石英・黑色粒・灰褐色、細 砂:黑色粒・白色粒、砂:角 閃石・灰褐色・白色粒、細砂:黑 色粒、黑色粒。	4	外面:ヨコナダ、内面:ナダ(一), 二角突起2条。		
125 b 住生 大甕 制部 外面:にがい・黄褐色に帯び10YR6/4、内面: 褐色に帯び2.5YR7/6、裏面:灰褐色2.5Y7/ 2.				磚:石英・黑色粒、細砂:石英、 黑雲母・黑色粒・黑色粒、砂: 角閃石・黑色粒・白色粒、細 砂:黑色粒・白色粒。	5	外面:ヨコナダ、内面:ナダ(一), M字状突起1条。		
126 b 住生 瓢 口縁部~外面:にがい・赤褐色10YR6/4、内面:黄褐色 制部 にがい・褐色に帯び10YR6/4、裏面:にがい・黄褐色 7/3.				磚:褐色粒、細砂:石英・白色 粒、砂:角閃石・石英・白色粒、 細砂:黑色粒・白色粒。	3	外面:口唇部:ヨコナダ・ヨビオサ エ、制部:ハケ(1)・ヨビオサエ・ 内面:口唇部:ハケの打ち込み 痕・ヨコナダ・ヨビオサエ・制部 ハケ(1)・ヨビオサエ・ナダ。	外表面断面上方に各 の虎斑・スヌの付着、 口縁(31.4cm)。	
127 b の式 瓢 口縁部~外面:にがい・褐色に帯び2.5YR5/3、内面: 制部 にがい・褐色に帯び2.5YR6/4、裏面:浅 褐色7.5YR6/3.	(古)?			磚:白色粒、細砂:石英・白色 粒、砂:角閃石・石英、細砂: 黑色粒。	2	外面:ハケ(1)、内面:口縁部: ヨビオサエ・ヨコナダ、制部:ハ ケ(1)・ナダ。	端縫裂2~3条、 スヌの付着。	
128 b 住生 瓢 脚台 外面:にがい・黄褐色に帯び2.5Y6/3、内面:稍 灰褐色に帯び2.5Y5/2、裏面:灰褐色5Y6/6.				磚:白色粒、細砂:石英・白色 粒、砂:石英・白色粒、細砂: 黑色粒。	4	外面:ハケ(1)・ナダ、脚部 白化斑の付着範囲 が剥離し、底面:ハケ→ケズリ、 が認められる。	底径8.0cm。	
129 b 住生 瓢 脚台 外面:にがい・黄褐色に帯び10YR6/4、内面: にがい・黄褐色に帯び10YR6/3、裏面:にがい・ 黄褐色に帯び10YR5/4.				磚:黑色粒・白色粒、細砂:黑 色粒・白色粒、砂:黑雲母・白 色粒・白色粒、細砂:黑色粒・黑 色粒。	5	外面:ハケ(1)・ナダ、ハケの打 込み痕が立つ、 打ち込み痕、内面:ハケの打ち込み 痕・ナダ。	底径8.5cm。	
130 b 住生 瓢 脚部 外面:にがい・褐色に帯び2.5YR6/4、内面:に がい・黄褐色に帯び10YR7/7、裏面:にがい・ 黄褐色に帯び10YR7/1.				磚:褐色粒、細砂:石英・白色 粒、砂:角閃石・石英、細砂: 黑色粒。	4	外面:ハケ(1)・ナダ(1)・ハ ケ(1)・ナダ。	端縫裂(4.5cm), ミガキ、内面:ハケ(1)。	
131 b 中作式 台付脚 制部下平 外面:にがい・黄褐色10YR7/4、内面:灰暗黃 褐色に帯び10YR5/2、裏面:にがい・黄褐色10YR7/4.				磚:黑色粒、砂:石英・白色 粒・黑色粒、細砂:白色粒・ 黑色粒。	5	外面:ハケ(1)・ナダ、脚部内面: ハラ状工具によ る擦り・削り痕・ナダ。		
132 b 古式土瓶 瓶 口縁部~外面:にがい・黄褐色10YR7/4、内面:にがい・ 黄褐色に帯び10YR7/3、裏面:灰暗黃10YR5/3.	器系			砂:角閃石・石英、細砂:黑色 粒・透明粒。	2	外面:ミガキ(1)・口唇部:ヨコナダ、 ミガキ(1)・口唇部:ヨコナダ。		

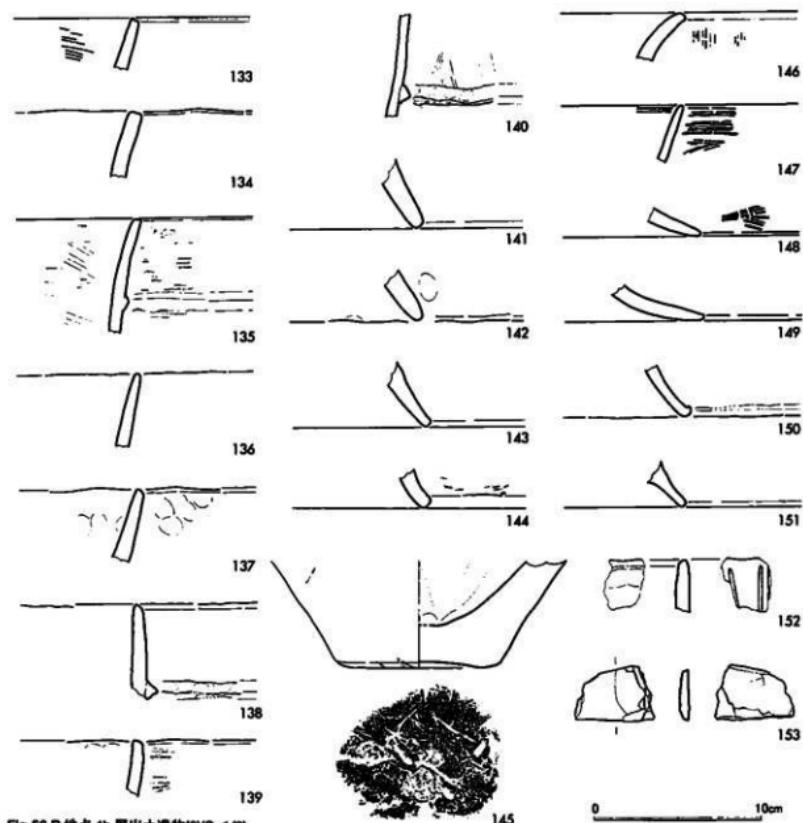
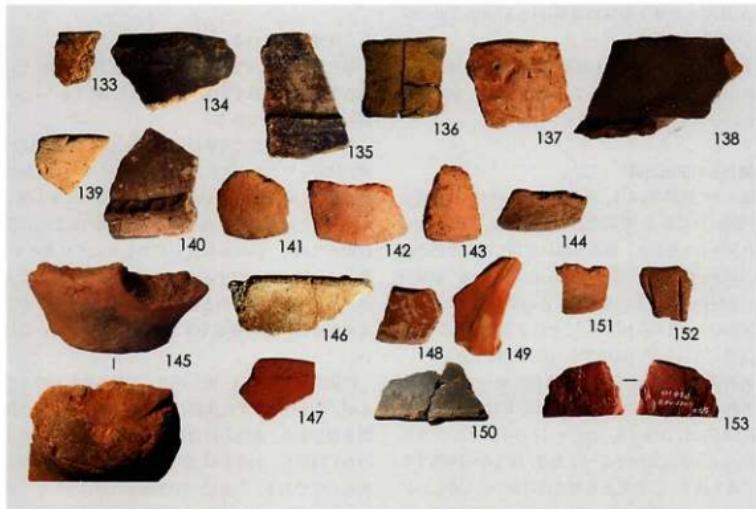


Fig.56 B地点4b層出土遺物(2)(S=1/3)

Tab.26 B地点4b層出土遺物(2)

No.	属別	器種	部位	色調	出土		調査	備考
					産地	砂粒の 多さ		
133 B	斧	奥	1柱部 内・外面、裏面:に赤・黄緑に褐色10YR7/4	砂:角閃石・石英、砂:角閃 石、繊維:透明粒	3	外面:ナデ(内面:ハケ(一)ナデ、 ロコナデ)	〔角閃石1条、スヌ 付見。〕	
134 B	古墳	奥	1柱部 外面:暗赤2.5YR4.2、内面:灰黃に褐色 2.5YR7.2、裏面:灰白2.5YR2.	砂:角閃石・石英、繊維:半 透明粒	2	外面:ナデ(一)(内面:ナデ (一))	〔角閃石1条、スヌ 付見。〕	
135 B	古墳	奥	1柱部 外面:に赤・黄緑10YR6/4、内面:に赤・ 褐色に褐色2.5YR7/4、裏面:に赤・黄緑 10YR7/4	砂:角閃石・石英、繊維:角閃 石・黑色粒	3	外面:ロコナデ(一)(一)(一)、〔角閃石1条、スヌ 付見。内面:ハケ(一)→ロコナデ。	〔角閃石1条、スヌ 付見。〕	
136 B	古墳	奥	1柱部 裂分材のため不明。	砂:角閃石・石英・黑色粒、 砂:黑色粒、繊維:黑色粒・ 透明粒。	3	外面:ナデ、内面:ナデ。	〔角閃石1条、スヌ 付見。〕	
137 B	古墳	奥	1柱部 内・外面:浅黄褐色10YR8/4に赤く斜め小字? (外面:10YR6/6、内面:明赤褐色10YR6/6、 裏面:浅黄褐色10YR8/4、	砂:白色粒、繊維:角閃石・ 白色粒、繊維:黑色粒・ 透明粒。	3	外面:ロコナデ(一)、内面: ロコナデ	〔角閃石1条、スヌ 付見。〕	
138 B	古墳	奥	1柱部 外面:表面サビの跡5/2、内面:灰リーフ 5YR2.2、裏面:灰白2.5YR7/4。	砂:角閃石・黑色粒・白色粒、 砂:石英、繊維:透明粒	2	外面:ハケ(一)→ナデ、内面:ナデ、 〔角閃石1条、スヌ付見。〕	〔角閃石1条、スヌ付見。〕	
139 B	古墳	鉢小甌	1柱部 外面:灰に褐色10YR7/7、内面:淡黄褐色 10YR7/4、裏面:灰白2.5YR7/4。	砂:角閃石・黑色粒・白色粒、 砂:石英・黑色粒・白色粒、 砂:角閃石・黑色粒・透明 粒。	2	外面:ナデ(一)→ナデ、内面:ナデ。	〔角閃石1条、スヌ付見。〕	
140 B	古墳	奥	1柱部 外面:灰に褐色10YR7/4、内面:に赤・黄緑 に褐色10YR7/4、裏面:灰白2.5YR7/4。	砂:角閃石・黑色粒・白色粒、 砂:石英・黑色粒・透明 粒。	4	外面:ハケ(一)→ナデ、内面:ハケ (一)→ナデ。	〔角閃石1条、スヌ付見。〕	



PL.49 B地点4b層出土遺物(2)

Tab.27 B地点4b層出土遺物(2)

No.	層	地点	種別	器種	部位	色調	胎土		調整	備考
							混和材	砂粒の 多さ		
141	4b	古墳	甕	脚台	外面: 深紅10YR7/4、内面: 深紅10YR7/4。器内: 深黃褐色10YR8/4。	褐・灰色。粗砂: 角閃石・石英・白色粒。	4	外面: 摩滅による不明、内面: ハケ(-)・ナダ。		
B						黄褐色に類似10YR7/4。器内: 浅黃褐色10YR8/4。	白砂粒・角閃石・石英。			
142	4b	古墳	甕	脚台	外面: 深紅2.5YR7/2、内面: 深紅10YR7/4。器内: 深黃褐色10YR7/6。	粗砂: 角閃石・石英・白色粒。	4	内・外表面: ナダ(-)。		
B						灰白色・角閃石・石英。				
143	4b	古墳	甕	脚台	外面: 深紅2.5YR7/2。内面: 明黄褐色に類似10YR7/4。器内: 深黃褐色10YR8/3。	粗砂: 角閃石・石英・白色粒。	4	外表面: ヨコナダ、内面: ナダ(-)。		
B						灰白色・角閃石・石英。				
144	4b	古墳	甕	脚台	内・外表面: 深紅10YR7/4。器内: 深紅10YR8/2。	粗砂: 角閃石・石英・白色粒。	3	外表面: ハケ(-)→ナダ。内面: ナダ。		
B						黑色。				
145	4b	古墳	甕	底部	外面: 明赤褐色2.5YR5/6。内面: 深紅7.5YR6/6。器内: 明赤褐色2.5YR5/6。	褐・灰色。粗砂: 角閃石・石英・白色粒。	3	外表面: 梯状工具による調整(-)→ナダ(-)。内面: ナダ。		
B						角閃石・石英・白色粒。				
146	4b	古墳	甕	口様部	外面: 深黃褐色に類似10YR8/4。内面: 器内: 深紅10YR7/4。器内: 深紅10YR7/2。	粗砂: 角閃石・石英・白色粒。	4	外表面: ハケ(-)→ナダ。内面: ナダ。		
B						白砂粒・角閃石・石英・赤色粒。				
147	4b	古墳	高杯?	口様部	外面: 明赤褐色2.5YR5/6。内面: 明赤褐色2.5YR5/3。	粗砂: 黑色粒・透明粒。	1	外表面: ナダ(-)→ナダ。内面: ナダ(-)→(-)。	内・外表面: 赤色顔料塗布。	
B					器内: 深黃褐色10YR7/3。					
148	4b	古墳	高杯	脚台	外面: 深紅2.5YR7/4。内面: 深黃褐色に類似10YR8/3。	粗砂: 黑色粒・白色粒。砂: 黑色粒・赤色粒。	2	外表面: ハケ(-)→ナダ(-)。	内面: 赤色顔料塗布。	
B					器内: 深黃褐色に類似10YR8/4。	透明粒。			内面に指紋状に顔料がつく。	
149	4b	古墳	高杯	脚台	外面: 深紅2.5YR7/6。内面: 深黃褐色に類似10YR8/3。	粗砂: 黑色粒・透明粒。	1	外表面: ハケ(-)。	外表面: 赤色顔料塗布。	
B					器内: 深紅2.5YR7/3。					
150	4b	古墳	脚台	外表面: 深紅2.5YR7/6。内面: 深紅2.5YR7/4。	粗砂: 白砂粒・角閃石・石英・白色粒。	2	外表面: 鉄分付着のため不明、接地面外側に盛り上がり、内面: ヨコナダ。	外表面: 赤色顔料塗布。		
B					器内: 深紅2.5YR7/4。					
151	4b	古墳	脚台	外表面: 深紅2.5YR7/6。内面: 深紅2.5YR7/4。	粗砂: 角閃石・石英・白色粒。	2	内・外表面: ヨコナダ。	外表面: 赤色顔料塗布。		
B					器内: 深紅2.5YR7/4。					
152	4b	?	口様部	外表面: 深紅2.5YR7/6。内面: 深紅2.5YR7/2。	粗砂: 石英・赤色粒。粗砂: 石英・白色粒。	5	内・外表面: ナダ。	外表面: 褐沈錆。2条に対?		
B					砂: 角閃石・白色粒。					

Tab.28 B地点4b層出土土石器

No.	層	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
153	4b	素赤色石	3.3	4.8	0.6	10.55	鉋片

5-7.A・B地点5層上面検出遺構(Fig.57-68, Tab.29-35, PL.50-82)

A・B地点における5層上面検出遺構は、住居跡I基(SK4)、土坑4基(A地点SK5-7、B地点SK11)、溝状遺構3基(B地点SD5-7)、多數のピット群がある。

住居跡(SK4)(Fig.58)

A地点の住居跡SK4は、平面全体の形状が、突出部のある円形住居である。住居全体の推定径は、約5.5-6m、深さ0.5-1.0mを計る。南東方向に突出した掘り込みがあり、深さが約0.4-0.45m程度ある。いわゆる「柄型住居」と呼称されるものである。この突出部は、一般的に、住居入口と考えられており、それを評価するならば、南東方向に入口を持つ住居であった可能性がある。

豊穴内部のピットの分布は、西側に偏っており、小ピット群の深さは、P-aが5-12.2cm、bが2.2-7.3cm、c:7.7-12.7cm、d:3.6-6.3cm、e:11.8-15.1cm、f:8.9-17.3cm、g:6-10.3cmとなっており、深さから判断すると、どれも浅く、主柱である可能性は低い。しかし、いわゆるベッド状遺構上にあるピット(P-a:22-35cm・β:8.9-29cm)がやや深く、ピット底面の平面形状から、数度の建直しをあらわす主柱の可能性がある。これは、住居全形が不明であるので確言できないものの、対照的に北側未調査部分にも存在する可能性があり、その場合、計4本の主柱となる。支柱は判然としないが、豊穴外検出ピットのうち、PA112-113などは、25cm前後で比較的深く(Tab.34)、配置からは、入口の庇を支える柱穴と考える。その場合、PA115と対になっている可能性がある。

住居内中央部には、屋内地床炉らしきものがあり、炭が分布している。この炉は、住居が廃棄されるまでに、少なくとも3度のつくり直しを行っていると考えられ、厚さ1-2cm程度の3枚の炭屑が確認できる。炭の分布は、北壁に向かって薄くなり、抵張部(第2次調査)の北壁には炭1はほとんど確認されない。

また、床面の土器片などは、その特徴から、古墳時代後半期の壺と考えられる(165)。この住居跡の帰属時期が大雑把には推定できる。炭を基準に床のつくり直しを見ると、炭2(床2)の段階に、中央炉付近に、赤色顔料の薄い分布も確認されている。これは分析の結果、ベンガラであることが分かった(Fig.59, PL.55)。ベンガラは、南部九州の古墳時代後半期の高杯や壺に多用されており、住居内で塗布作業を行っていた可能性もある。

豊穴は、最初、中央部付近を最も凹面状に深く掘り下げ、幅員幅を残したまま凹に粗く掘り込む。その上に、10-25cm程度の厚さに土を充填してフラットに

し、床面としている。

豊穴外壁に沿って、いわゆる「ベッド状遺構」といわれる段が形成されている。その段は、幅0.5-1.0m、高さ約20cm前後である。

そのほかに、豊穴内壁の段階部分と貼り床側部に「壁溝」が巡っており、内壁に板壁などをたてて、住居内を保護していたと推定される。これは、地山に深く掘り込んだものだけが認定されているので、検出面からの深さは極めて浅く、1-4cm程度が残存しているに過ぎない。段上の住居土壁に接するものは、住居内部への雨などの侵入から防護するものとして考えられるが、段下の貼り床の板壁は、何の機能を果たしていたのか定かではない。

住居内出土遺物は、弥生時代-古墳時代のものまであるが、先述したように床面にあるものは、古墳時代後半期土器である。遺物の接合状況からは、豊穴内部の埋土のみで接合し、わずかに4b層遺物との接合関係がみられる程度である。これは、住居廃棄の際に、一気に埋め戻された結果ではないかと考える。

SK5-6(土坑)

SK5-6は、検出面で観察すると、平面形は不整形であり、底面は凹凸が著しく、掘り具痕を示していると考えられる。深さ10-20cm前後でかなり浅い。このSK5-6は、それ自体が独立して機能していたとは考えにくく、住居跡とは切り合っていない状況から推して、住居豊穴の存在を意識してつくられたものであろうと考えられる。また、住居の入口付近の東西側に存在し、住居跡を全周するわけではない。

上層構造を考えれば、SK4の住居掘り込みの突出部分(入口)を想い認するような屋根の存在でなければならぬから、SK5-6は、屋根に隠れている部分になる。また、屋根との接地部分は、空間として広い場所ではなく、日常的に使用する空間ではないと考えられる。

SK4における壁溝の存在や、SK5-6が屋根に隠れている可能性、そして遺物の接合状況などから、検出はされていないものの、周堤の存在を想定したい。周堤は直線的に考えれば、豊穴掘削段階において多量にでる魔土そのものでつくられ、豊穴を外周するものと考えられるが、SK5-6は土堤製作の際にわずかに足りない土を追加するために掘られた穴か、あるいは、住居廃棄の埋め戻す際、周堤だけでは足りない土を掘った結果ではないだろうか。仮に土壠が想定できるならば、入口のピット(PA111-115)の存在から、周堤は入口を開いた馬蹄形のものであると考えられる。

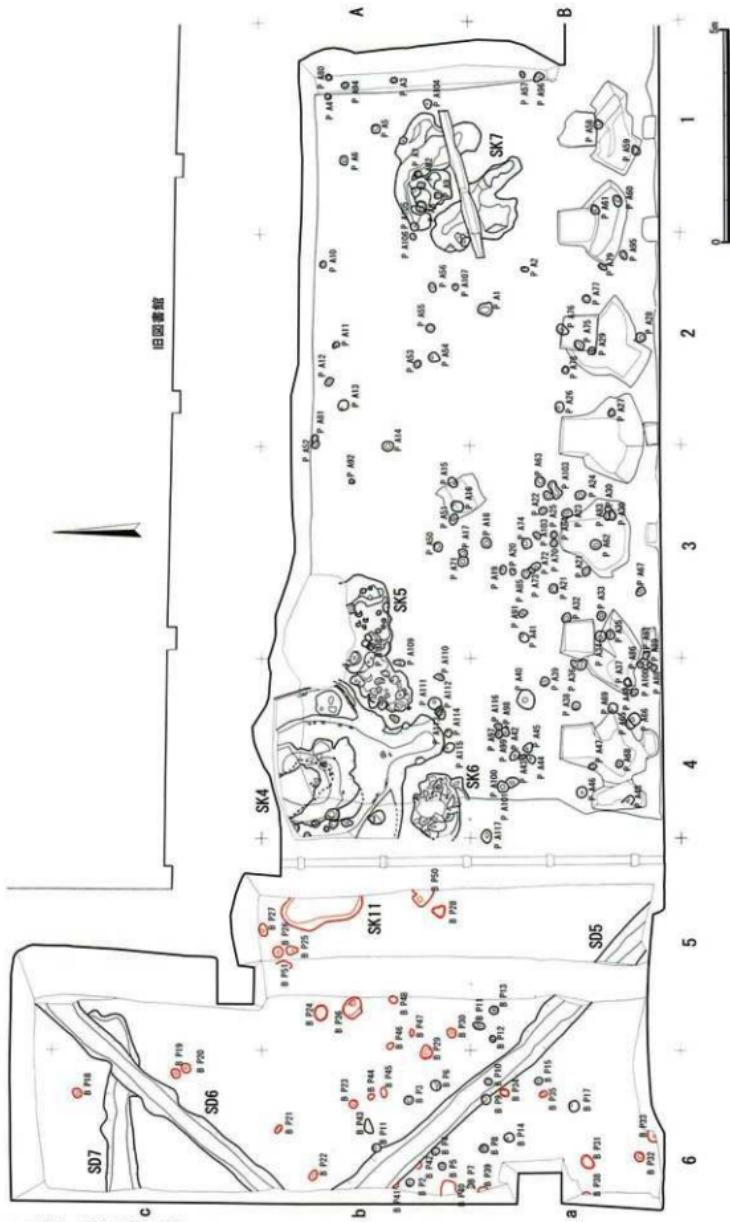


Fig.57 A・B地点 5層上面検出遺構(S=1/120)

付録1 郡元団地L-6区(中央図書館増築地 A・B地点)における発掘調査

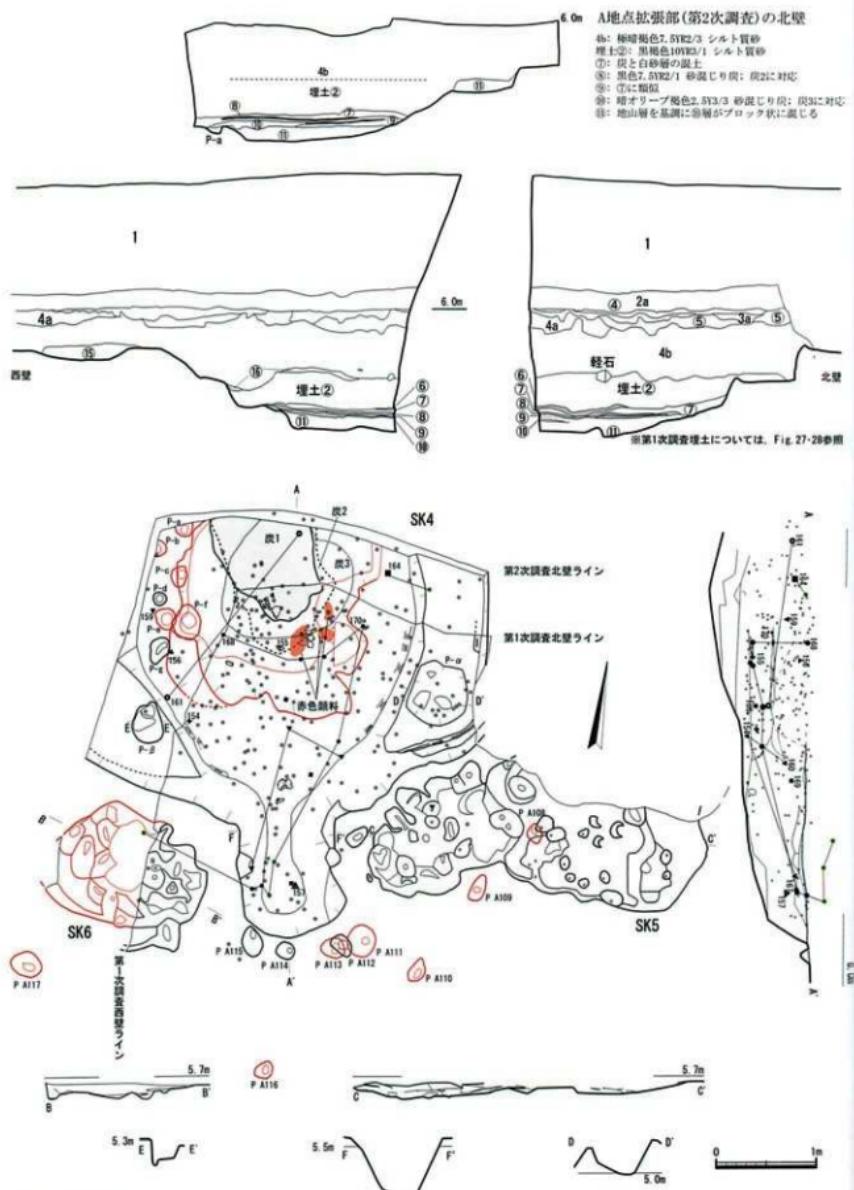


Fig.58 A地点 SK4-6(S=1/50)

遺構: 黒色ラインは5層上面突出、赤色ラインは住居の掘り込みラインと、より下位のレベルより検出されたもの。

遺物: ■: 古墳時代在地系土器、△: 古墳時代外来系土器、□: 弥生時代在地系土器、▽: 弥生時代外来系土器、●: 弥生時代か古墳時代土器、★: その他の無文部器など、+: 石器



PL.50 A 地点 SK4-5-6 検出状況(第1次調査)

PL.51 A 地点 SK4-5-6 掘り下げ状況(第1次調査)



PL.52 A 地点 SK4 床面 2 検出状況(第1次調査)

PL.53 A 地点 SK4 床面 2 検出状況(第1次調査)



PL.54 A 地点 SK4 床面 2 赤色顔料検出(第1次
調査)

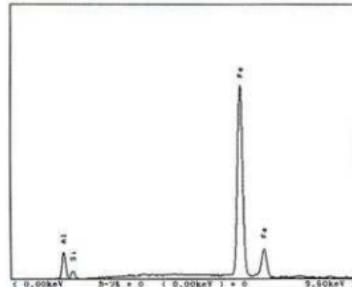


Fig.59 赤色顔料X線分析スペクトル
(鹿児島県立埋蔵文化財センター提供)

JEOL JED-2001

試料名: KADAI MAIBUN 2220

経過時間: 121.34 秒

有効時間: 100.00 秒

測定日: 94年10月22日

測定時刻: 12時03分06秒

フルスケール: 8K



PL.55 赤色顔料電子顕微鏡写真 (鹿児島県立埋蔵文化財センター提供)
この赤色顔料は、酸化第二鉄(Fe_2O_3)のいわゆる「ベンガラ」である。鉄細菌由来のパイプ状粒子構造が見られる。



PL.56 A地点 SK4 床面検出壁溝(第1次調査)



PL.57 A地点 SK4 床面遺物出土状況(第1次調査)



PL.58 SK4 北壁観察による炉のつくり直し(第1次調査)

当時の炉の大きさは現状では判然としないため、炭の分布範囲から、中心部などを推定するほかない。SK4では最も炭の厚い部分を炉の中心と捉えている。また、SK4には、鹿児島大学構内遺跡都元団地の古墳時代後半期に顕著な埋設土器が残されていない。あるいは元来なかったのかもしれない。



PL.59 A地点 SK4 炉完掘(第1次調査)



PL.60 A地点 SK4 挖床検出時の工具痕(第1次調査)



PL.61 A地点 SK4 完掘(第1次調査)



PL.62 A地点 SK4 完掘(第1次調査)



PL.63 A 地点 SK4 拡張部(第2次調査)



PL.64 A 地点 SK4 拡張部床面検出(第2次調査)



PL.65 A 地点 SK4 拡張部完掘(第2次調査)



PL.66 A 地点 SK4 西壁(第2次調査)

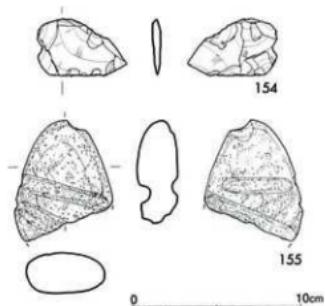
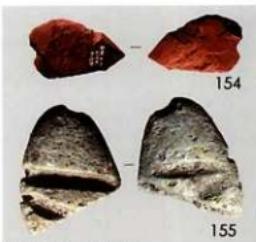


Fig.60 SK4 出土石器(S=1/3)



PL.67 A 地点 SK4 北壁(第2次調査)



Tab.29 SK4 出土石器観察

No.	肩	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
154 SK4-I期(1.2)	黄金色白岩	5.6	3.4	0.6	16.87		頂下面に剥離が認められる。

Tab.30 SK4 出土石製品観察

No.	肩	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
155 92-4 SK4	7.1	5.8	2.4	16.38		椎円形、下半部欠損。表・裏面に2名の凹部を有する。

PL.68 SK4 出土石器

付図1 都元団地L-6区(中央図書館増築地A・B地点)における発掘調査

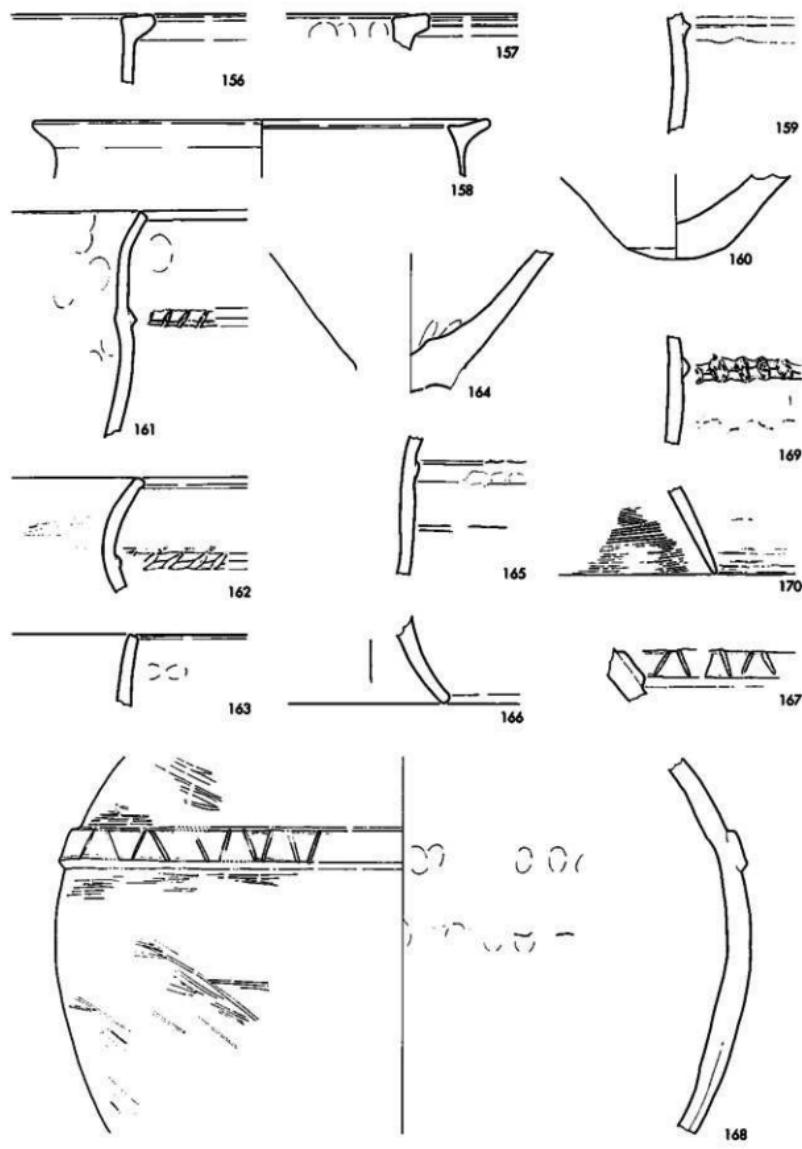
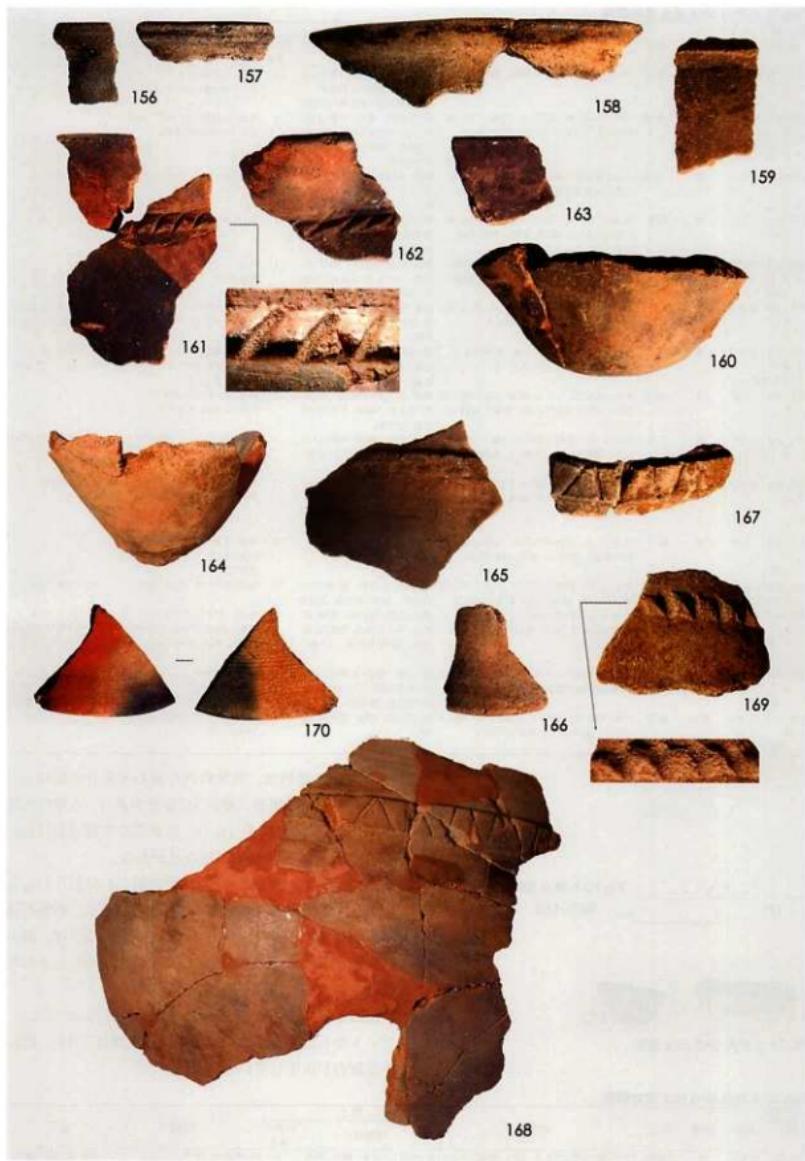


Fig.61 A地点 SK4 出土遺物(S=1/3)

0 10cm



PL.69 A地点 SK4 出土遺物

Tab.31 A地点 SK4 出土遺物観察

No.	地點	種別	器種	部位	色調	胎土	砂粒の 混和材	砂粒の 多さ	調整	備考
156	SK4 入り口式 A	甕	口縁部	内・外面・器内:	に赤い黄褐色に類似10YR5/3、穂:黒電目・赤色粒、細砂:黒電目、砂:黒電目・黑色粒	3	外面:口唇部:ヨコナダ、内面: ヨコナダ→浅いユビオサエ。			
157	SK4 入り口式 (埋土1)	甕	口縁部	外面:に赤い褐7.5YR5/3、内面:に赤い褐 SYR6/4、器内:に赤い褐7.5YR7/4、	穂:黒電目・黑色粒・白色粒、砂:角閃石・石英・黒電目・白色粒、細砂:黑色粒・白色粒・透明白色	4	外面:口唇部:ヨコナダ、内面: ユビオサエ・ヨコナダ。			
158	SK4 黒髪式 A	甕	口縁部	外面:浅黄褐色に類似10YR8/3、内面:に赤い黄褐色に類似10YR7/4、器内:BSY5/4、	穂:赤色粒、角閃石・石英、砂:角閃石・石英・黄褐色、細砂:黑色粒・白色粒	4	外面:ヨコナダ、内面:ユビオサエ、スレスの付着。 ヨコナダ。			
159	SK4 弥生 A	甕	胴部	外面:に赤い褐に類似7.5YR8/4、内面:に赤い黄褐色に類似10YR6/3、器内:黄褐色に類似10YR 6/6	穂:赤色粒、粗砂:石英、砂:角閃石・石英・黄褐色・白色粒、細砂:黑色粒・白色粒	2	内・外面:ナダ(一)、 三角突帯1条、スレスの付着。			
160	SK4 中津野式 (埋土1・2)	甕	底部	外面:に赤い黄褐色に類似10YR6/3、内面: 摩擦のため不明、器内:に赤い褐に類似 7.5YR7/4、	穂:黒電目・赤色粒、細砂:白色粒、砂:石英・白色粒・透明粒、細砂:黑色粒・赤色粒、砂:石英・黑色粒、細砂:黑色粒・透明白色	4	外面:ハケ(深か)、内・外面とも 摩擦の有無。			
161	SK4 東原式 A	甕	胴部	外面:に赤い褐に類似7.5YR6/4、内面: SYR6/6、器内:に赤い褐類似SYR6/6、	穂:赤色粒・赤色粒、砂:石英・黑色粒、細砂:黑色粒・透明白色	2	外面:ヨコナダ・ナダ、内面:ヨコナダ・ナダ(一)、 三角突帯1条、H(一)/ 中に布庄塗、スレスの付着。			
162	SK4 東原式 (埋土2)	甕	口縁部	外面:明赤褐色YSR5/6、内面:褐10YR4/4、 器内:に赤い褐7.5YR5/4、	穂:黑色粒、粗砂:角閃石・白色粒・黑色粒・赤色粒、細砂:赤色粒・黑色粒・石英・白色粒	3	外面:口唇部:ヨコナダ、内面:ハ ケ(一)→ヨコナダ			
163	SK4 古墳 A	甕	口縁部	外面:暗赤黄2.5Y4/2、内面:に赤い褐に類似 7.5YR7/4、器内:に赤い黄褐色に類似10Y R7/4、	穂:角閃石・赤色粒、砂:石英・黑色粒、細砂:赤色粒・黑色粒・透明白色	3	外面:ヨコナダ・ユビオサエ、 内面:口唇部:ヨコナダ。			
164	SK4 古墳 A	甕	底部	外面:に赤い黄褐色に類似10YR7/4、内面: に赤い褐類似10YR6/3、器内:褐7.5 YR7/4、	穂:白色粒、粗砂:角閃石・石英・黑色粒、細砂:白色粒・透明白色	3	内・外面:ハケ(丁寧なナダ(一))、接合部で脚台が欠落、 内面底部にユビオサエ。			
165	SK4 東原式 A	甕	胴部	外面:に赤い褐7.5YR5/3、内面: に赤い黄褐色に類似7.5YR7/3、器内:に赤い黄褐色 10YR7/4、	穂:赤色粒・赤色粒、細砂:石英・黑色粒・白色粒・透明白色、砂:石英・黑色粒・赤色粒	2	外面:ナダ(一)、内面:ナダ、内・外 面:ハケの打ち込み痕あり。			
166	SK4 古墳 (埋土2)	甕	脚台	外面:に赤い黄褐色10YR7/4、内面:に赤い 褐色に類似7.5YR7/4、器内:浅黄褐色10Y R8/3、	穂:角閃石・黑色粒・黑色粒、砂:角 閃石・白色粒、細砂:角閃石・黑色粒	2	外面:丁寧なナダ(一)→ヨコナダ、 内面:ヨコナダ、ハケの打ち込み 痕あり。			
167	SK4 古墳 A (埋土1)	甕	肩部	外面:に赤い黄褐色に類似10YR7/3、器内: に赤い黄褐色に類似10YR6/3、	穂:白色粒・細砂:角閃石・透明白色、 砂:白色粒・黑色粒・透明白色	3	外面:ヨコナダ、内面:剥落、 幅広突帯、沈線(△)。			
168	SK4 筒貫式 A	甕	胴部	外面:に赤い黄褐色10YR5/3、内面: に赤い黄褐色10YR6/3、内面:灰白10YR8/2/に赤 い褐10YR7/4、器内:	穂:灰色粒・赤色粒、細砂:石英・黑色粒・白色粒、砂:石英・黑色粒・白色粒	2	外面:ヨコナダ(一)・ヨコナダ、スレス 付着、内面:ハケ(一)・ナダ(一) ・ユビオサエ、ハケの打ち込み痕 あり。		幅広突帯、沈線(△)、 瓶底最大径(42.0cm)。	
169	SK4 古墳 (埋土1)	甕	胴部	外面:浅黄褐色10YR8/4、内面:灰赤2.5Y6/2、 器内:浅黄褐色に類似10YR8/3、	穂:石英、粗砂:角閃石・石英、砂:角 閃石・石英・白色粒、細砂:黑色粒・透明白色	2	外面:ヨコナダ(一)(一)、内面: ナダ(一)(一)、		三角突帯1条、H(一)、 中に布庄塗、則日は 上2方向ならぬ。	
170	SK4 弥生か (埋土2)	高杯	脚台	外面:明赤褐色YSR5/6、内面:に赤い褐 7.5YR5/4、器内:に赤い黄褐色10YR8/3、	穂:白色粒、細砂:黑色粒・透 明白色	1	外面:ヨコナダ、内面:ハケ(一) →ヨコナダ。			



171

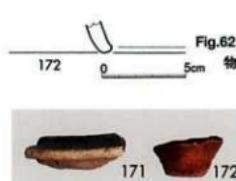


Fig.62 A地点 SK5 出土遺物(S=1/3)

172

0

5cm

PL.70 A地点 SK5 出土遺物

Tab.32 A地点 SK5 出土遺物観察

No.	地點	種別	器種	部位	色調	胎土	砂粒の 混和材	砂粒の 多さ	調整	備考
171	SK5 黒髪式 A	甕	口縁部	内・外面:淡黄2.5Y8/3、器内:黄褐色2.5Y4/1、砂:角閃石・石英、細砂:黑色 砂:赤色粒	4	内・外面:ヨコナダ、 砂:赤色粒				外面:赤色顔料微細。
172	SK5 弥生か 古墳	甕	脚台	外面:褐7.5YR6/6、内面:器内:に赤い 黄褐色10YR5/4、	穂:石英・白色粒、砂:角閃石・石英・黑色粒	2	外面:ハケ(一)、端部はヨコナダ、 内面:ハケ(一)→ヨコナダ。			

SK4 内の遺物は、弥生時代中期の入り口式甕(156・157)、中九州系黒髪式甕(158)などがあり、古墳時代前半期の東原式甕(161・162)、後半期の箇貫式甕(163・165)、箇貫式甕(167・168)などがある。

また、石器としては、赤色の頁岩製の石材片があるが¹、これは4b層出土類似資料(153)と同様に、磨製石器の未製品である可能性がある。軽石製品(155)は、両面に幅1cm前後、深さ約0.4-0.6cmの溝が掘り込まれたものであるが、用途不明である。

SK5からは、黒髪式(171)と中空脚台(172)が出土し、ピットからは、古墳時代後半期箇貫式甕(173)や、甕の中空脚台が出土している(174)。

土坑(SK7)

SK7は、平面形が馬蹄形状の凹地で、埋土が円形に巡っている。検出面からの深さは、10-30cmで比較的浅い。埋土は、中央部から外周部とていうように、変化しております。外周部に向かって下層になる。しかし、中央部にも地山の黄色砂層が上がり、土層の逆転現象がみられる。このような形状と埋土の土坑は、風倒木の可能性が考えられる。風倒木の場合、倒木の根側が、土層が大きく逆転していることが考えられるから、倒木方向は、南東方向であることが推定できる。

遺物の出土は、ほとんどない。

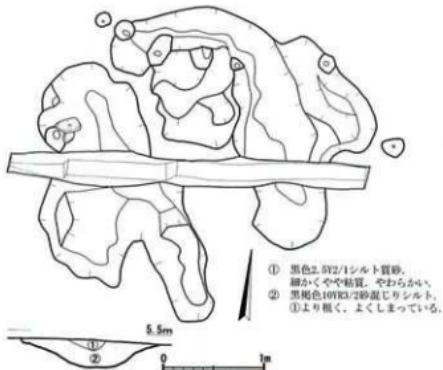


Fig.63 A地点 SK7(S=1/50)

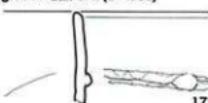
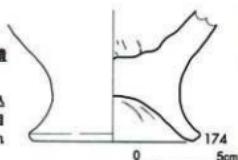


Fig.64 A地点ピット18出土 173 土遺物(S=1/3)



PL.74 A地点ピット18出土遺物 173

Fig.65 A地点ピット68出土遺物(S=1/3)
内底面に打ち込み度とよぶ刷毛目
の始点が観察される。



PL.75 A地点ピット68出土遺物 174

Tab.33 A地点ピット出土遺物観察

No.	層	地点	種別	器種	部位	色調	粘土		調整	備考
							混和材	砂粒の多さ		
173	Pt.18	貴賤式	甕	口縁部	内・外面: 洗黄褐色10YR8/3. 肉面: 灰白10YR7/1.	粗砂・角閃石・砂・角閃石・石英・繊維・黑色粒・透明粒。	4	内・外表面: ナデ(-),	繊維突出1条。	
174	Pt.68	古墳	甕	脚台	外表面・内面: 深7.5V9R6/6. 肉面: 洗黄褐色10YR8/3.	粗砂・砂・角閃石・石英・白色粒	4	外表面: 工具によるナデ(-), 内面: 底径(9.6cm), ハケハケの打ち込み痕あり。		



PL.71 SK7断面



PL.72 A地点 SK7検出(一部既掘)



PL.73 A地点 SK7 完掘



B地点には、3条の溝状遺構(SK5-7)と土坑1基(SK11)、そして、多数のピット群が確認できる。

溝状遺構(SK5-7)

溝状遺構は全て直線的に伸びている。SD5は、北西・南東方向で、検出された長さは約8.5m、検出面からの深さ20-25cmである。SD6は、北東・南西方向で、長さ約6.7m、深さ20-25cm、SD7は、東西方向で、長さ約4.2m・深さ10-20cmで、SD6に切られる関係にある。

これらの溝の断面形状はU字形であり、共通している。また、検出幅も50-80cm間にあって類似しており、ある程度の同時性を推し量ることができる。埋土は単純であり、埋土の上部は4b層、下部は、地山5層の黄色粗砂層と4b層土の混土である。3条ともに特に著しい傾斜もなく、水流の痕跡も認められない。SD6からは(Fig.68)、古墳時代前半期の特徴をもつ甕口線部(175)と、古墳時代後半期の高环(177)、古墳時代の壺が出土しており(176)、帰属時期は判然としない。溝内遺物はほとんどが小破片のみであり、遺物が意図的に廃棄されているような様子も認められない。

これらの特徴から、この3条の溝状遺構は、何らかの区画溝であると考える。しかし、住居などを囲うなどといった状況も判断できず、ピット群との有機的関係性も分からぬ。

土坑(SK11)

検出面から判断して、推定径約0.9-2.0cmの長楕円形状を呈した土坑である。性格は不明であるが、A・B地点全体の遺構配置状況(Fig.57)からみると、A地点住居跡(SK4)に伴う

と考えられるSK5-6の配置と、住居跡に近いという関連性があるようにも見受けられる。埋土は、4b層土に類似しており、黒褐色5YR2/2のシルト質砂である。

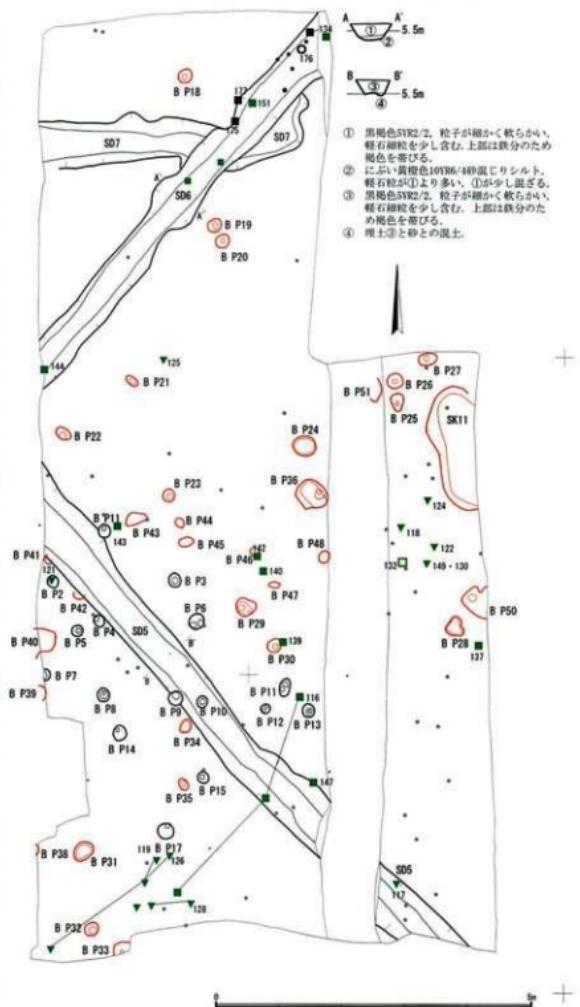


Fig.66 B地点遺構配置図(S=1/80)
 遺構: 黒色ラインは5層上面検出、赤色ラインはより下位のレベルより検出されたもの。
 遺物: 黒; 遺構出土、赤; 2-3層出土、緑; 4-5層出土。
 ■; 古墳時代在地系土器、□; 古墳時代外来系、▼; 満生時代在地系、△; 満生時代外來系、●; 満生時代古墳時代土器、■; その他の無文調部など、+; 石器



PL.76 B 地点 SD5 検出



PL.77 B 地点 SD5 断面



PL.78 B 地点 SD5 完掘

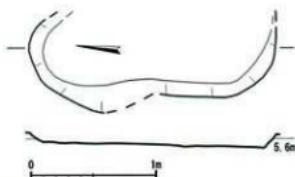


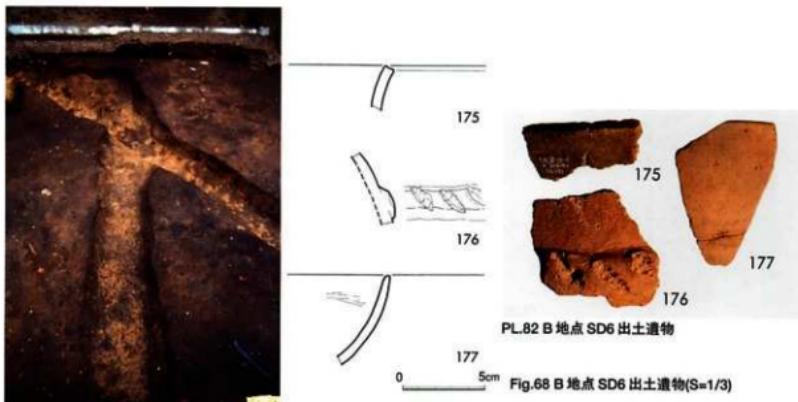
Fig.67 B 地点 SK11 断面(S=1/40)



PL.79 B 地点 SD6 完掘



PL.80 B 地点 SD5-6-7 完掘



PL.82 B地点 SD6出土遺物

PL.81 B地点 SD7完掘

Tab.35 B地点 SD6出土土器観察

No.	層	種別	器種	部位	色調	粘土		砂粒の 多さ	調整	備考
						混和材	砂粒の 多さ			
175	SD6	古墳	甕	口縁部	外面:暗灰黄2.5V5/2、内面:に赤い黄澄	粗砂:赤色粒、砂:角閃石・石英、細砂:黑色粒・透明粒	4	内・外面・口唇部:ヨコナデ、		
B	(埋土)				10YR7/4、器内:浅黄橙10YR8/4					
176	SD6	古墳	甕	胴部	外面:12.5V5/2、黄褐10YR7/4、内面:明褐色7.5	粗砂:石英、粗砂:角閃石・石英、細砂:白色粒・赤色粒、砂:石英・黑色粒	3	外面:ヨコナデ、内面:剥落、幅広突起4条、ハケによる剝削(△)		
B					YRS/6、器内:12.5V4/2-7.5YR7/4					
177	SD6	古墳	高杯	口縁部	外面:12.5V5/2、黄褐10YR7/4、内面:	砂:角閃石・石英、細砂:黑色粒	1	外面:ヨコナデ・ナデ(△)、内面:		
B					器内:浅黄橙10YR8/4	粒:透明粒		ヨコナデ・細粒(△)・ハケ(△)→ナデ、		

5-8.A・B地点5層出土遺物(Fig.69-70, Tab.36-37,

PL.83-84)

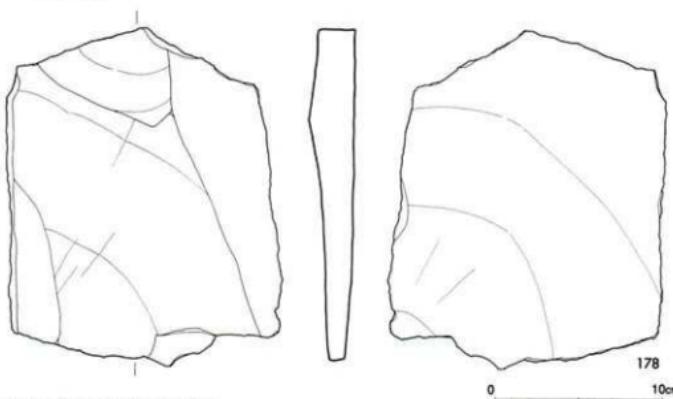


Fig.69 A地点 5層出土石器(S=1/3)

Tab.36 A地点 5層出土石器観察

No.	層	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
178	5	輝石安山岩	39.6	15.7	2.7	1085	両側面と上面に剝離面あり。

5層出土遺物はわずかであり、4b層からの落ち込みや粉れ込みによるものと考えられる。

(178)は、A地点出土の、輝石安山岩製の石材と考えられる資料である。裏面の左下端に打点をもつ。

(179)は、口唇部を面取りするという、古墳時代前半期ごろの特徴をもつて口縁部である。



Tab.37 B地点5層出土土器

No.	層	種別	器種	部位	色調	粘土			調整	備考
						混和材	砂粒の 多さ	(S=1/3)		
179	5	古墳	甕	口縁部	外面:黄褐色に類似2.SV5/3、内面:にぶい黄 粗砂・砂:石英、細砂:透明粘。	2.516/3、器内:粗7.SYR7/6。	2	内・外表面・口縁部:ヨコナデ。		
B										

6.まとめ

A・B地点の調査では、5層上面において、住居跡1基と、溝状遺構3条、性格不明土坑1基、多数のピット群が検出された。これらの有機的関係性は、明らかにできなかつた。また、正確な時期の判断が困難であるが、出土遺物の量的な把握から(Tab.38)、古墳時代後半期ごろの時期が推定された。しかし、遺構内や4層包含層中に弥生土器や古墳時代前期ごろの遺物が混じるため、近隣には、それらの良好な包含層の存在も推定される。4a-3b層は、タケなどが検出されており、キビなどの検出もあるとされる。この時期の畠作は、畑作が想定されている(付録2参照)。

また、正確な時期を判断することはできないが、4層上面において、溝状遺構3条と性格不明土坑2基が検出されている。これらの溝は、粗砂や小砾を含み、水の流れている様子が、埋土から確認される。また、平面形態の凹凸もまた、それを支持するものである。しかし、これが人工的なものであるか、自然のものであるかは、遺構そのものの形態からは判断できなかつた。これらを覆う3層は、土壤プランツ・オ・パール分析によつて、多量のイネが検出されており、また、ヨシの検出から、湿润な環境が復元され、水田の可能性が示唆されている(付録2参照)。3層と溝状遺構の埋土は異なるが、水田へと取水する溝の存在も否定できない。

2層土は、中近世ごろの時期が与えられるが、プランツ・オ・パール分析によれば、イネの検出が最も多い。遺物は、古墳時代後半期を中心とし、この地点がその

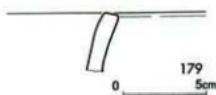


Fig.70 B地点5層出土土器

PL.84 B地点5層
出土土器

時期の活動が主となつてゐる様子をうかがひ知ることができる。ほかにも、弥生時代中期、弥生時代終末期～古墳時代前半期ごろの遺物の出土もみられる。

弥生時代中期

この時期の遺構は確認されていない。古墳時代後半期の遺物が中心となる4層に混在している状態である。大きさは、弥生時代中期前半(新)と中期後半(古)の二時期に分けられようである。入来式段階の土器は、甕、大甕、小型甕などがある。甕は出土していない。いわゆる「一の宮式」と呼ばれる甕も確認されており、この口縁部に類するものも少くない。土器胎土の肉眼観察によると、大甕などには大粒の黒雲母が混入しており、他地域からの持ち込み品である可能性が示唆される。また、搬入品と見られる須次式(甕棺・甕?)、黒髪式(甕)も認められ、地域間交流の一端が窺える。本遺跡において確認されたタイプの甕棺は、近年散発的に出土しており、金峰町下小路遺跡¹⁰、吹上町入来遺跡¹⁰、山川町成川遺跡¹¹、鹿児島市北麓遺跡¹²、万之瀬川採集品¹³などで確認されている。

打製石鏃や剥片石器も出土しているが、本来はこの時期に帰属するものであると考えられる。

弥生時代終末期～古墳時代前半期

この時期の遺構も判然としない。中津野式の甕・甕・台付鉢のほかに、東原式の甕・甕などが見られる。ほか

にも古式土師器とよばれる布留式並行期の土器も一個体確認されている。個体数としては、非常に少ない。

布留式並行の要是、畿内布留式そのものではなく、やや変容しているように見える。しかし、南九州の成川式土器様式と比較すると、薄手であり、器面調整も整調である。また、暗文を施すという観点からも、南部九州産ではなく、持ち込み品である可能性が高い。

古墳時代後半期

5層上面で検出された遺構は、住居跡の配置と、互いに切りあっている直線的な溝の配置には、特に有意な関係性を読み取ることはできなかった。

本調査地点の北東部に位置する釣田第1地点¹⁴⁾や、総合教育研究棟(総合教育研究棟[文系総合研究棟]:1999-2000年度調査:未報告)¹⁵⁾、また北西部に位置する理学部周辺¹⁶⁾の、住居跡が幾重にも切り合っている状況とは異なっている。居住域の占地する密度の違いは、一般に、生産域と居住域の違いなど、環境的な状況によるものと判断されるが、本調査地点がそれに対応するか、結論は3次調査を含めた次号以降に譲りたい。いずれにせよ、本調査地点は、古墳時代後半期ごろには、居住域としてはあまり利用されていない土地には間違いない。

A地点における笠貫式段階と考えられる柄鏡形の住居跡(SK4)は、比較的珍しい例である。いわゆるベッド状遺構と呼ばれるステップか窓穴側面の掘り込みに沿って作り出されており、その上面には深い土坑が認められ、形態とその深さから判断すれば、主柱穴であると考えられ。未発掘部分にも同様に存在するとすれば、4本の主柱建物であるかもしれない。窓穴の外側には、いくつかの柱穴が存在するが、これが支柱であるのかは判断ができない。

床面・ベッド状遺構上にも壁溝が認められる。SK4に近接する浅い土坑SK5-6は、SK4と切り合うことはなく、独立している。また、入口と考えられる掘り込み突出部と壁溝、そして屋根の想定からは、土堤の存在とSK5-6の存在が関わっているものと判断し、土堤をつくる際の掘り込みであるか、住居廐舎の際の掘穴であると判断した。

住居床面の製作工程は、まず粗く掘り込み(凹凸のまま)、その上に貼り床をしてフラットな床面を作り出し、その上で地床炉を設けている。また、炉は、住居中央部に位置し、3度のつくりかえがみられるが、鹿児島大学構内遺跡都元団地に顕著な埋設土器は残されておらず、現状では、設置していたのかは、明らかにできなかった。

直感的に考えるならば、南東部に位置する掘り込みの突出部が住居入口として認識できるが、その場合、南東

部にむけて入口をつくりだしていると考えられる。大学構内遺跡の他地点の住居跡は方形が多く、入口も判然としないものがほとんどであるが、今回の調査の、A地点SK4の入口の方向を根拠とした場合、方形住居跡もまた、そのほとんどが南東部に一辺をもち、住居輪にはほとんど大きなズレはない。したがって、可能性として、方形住居の入口もまた、南東部側にあるように思われる。

中摩清太郎氏¹⁷⁾の一連の研究では、柄鏡形住居跡(II A)は、東原式段階(古墳時代前期)から辻原式段階(古墳時代中期)にかけての存在が知られているが、笠貫式には認識されていない。しかし、II B γ、VI B γタイプの住居跡は、方形掘り込みのなかに柄鏡形の掘り込みを持つものであるが、VI B γタイプは笠貫式段階に認められている。本調査区の柄鏡形住居跡(A地点SK4)の帰属時期は笠貫式段階と考えられるが、II Aの最終段階のタイプと捉えるか、VI B γタイプの地域的な変異であると捉えるか、現在、結論は見出せない。都元団地N-T-7~10区(教育学部運動場)の発掘調査¹⁸⁾でも、類似した住居跡が検出されており、東原式~笠貫式段階の土器が出土している。

SK4付近の遺物接合状況をみると、SK4以外とはほとんど接合せず、掘り込み内部と上層の4b層とのみ接合する([98]は、住居内出土遺物ではない)。これは、住居廐舎の際に、土堤などを破壊し、一気に埋め戻した結果ではないかと判断する。4b層包含層そのものの遺物は、最大15mは移動していることから判断すると(Fig.72)、SK4埋土中の遺物出土状況と接合状況は、單なる流れ込みによるものではない可能性が高い。ちなみに比較的フラットな層である2-3層の遺物もまた、大きく移動している様子が分かる(Fig.71)。

B地点のSD5-7は、直線的な溝であるが、遺物の出土量も少なく、また、水の流れている様子も認められない。したがって、何らかの区画をする溝であると判断した。

A-B地点における遺物のほとんどが、この時期に帰属するものである。甕、壺、大壺、鉢、高杯、罐が認められる。しかしながら、これらは小さな破片が多い。

土器は、特徴的明確なものほとんどが笠貫式土器であり、並は、直状あるいは内渦気味の要で、一条の突帯を貼付するものである。突帯には貼り付けの際の指頭圧痕が明晰に残っている。並は、いわゆる幅広突帯を胴上半部に貼付するもので、突帯の沈線文などによる加飾は、バリエーションがある。しかし、今回得られた資料は、沈線文によるもののみで、竹管による刺突文などは認められなかった。高杯は、杯部が碗状になるもの認められ、罐は平底資料が得られている。どちらも古墳時代後半期の年代が示されるものである。

註

- 1)上村俊雄・金子千鶴枝 1986「第Ⅲ章 鹿児島大学埋蔵文化財調査室設置以前の調査」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』1 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 2)1995年、埋蔵文化財調査室の中村が、図書館職員よりコンテナ5箱分の遺物を譲り受けた。これは、1971年の図書館工事の際に出土したものであったという。職員の名前は記録されていないが、埋蔵文化財の保存を意識し、大切に保管していた同職員には敬意を表したい。同遺物は、現在図書館に保管されている。
- 3)本田道輝 1997「南部九州における脚台付堀の底盤成形について」『人類史研究』第9号 人類史研究会
- 4)中村直子 2003「2 那元団地 M-N-4-5(サークル棟建設予定地)における発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』17 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 5)河口貞徳 1951「一の宮遺跡報告」「考古学雑誌』第37巻 第4号 日本考古学会
- 6)出口浩ほか編 1996「北郷遺跡」鹿児島市教育委員会
- 7)本田道輝編 1986「鹿児島大学那元団地内遺跡(1-7地点)」鹿児島大学理学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 8)村上恭通・山村芳賀 2003「農耕具」「考古資料大観」第7巻 小学館
- 9)河口貞徳ほか 1976「下小路遺跡」「鹿児島考古」第11号 鹿児島県考古学会
- 10)河口貞徳 1976「入米遺跡」「鹿児島考古」第11号 鹿児島県考古学会
- 11)出口浩ほか編 1983「成川遺跡」鹿児島県教育委員会
- 12)6)に同じ
- 13)本田道輝 1996「入米遺跡(日置郡吹上町)採集の弥生土器とその位置づけ」「大河」第6号 大河同人
- 14)1)に同じ
- 15)中村直子 2001「鹿児島大学構内道路那元団地I-J-K-3~5区発掘調査概要」「平成13年度鹿児島県考古学会研究要旨」
- 16)松永幸男・坪根伸也 1986「鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報」1 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
本田道輝編 1986「鹿児島大学那元団地内遺跡(1-7地点)」鹿児島大学理学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室
本年報の第1章「I 調査概要」の2001-2 那元団地J-7-8区(理学部改修地)参照
- 17)中摩浩太郎 1999「南部九州古墳時代の堅穴住居類型の変異に関する一考察」「人類史研究』第11号 人類史研究会
- 18)中村直子 2001「付編 那元団地M-T-7-T-10区(運動場)発掘調査報告」「鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』15 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

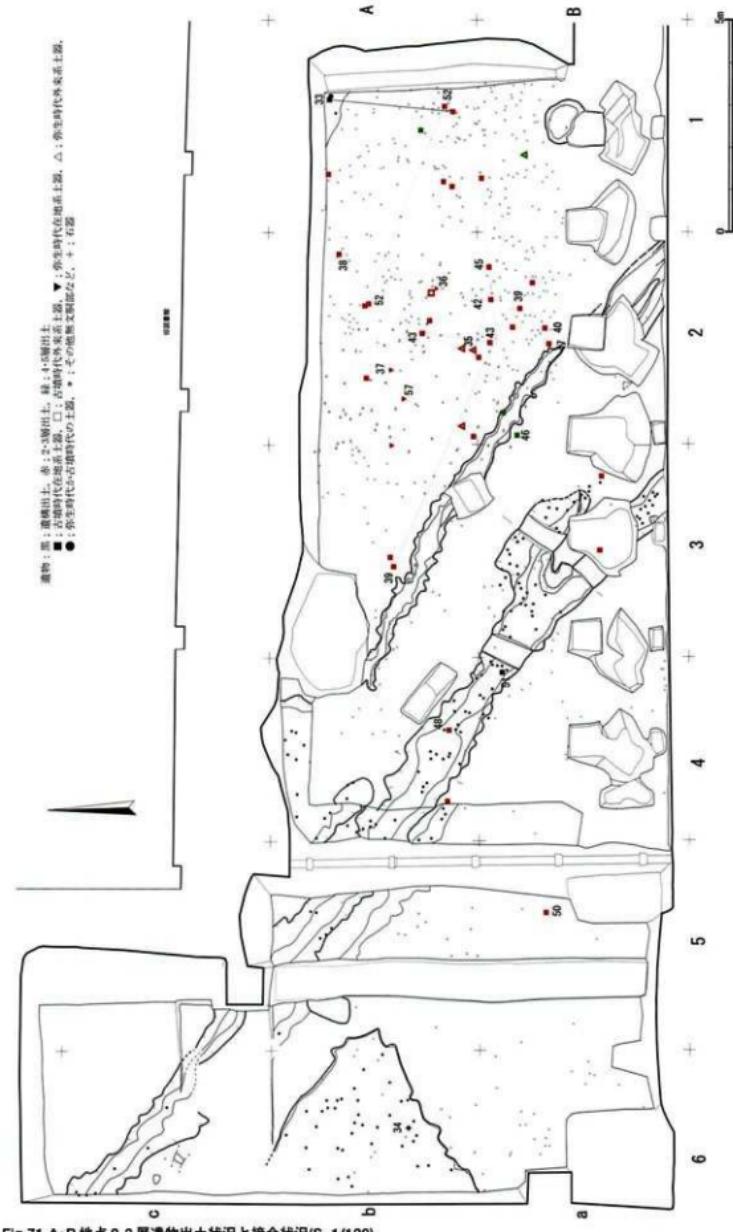


Fig.71 A・B地点2-3層遺物出土状況と接合状況(S=1/120)

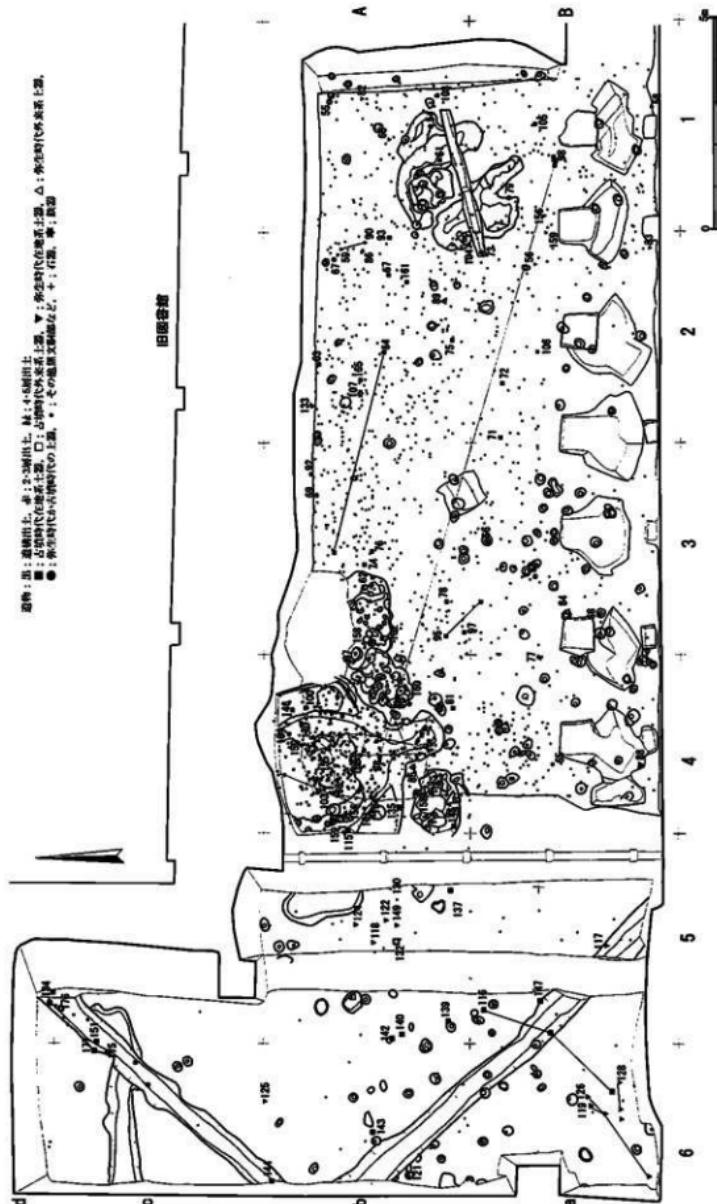


Fig.72 A・B地点 4-5層遺物出土状況と接合状況(S=1/120)

Tab.36 A・B地点遺物出土状況

時期区分	弥生時代中期					古墳時代			新出 古墳	不明	中世		近世		土器	石器	鐵器	銅器	古鏡	計		
	入水式大土器	一の宮式土器	東秩父式土器	品葉式土器	不明	中佐野式土器	喜賀式土器	吉良式土器			青銅・鐵器	鐵器	銅器	馬具	馬具							
1B								10		1				4	1						10	
2a期							1	2		1		1	1	4	6	1				1	10	
2b期								6		3	1	1			4		1				10	
3期		1	2					90		1				1							74	
4期								6													6	
4a期	3			5			4	104									1				117	
4b期	4	1	1	11			3	38		8							1	1			66	
5期																	1				1	
pH 10							1	1													2	
pH 65								1													1	
pH 66																					1	
SD 1								28													28	
SD 2										1		1									2	
SK 2										1											1	
SK 4	2	1	1	1	2	1	28			3							1	1			42	
SK 5		1								1											2	
不明						1		1	2												4	
A	火葬							1	2												3	
	不明	1																			1	
	pH 116									1											1	
	SK 4							8	1												9	
B	不明							1													1	
	1期								1		1				2						4	
	2期								1		2		3	1	7	3					16	
	3b期								3												3	
	4期								1	33											34	
	4a期								1	24											25	
	4b期	3	1	14	1	1	106	1	1								1				138	
	SD 1								1												1	
	SD 2									1											1	
	SD 3									1											1	
	SD 5								1			1									2	
	SD 6									3		1									4	
	SK 2									1											2	
	計	13	1	2	3	26	2	4	13	501	1	2	25	1	5	10	14	1	8	1	1	653

注 文献調査は除外。

付録2 郡元団地L-6区(中央図書館増築地A地点北壁)におけるプラント・オパール分析結果報告

宮崎大学 藤原宏志

先般 当該遺跡で採取した土壌試料のプラント・オパール定性分析結果が出来ましたので、下記のとおり報告致します。

記

プラント・オパール定量分析結果

同上 図

- 成川式土器包含層(3-4層)から、多量のイネ(*Oryza sativa*)が検出された。検出量からみて、この地でイネが生産された可能性が高いと判断される。
- 3層ではヨシ(*Phragmites*)が検出されており、湿润な堆積環境であったと推定されることから、水田耕作が行われていた可能性が大きい。3bおよび4a層

はタケが多く、比較的乾燥した堆積環境であったと推定され、キビ族植物も検出されていることも合わせ考えると、この時代の播種は畑作を想定するのが自然と思われる。

- 3a-4a層で検出されたイネのプラント・オパール總量から、これらの時代に生産されたイネ耕總量(10aあたり)を算出すると、約33.5t/10aとなる。当時の年間イネ耕生産量を約100kg/10aとすると約330年間ほど播種が行われたと推定される(ただし、当時の耕作が規則であったと仮定して)。

Tab.39 プラント・オパール定量分析結果

宮崎大学 遺跡における プラント・オパール定量分析結果

宮崎大学農学部 農作業管理学研究室

層名	sampling block [L-6]		植物体乾重 (t / 10 a. c m)				
	イネ (O.sat.)	イネ耕 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亞科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
2	19.503	6.833	25.290	11.484	0.000	0.796	1.799
3a	6.715	2.353	2.144	0.973	2.435	0.337	1.089
3b	4.271	1.496	13.292	6.036	0.000	2.615	2.477
4a-1	1.535	0.538	12.743	5.787	0.000	3.593	1.727
4a-2	3.015	1.056	26.808	12.173	0.000	1.758	1.453
4b-1	0.314	0.110	5.207	2.364	0.000	0.819	1.985
4b-2	0.000	0.000	9.286	4.217	0.000	0.183	1.101
5	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.087	0.000

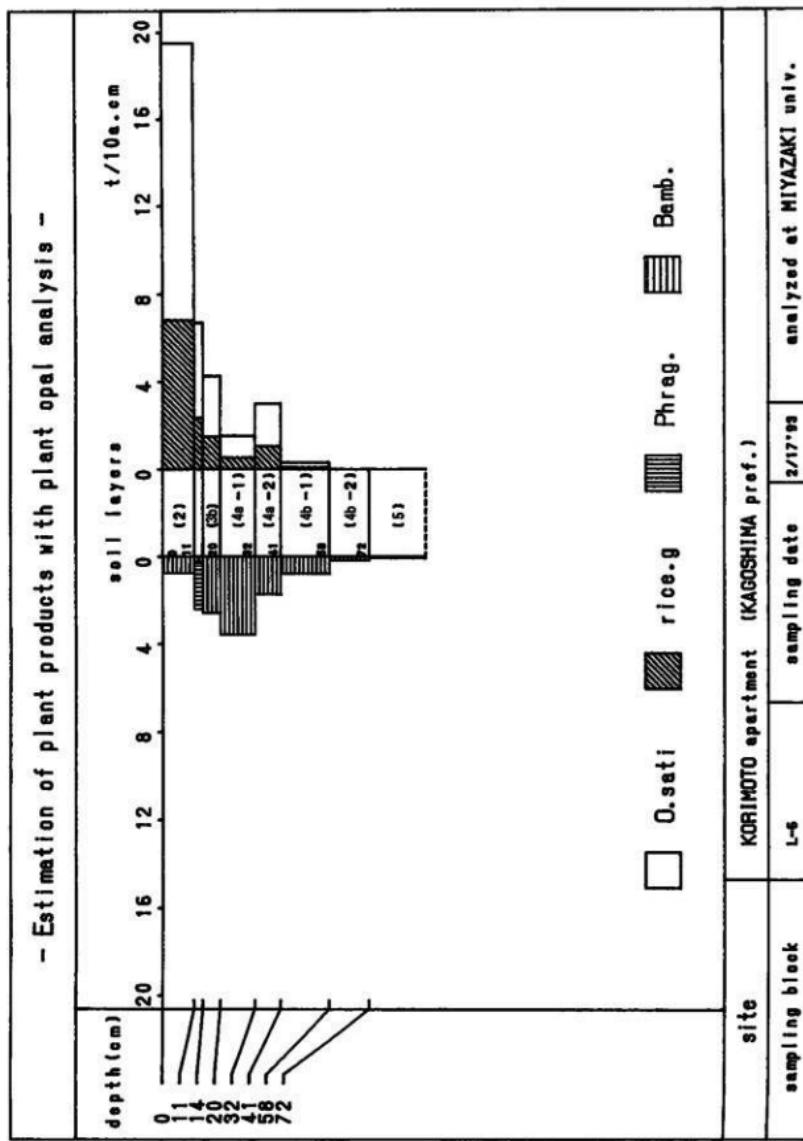


Fig.73 プラント・オパール定量分析結果

Tab.40 生産量推定結果

鹿児島大学 I L-6 (2/17'93 sampling)									
	層名	厚さ (cm)	層厚 (cm)	GB数/ σ	植物名	PO/G·B	PO数/ σ	板比重	PO数/c (t/10a·cm) (t/10a·cm)
[-2]	0 11	301328	イモじ ヨシシ タスキ	22 / 186	51824 16195 0 6 7	1.280	66335 26730 0 11337 11337	19.903 10.000 0 16884 14531	6.453 11.464 0 0.786 1.799
[-3a]	11 3	307881	イモじ ヨシシ タスキ	13 / 191	20985 16112 3224 4448 8000	1.090	22841 1757 3514 7028 8785	6.715 1.000 2.435 0.397 1.049	2.353 0.973 2.920
[-3b]	14 6	312316	イモじ ヨシシ タスキ	8 / 172	14536 10895 50 11	1.000	14526 10895 0 13974	4.271 6.000 0.000 1.997	1.496 6.977 36.214
[-4a-1]	20 12	318039	イモじ ヨシシ タスキ	3 / 180	5023 6 0 43	1.040	5223 10425 0 71977	3.535 6.000 0 74856	0.538 5.757 69.439
[-4a-2]	32 9	308579	イモじ ヨシシ タスキ	7 / 194	11035 23637 0 29 6	0.930	10284 21979 0 38379 128601	3.015 18.000 0 34623 117159	1.086 12.173 0 0.790 1.453
[-4b-1]	41 17	308712	イモじ ヨシシ タスキ	1 / 217	1423 5581 0 15 15	0.750	1087 4288 0 22762 21340	0.314 4.000 0 17072 16003	0.110 2.364 0 0.619 1.985
[-4b-2]	58 14	301831	イモじ ヨシシ タスキ	0 / 207	0 6 0 3 7	0.870	0 7611 0 4374 10207	0 6.000 0 3880 8880	0.000 4.217 0 0.183 1.103
[-5]	72	302698	イモじ ヨシシ タスキ	0 / 177	0 0 0 1 0	1.060	0 0 0 1710 0	0 0 0 1813 0	0.000 0.000 0.000 0.000 -----

SUMMARY

This is the report of the archaeological excavations and surveys in Kagoshima University Korimoto Campus conducted by Kagoshima University Research Center for Archaeology in the fiscal year 2002 from April 2002 to March 2003. This volume also includes the report of the excavation, and plant opal analysis of samples from Area L-6 carried in 1992 to 1993 in Korimoto Campus.

Excavations in Korimoto Campus

The center made three rescue excavations in 2002. One is the excavation of the site of Faculty of Science Building(Area J-7・8) carried from March to October 2002. The excavation revealed the village that belonged to the late Kofun period (6-7C). The excavation of this village uncovered approximately 80 houses overlapped, many pits, and a ditch. Under the Kofun layer, we found a large ditch containing artifacts of the early middle Yayoi period. This means there was a village of that age.

Another excavation was made at the site in Faculty of Engineering Building(J・K-9～11) Korimoto Campus next to Area J-7・8 carried April to October 2002. This site is a paddy field in the early Yayoi to the 11th century.

The center also conducted a rescue excavation of the site in Area H-12・13 from March to August 2003 before the construction of Venture Business Laboratory(VBL). Eight ancient rivers were found. Rivers no.1 to 3 belong to the Ancient to the medieval periods. Rivers no.4 to 8 are belonging to the late Yayoi to the late Kofun periods. We found about 40 wooden piles used as the irrigation facilities in Rivers no.4-7. A sample of the pile was dated cal AD130 by C-14 dating. There found many shards, a stone reaping knife, arrow heads, and a whetstone.

Surveys in Korimoto and Sakuragaoka Campuses

24 surveys were conducted by the center in two campuses. The survey at Area I-8・9 and I-8～10 in Korimoto Campus revealed the same situation as that of Area J-7・8. Areas I-8・9 and I-8～10 are so important to require the future wide excavation for the reconstruction of human activities in the Yayoi to Kofun period in this region.

Appendix1: Excavation of Area L-6 in Korimoto Campus

The center excavated the site (Area L-6) of the central library before its extension from January to September 1993. The excavation revealed cultural remains and artifacts in the second to the fourth layers there. A house, three ditches and many pits were excavated on the surface of the fifth layer of the late Kofun period. Many sherds, stone arrowheads and stone tools were also found in the same layer. The house found here measures about 6m in diameter and 0.5-1.0m deep. A furnace is located in the central part of the floor. Red ochre is distributed on the floor. We also found three ditches west of the house, and many pits in the excavated area. Their functions are unknown. There found a lot of sherds, and various stone tools including a pumice implement, arrowheads and a reaping knife that belong to the middle Yayoi and the late Kofun periods. A socketed iron axe was also collected here.

Appendix2: Plant opal analysis of the samples from Area L-6 in Korimoto Campus

In Area L-6 in Korimoto Campus, we found a lot of the plant opals of rice (*Oryza sativa*) and those of *Phragmites* in the upper layers of the late Kofun period. In the lower layers of the same period, we found a lot of the plant opals of rice and those of bamboo and Pani. Pani seeds were also found in the same layers. According to the plant opal analysis, they cultivated land rice at first and then sifted to the wet rice cultivation.

報告書抄録

ふりがな	かごしまだいがくまいそうぶんかざいちょうさしつねんぼうじゅうはち						
書名	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報18						
編著者名	新里貴之(編)						
編集機関	鹿児島大学埋蔵文化財調査室						
所在地	〒890-8580 鹿児島県鹿児島市郡元一丁目21番24号 TEL 099-285-7270 FAX 099-285-7271						
発行年月日	西暦2004年3月						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査起因
かごしまだいがくまいそうぶんかざいちょうさしつねんぼうじゅうはち 鹿児島大学構内遺跡 こおりもとだんち 郡元団地 L-6区	かごしましこおりもと 鹿児島市郡元 いっとうもと 一丁目21番35号	4620	31° 34' 09"	130° 32' 42"	19930120~ 19930910	310	建物増築
所収遺跡名	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鹿児島大学構内遺跡 郡元団地 L-6区	弥生 古墳 中近世	住居跡 溝状遺構 土壤 ピット	土器 石器 鉄斧 陶磁器			古墳時代後半期の 住居跡	

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報18

2004年3月発行

編集・発行 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

鹿児島市郡元一丁目21-24

TEL 099-285-7270

印刷 潤上印刷株式会社

鹿児島市樋之口町6-6

TEL 099-225-2727

Kagoshima University Research Center for Archaeology Report Vol.18

CONTENTS

Chapter

1 Report of archaeological research in fiscal year 2002 ······	1
2 Report of rescue surveys ······	6

Appendix

1 Report of the excavation at Area L-6 in Korimoto Campus ······	25
2 Report of the plant opal analysis of excavated samples from Area L-6 in Korimoto Campus ······	75

Published by

**Kagoshima University Research Center for Archaeology
2004**